

世界を征する霸塙の拳

ガリアムス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は戦国時代。

一人の武道家の命が尽きようとしていた。

其の男は、最強に憧れ、最強を目指し、最強となるため研鑽を重ねた。
だが不運にも流行りの病魔：結核に犯され、倒れたのだ。

死の淵で男は願った。

『我が流派霸壠流を天下に轟かせたかった』…と。

そんな男の願いを、気紛れな神は汲み取った。

四百年後、男は覚醒する。

与えられた好機に感謝し、自らの野望を達する為に戦う。
これは日本の裏格闘技界の一つ、拳願仕合に生き、『霸皇』^{はおう}と吟われた一人の武道家の物語である。

※原作改変が入るため、キャラクターの印象などが大きく変わる恐れがあります。ご注意下さい。

※霸王→霸皇に変更しました

目

次

第一章 始動篇	第一話 転生 (てんせい)	第二話 釘撃 (くぎうち)	第三話 組手 (くみて)	第四話 共有 (きょうゆう)	第五話 水中 (すいちゅう)	第六話 奥手 (おくのて)	第七話 繼承 (けいしょう)	第八話 遠征 (えんせい)	第九話 褐色 (かつしょく)	第十話 縦拳 (たてけん)	第十一話 流星 (りゅうせい)
	78	68	59	49	42	34	24	14	5	1	

第十二話 本物 (ほんもの)	第十三話 沖縄 (おきなわ)	第十四話 怪腕 (かいわん)	第十五話 圧倒 (あつとう)	第十六話 觀察 (かんさつ)	第十七話 穴熊 (あなぐま)	第十八話 魔槍 (まそう)	第十九話 嶺山 (げんざん)	第二十話 羅刹 (らせつ)	第二十一話 回転 (かいてん)	165	88
157	150	145	137	130	123	116				106	97

第二十二話 回答（かいとう）

第二十九話 再会（さいかい）

172

第二十三話 鋼打（はがねうち）

第三章 集結篇

184

第二十四話 剛烈（ごうれつ）

第三十一話 必殺（ひっさつ）

191

第二十五話 鷹村（たかむら）

第三十二話 拳闘（けんとう）

203

第二十六話 拳願（けんがん）

第三十三話 雄叫（おたけび）

215

第二十七話 勝者（しおうしや）

第三十四話 共闘（きょうとう）

225

第二十八話 流転（るてん） —

301

第三十五話 刹那（せつな） —

237

290

第三十六話 勝利（しょり）

280

第三十七話 共和（きょうわ）

271

第三十八話 共和（きょうわ）

260

第三十九話 共和（きょうわ）

251

244

第三十六話 教授（きょうじゅ）

313

第三十七話 少年（しおうねん）

320

第三十八話 王馬（おうま） |

329

第三十九話 一族（いちぞく）

348

第四十話 女傑（じょけつ） |

363

第四十一話 感触（かんしょく）

373

第一壱章 始動篇

第一話 転生（てんせい）

無念でしかなかつた。

自分ともあろう者が、流行り病に倒れるなどと、これまで考えた事も無かつた。
呼吸が苦しい…おそらく、後一時間もしないうちに死ぬだろう…。

死ぬことは怖くはない。

どんな命も必ず消え、神の袂か地獄の底かへ導かれるのみ。
頭を過るのは人生の殆どを捧げた修行の日々。

最強に憧れ。

最強を目指し。

最強となるために、研鑽を続けた。

人生は素晴らしいあつた。

だが…そんな中で心残りがあるとするならば。
「…はかりりゆう」
霸堺流。私が産み出した武術。…天下に、名を…轟かせ…たか…つ…

そうして、俺の息は切れた。

時は戦国時代。

一人の武道家の命が激動の時代の影で、静かに消える。

はずだつた：

* * * * *

* * * * *

* * * * *

『中』と呼ばれる、東京の面積とほぼ同じ広さを持つ地域がある。第二次世界大戦後の混乱期に生まれ、警察が武力介入を行うも失敗・事实上放棄したとされる『無法地帯』。

「あつ…あつ…あつ…」

此所はそんな地域の一つで『二虎』と呼ばれる場所。

閑散とした廃墟の中の一角に、積み上げられた人の山。

其の天辺に『一人の少年』が血塗れで座つてゐる。全身には、打撲傷や切り傷が見え、所々内出血で青く腫れている。

そして歳は10にも充たない、言つてしまえばガキンチョなのだ。

「…………『思い出した』…………」

少年は物心付いた頃から、この場所ニ虎に居た。

自分が何者なのかも、両親は何処に行つたのかも分からぬ。
そして少年は知る。弱肉強食の中という世界を。

生きる為に少年は盜みを働いた。

金目のもの、食糧、水……とにかく自分が生きる為に、他者から奪い、生き続けた。

ある日、彼は何時ものように生きるために金を盗んだ。だが、彼が盗んだ物の持ち主は、二虎の中でも名の知れた組織が、拡大の取引の為に用意した金だった。

少年は連中に追われ、捕まり、棒や拳で撲られ、蹴りを入れられた。

薄れゆく意識の中、追い打ちとばかりに空のビール瓶を頭に受けた時：少年は『覚醒』した。

自分の前世の記憶と、培つてきた武と技の全てを『思い出した』のである。

其処から先は圧倒的で、一方的なまでの『蹂躪』。

殴つた相手を投げ飛ばし、腕や脚の骨を碎き、破壊した。そして増援に駆け付けた者

達も全て戦闘不能に追い込み…少年は生き延びた。

殺らねば殺られる…其処には言い訳も、へつたくれも無い。在るのは強いか、弱いかの、二つに一つの答えだけ。

荒い呼吸を調え、曇天の空を見上げて。

少年は静かに。心の中で感謝した。

「まあ…取り敢えず、傷を治さないと…か。やれやれ、修行をするにも色々足らないな

…」

倒した連中の服をひつぺがし、包帯代わりに負傷箇所に巻き付けて止血する。

これは後に。拳願仕合において『霸皇はおう』の通り名で知られる事になる男の、始まりの物語である。

第二話 釘撃（くぎうち）

俺の名は、鬼灯ほおずき_{てる。} 照。

今は子供だが、前世は武術家として最強に至るために研鑽を続ける身だつた。一つの物を極める…そんな果てしなく、終わり無い道を歩いていたのだが、道半ばで流行り病に倒れ、悔しい思いを味わつた。

…とは言つても、齡九十九まで生きたのだから、ある意味で大往生とも呼べるが。しかし…無念を抱えて死んだ俺をどう思つたのか、神様は、前世の記憶を引き継がせたまま、赤子に生まれ変わらせたのである。

《さて、どうするか…》

心中を整理して、ふかふかした腰掛けから立ち上がる。

今居るのは、前回ボコボコにした組織が使つていた建物の一室。既に敵方の大将は逃げており、裳抜けの空になつた此の場所。

幸運な事に塗り薬や包帯、綺麗な水が備蓄されていた。

戦いで受けた傷を癒し、何か食べられる物は無いのかと探してみる。

「…何だこれは？」

台所らしき空間に、複数の銀の筒が山で積まれているのを見つける。手に取り、軽く叩いてみるとコンコンと良い音を鳴らし返す其れに、俺は興味を示した。

しかし…

「…………解せぬ」

食糧であるのは分かる。だが、此の筒の開け方が全く分からない。
反音から鉄のような硬度を持つのも明らか。そして生半可な攻撃では、傷すら入らないのは必然。

『普通ならば』、諦めるだろう。

「ふつ…残念だつたな。俺に『硬度』は、意味を成さない」

手頃な台を押してきて、銀筒を一つ乗せる。

距離を作り、身体重心と左構えの拳、呼吸を調整。

こうゆう単純に『硬い』物には、最も最適な『技』が我が^{俺の}_武流派にはある。

「参る」

一拍の呼吸。

爪先で地面を弾く要領で運足。

肩と腕の筋肉を弛緩から一気に緊張へ。
そして。

「覇堺流 釘撃」

技を放つた。

銀の筒は、渾身を撃を受けたにも関わらず、一切の『変形』をしていない。自分が子供だというのもあるだろうが、其れを差し引いても十分な硬度である。

「…『響いたな』銀筒よ。お前の『内側』に」

刹那。大砲が放たれたが如く銀の筒は『爆ぜた』。辺りには筒の中身であろう物が、ぐちゃぐちやに散開し大惨事と成り果てる。

無論、自分の顔や拳、服にもそれは盛大にぶちまけられた訳で。

「うん…やりすぎたな、これは」

床に落ちた物を拾い、食う。食感は焼き魚のようだが、その実、甘露煮の味を感じる。何とも不思議な食感だ。

「味は悪くない…中々活けるじやないか」

そうして、他の銀筒にも釘撃を叩き込んでは盛大に破裂させ、その度に汚れる嵌めになつた。味は旨かつたので、差し引いても文句はない。

「開け方…習わなきやなあ」

部屋の掃除と着替えをしつつ、明日からは前世でやつて来た修行を行ながら、銀筒の開け方を探しにいくことを決めた。

* * * * *

鬼灯 照の朝は早い。

起床後は先ず身体を洗い、身を清める事から始まる。身なりは常に調える事で、武の神への感謝をうんぬん…と彼は心中で決めていた。

今日の朝飯は戸棚の中にあつた、ふわりとしつつも四角く柔らかな『パン』なるものを食す。旨いことには旨いのだが、どうも噛む度に口の中の唾液を持つていかれるので相性が悪い。

「やはり麦飯のほうが良い。あとは焼いた小魚と卸した山芋と納豆、山菜の漬物が有れば尚良いのだが…贅沢だな」

そんな言葉をぼやきつつ、ぱんを三枚ほど食べ終え、水を一杯飲む。
床に腰を下ろし、襷を組んで目を綴じる。

霸堺流は『攻防の衝撃を相手の表面に与え、体内に浸透・沈殿させ、骨や筋を芯から破壊する』事を極意としている。

故に、力の流れや衝撃をより良く、より深く伝える事は実戦に於ては必須だ。

『呼吸・浸透・伝達…。呼吸・浸透・伝達…』

一拍の呼吸を通じ、一動の心の音を聞き、一通の伝達を知り、全身の力の流れを感じ取る。

人体も物質も同じ…其処に在る『芯』へ、表面から最も通る衝撃を浸透させ、内側まで徹し、壊して倒す。

どんなに硬い鎧を纏おうと、歳月を掛けた鍛練で間接や骨を鍛えようと、其処から『芯』を失えば、容易く崩れる事を鬼灯照は知っている。

『最強となり、覇堺流を天下に轟かせる』：照の野望は唯一つ。野望成就の為、彼の戦いは始まつたばかりだ。

* * * * *

禪を終えた照は、腕に数個の銀筒を抱えて、建物の外に出る。閑散とした廃墟の街並みは、異様な静けさと腐敗臭が漂い、正常な思考を阻害する。

『……嫌な感じだ』

常在戦場：頭に浮かんだ言葉である。馴れたくは無い匂いに顔を叱め、辺りを見渡す。

『……何人か、近くにいる。敵意は無いが：味方でもない』

前世に修行の一環で高陵列なる高い峰に山籠りしたことがある。過酷な環境と気象の変化、腹を空かせた肉食の獣が闊歩する世界を生き抜く為に、全神経を研ぎ澄ました。其の感覚は今も根付いている。

「此処は『あの歩法』を使って移動しよう」

照は走る構えを取り、踏み出し、跳躍する。

着地の時は爪先から入り、踵を地に付けるのは『一瞬』のみ。

照の走る速度が段々と速く、跳躍距離もどんどん延びてゆく。

「よし……この感じ。感覚はちゃんと覚えているか」

霸塙流　いなごとび　山岳地帯を生き延びる為に身に付けた、霸塙流・運足歩法の一つ。

人間は走つたり、戦つたりすると、何らかの形で膝に負担が掛かる。

←

負担が掛かると、それを補い、動かすために体力を消耗し、結果的に動きが鈍くなつ

てゆく。

←

ならば、膝に負担が掛からない走り方や、運足なんかをやれば良いじゃないか。

←

と、このような過程を踏んで生まれた跳躍歩法：其れが蝗跳である。幸い此の辺りは

障害物も転がつており、この歩法を活かすには打つてつけの環境だった。

神経を研ぎ澄まし、人の気配が少ない道を跳ね走る。

通り過ぎる者達に当たらぬよう、跳躍距離や脚への力を入り抜きしつつ、巧みに身を躊躇する。

何より俺は、この歩法をして跳ね回っている時間が、楽しくて、愉しくて仕方無いのだ。

「はははっ、本当に楽しい。こいつは」

更に速度を上げて、建物の壁を蹴り、三角飛びの要領で上へ上へと登る。屋上を走り、建物の間を跳ね、空を飛んだ。

「おおおおおおおおおおおおおおー————!!!!」

風を全身に浴びて、大の字に身体を限界まで伸ばす。廃墟の街並みと、行き交う者達を見下ろす景色は、在る意味で良い気分だった。

『この時までは』

「……………やらかした」

着地出来る手頃な建物や足場が一切無かつた。跳ねるのに夢中で周りを見ていないという、馬鹿にも程がある失態。

長い時間を掛けて作られた脚は、どつしりと大地を踏み締め、男の存在をより強く、より大きく見せつけている。

「一目で解る。この男は…『とんでもなく強い』。

「あ、オツサンは…？」

「おいおい、オツサンはねーだろ。オツサンは。おにーさんだガキンチョ。あと、名乗るなら自分から名乗んな。

…あいや、此処は『中』だし、お前にや名前なんて…」

「…鬼灯 照。俺の名前。名乗ったよ、オツサン」

一人ぶつぶつ何か言い始めたので、名乗つてやつた。何か馬鹿にされたのが気に食わない。

そんな俺を見て、男は少し驚いた顔をしたが、直ぐに先程の顔に戻った。

「…ガキンチョのくせに一丁前に良い名前してるな。んじや俺も名乗ろう。

俺は『十鬼蛇^{ときたにご}二虎』。二虎さんとか二虎に一さんと呼ぶと良い」

これが、俺と二虎さんの出会い。

そしてこの出会いが、俺の『中』と呼ばれる世界で様々な人々との交わりと、俺の堺流が更なる進化を遂げてゆく、始まりでもあった。

第三話 組手（くみて）

十鬼蛇 二虎…生まれ変わったこの世界で、俺が初めてまともに話した男の名前である。

「んでだ。照、お前は何で空から降ってきたんだ？」

「あ、実は…銀筒の開け方が解せなくて」

そう言つて思い出したのは、自分が蝗跳で銀筒を放り出して、何処かへ落としてしまつたこと。目的を忘れた自分を呪いたい。

「銀筒？…さつき、どつかから飛んできた…いつか？」

二虎が投げ渡したのは、自分が持つていた銀筒達。

「あ、ありがとうございます…ございます」

「因みにこいつは『缶詰め』つつう、食料品の一つだ。本来、こうゆう缶切り使つて開けるのが当たり前なんだがな」

銀筒：改めて缶詰めを受け取り、早速あの方法で開けることにする。理由は『他にも』在るのだが：先ずは近くに転がっていた四角い石を持ってきて、缶詰めを上に乗せる。「おい、照。何するつもりだ？」

「缶詰めを開けるんです」

「…いや、缶切りがあるんだが」

「えいっ」

「話聞けよ」

呆れた顔で二虎は照の襟を掴みに掛かろうとした。其の刹那、爆弾が起爆したかのような轟音が響く。ほぼ同時に、それも反射的に、二虎は構えを取つていた。

視線の先には、先程まで置かれていた筈の缶詰めが、爆弾で吹き飛ばされたような、バラバラの残骸になつて転がつていた。

まるで内側から爆破されたようなそれを、二虎は見る。

明らかに『異質な打撃』：必然、照に対する警戒が強くなる。

「…思つた通り。二虎さんつて『武』を使えますね？」

空気がヒリヒリと張り詰め、少年はぬるう…と。不気味な雰囲気と氣質を纏い、立つ。

「何が狙いだ？…照」

「…『組手』。其の相手をしてくれますか？二虎さん」

「そりやまた：何でだ？」

構えたまま二虎は警戒を弛めず、体幹と視線を常に照と対極になるように動かしている。

照もまた、二虎と同じように対極を維持しつつ、左手左足の構えを取り、向き合う。そして質問に対する自分の答えを述べた。

『貴方のような、強い相手と戦いたい』

子供らしい、とても単純明快で。だが、とても清々しい回答に、二虎は思わず微笑を溢す。

「そつちが申し出たんだ、手加減は出来ねえぞ？」

「ええ。組手はどちらかの『戦闘不能』で終了で良いですか？」

「問題ないな」

二人の間を取り巻く空気が歎り出す。

静寂に支配された空間は、真剣を構えた侍同士の一騎打ちに似ていた。

刹那、突風が吹き荒れ、照が釘撃で壊した缶詰めの残骸が音を鳴らした瞬間。両雄は、激突した。

* * * * *

両雄激突。

鬼灯 照と十鬼蛇 二虎の戦いが始まった。

「ふつ!!」

先に仕掛けたのは照…接近してきた二虎に対し、霸塙流の歩法である『蝗跳（いなと）』を使い、適切な距離感を測りながら、同時に搅乱を行う。『俺と二虎さんの体格は天地の差がある。まともに戦うと、地力は此方が圧倒的に不利。だからこそ…』

――持てる全てを使うツ!

二虎は此方の動きを見ている。否、見ているのでは無い…『観てている』のだ。やはり、初めて見る運足だからだろうか。

「…成程な」

「！」

何か『解った』かのような発言で、ニンマリと悪い顔で二虎は笑い、そして言つた。『照。お前の其の運足…『踵を一瞬しか地面に着けてないな』? 見たところ…膝に負担を掛けず、地面を蹴つた際に発生する運動エネルギーを利用して、跳躍や速度を向上させているみたいだ。』

しかも『膝で力の入り抜き』を行うことで、飛ぶ距離や速さに変化を与えて、搅乱なんかも可能にしている。…お前、本当に子供か?』

「あんたは化物か？」と、言い返してやりたい。然し、見ただけで蝗跳の原理に気付いた当たり、ニ虎は相当数の実戦をこなしてきているのが分かる。

「ま、それは後で聞くとするか…な！」

刹那、ニ虎が動く。しかも其の動きは…。

「なつ…!? い、蝗跳!」

『似ている』——俺の運足歩法 蜂嶺流 蝗跳に。不規則な足運びをしながら動き続け、いつの間にかニ虎が『複数人に分裂した』かのような幻影が、自分を囲むようにして包囲網を作つていたのだ。

「へえ、蝗跳つうのか。其の運足の名前は。俺の『火走』ひばしりとは、ちよいと原理は違うが、似てはいるな」

「なら…攻めるだけ！」

動く。蝗跳の跳躍でニ虎の上を飛び越して、包囲網を脱出した。着地と同時に蝗跳で地面を蹴り、ニ虎に接近。

「ありや？ 思つた以上に」

「…参る！」

肩から腕の筋肉を、弛緩から一気に緊張へ。

相手や物体の表面に打撃を叩き付け、内側に衝撃を浸透させる。放つは蜂嶺流の基礎

たる技

『霸壠流』
はかいりゆう
くぎうち。
釘撃

「あ、本氣で殴んないほうが…」

ドゴッ!!

「……………い”くつづづづづ!?」

「…ありやりや、遅かつたか」

放つた筈の右拳が『痛い』。皮膚が裂け、血が飛び散る。骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げている。

《何だ…!!今…!!》

釘撃は二虎の腹部へ確かに入った。だが直撃の瞬間、二虎の身体が『硬く』なったのだ。

思わぬ返し手カウンターで右拳にダメージを貰つた照を見て、二虎は言つた。

「今のは『不壊』ふえっていう技だ。相手の打撃に対して、全身の筋肉を引き締めて、衝撃を通りにくくす

ドスン——!!

「ん、お…!?」

体勢が一瞬崩れる。照の打撃を受けた部分：其れも『内側』から響いてきた。

「あ、入つてた！」

「…すげえ『打撃』だな。不壊の防御を通り抜けて、体内で炸裂する衝撃。…爆弾抱えるってのは、こうゆう感じなのか」

スツと体勢を立て直す両者。再び照は蝗跳を使い、二虎もまた火走で距離を詰めに掛かる。

「ハアッ!!」

「シイツ!!」

拳が激突。だが体格差で勝る二虎に打ち負け、右拳から血を出しながら吹っ飛ばされ、地面を転がされる。

「くそつ！滅茶苦茶硬いし、物凄く痛い…！」

『鉄碎』で殴ったが、やつぱり響くな其の打撃

ニ虎が繰り出したのは、先程の不壊を拳に対して行い、殴る鉄碎と呼ばれる技。筋肉を引き締めることにより鋼鉄と化した拳は、岩を砕き、鉄に拳の型すら残す。

其の打撃を以てしても、照の技：釘撃の衝撃を消し去れない。其れ所か、腕と腹部には今もダメージが『入り続いている』。

《相性が悪いな…長引けば確実に影響が出る》

故にニ虎は、早期決着を狙う。照もまた、同じ考えに行き着く。両者、三度の接近。

二虎が右拳を振り構え放つた時、照は二虎が鉄砲を放つた瞬間に躱わし、釘撃を腕に叩き込んで破壊する算段を付けていた。

『さあこい——腕を、確実に貰う！』

これが。二人の最初の組手に於て、『決定打』となつた。

「……まだまだ、だな。照」

「——えつ」

受け止める瞬間、二虎が放つた拳を『止めた』のだ。

其れだけならば、まだ対処は出来ていただろう。

其処から彼は、地面を滑るようにして照の横を通り過ぎ、両手で首の気管と静脈と動脈を掴み、背中に乗せる形で『絞め上げた』のである。

其れも僅か『1・2秒』という、目にも止まらぬ早業だった。

『首断』：チエツクメイト

「がつ……!?あ、ぐ……」

抵抗を試みるよりも早く、照の意識は真っ暗な闇の中に溶け落ちて行つたのだった

。。

* * * * *

「……………ん、ううつ…はつ!?」

「よ。どうやら目が覚めたみたいだな? 照^事」
覚醒した照を見下ろすように、ニ虎が丸太に座つて焚き火を焚いていた。空は既に薄暗く、空の鶲がガアガアと鳴く声が響く。

「……………負け、たんですね…俺」

「ああ。負けたな、お前は」

素直に現実を受け入れるしかない。

今自分の力、そしてニ虎との実力の差を。

「…『50点』だ」

ふと、ニ虎がそう呟く。

「運足と瞬発力、力の入り抜き、技のキレ。

そして、防御不能の貫通と直撃箇所にダメージを与え続ける摩訶不思議な打撃。
この歳でこんだけの技術^事が出来ている…ぶつちやけ、お前は『強い』。
だが、技のキレや特殊な打撃が使えても、そいつが真に『身』に付いてねえ。
解りやすく、簡単に言うとだ。自分の身体と感覚に『ズレ』がある。どんなに強くて、

すんげえ技術を持つてようと、其れが直らない限りは満足に力は出せないぜ」

二虎の言うことは最もな意見であり、前世の記憶が覚醒したとは言え、強くなつた訳ではない。体格差のある相手には打ち負けるし、技の威力も本来ならもつと出る筈なのだ。

「ま、口で言つても理解するには時間も掛かる。そこでだ照。お前：俺の『弟子』になれ」
「はい？」

唐突な命令に照は言葉を失う。

「お前の武術には興味がある。代わりに俺も教えてやる。

俺の武——『二虎流』をな」

第四話 共有（き）ようゆう）

二虎との組手をし、唐突な弟子入り命令をされた日の夜が開けた。

「お、逃げずに来たな。照」

「自分の為にも、教授は受けたほうが良いと考えました。よろしくお願ひします、二虎さん」

「いや、先ずは色々説明しなきやならないな。照、こいつを見ろ」

二虎が小枝を片手に、地面に何かを書き始める。四角形を描き、それぞれの角に円を描くと、内側に『操流』・『火天』・『金剛』・『水天』の文字を記す。

「俺の武術、二虎流には『四つの系統 + α 』がある。昨日、お前との組手で見せたのは、火天かてんと金剛こんごう、そして水天すいてんの三つ」

枝の先で火天、金剛、水天の部分を指す二虎は、続けてそれぞれの系統の特徴を話してゆく。

「最初に説明するのは『金剛ノ型』。こいつは二虎流の中でも筋肉を硬化させる型で、攻

こんごうのかた

防に大きく関わっている。

昨日、照の打撃を防いだ不壊と殴りに使った鉄碎は、この金剛ノ型の技だ。

次は『水天ノ型』で、金剛が硬化なら水天は弛緩や脱力に関係する型。極めや絞め、関節技なんかも、水天の分類にある。

「じゃあ、昨日の決め手になつた首断は水天ノ型の中にある技の一つ…という事ですか」「まあ、そうゆうことだ。んじや、話を続けるぞ。

『火天ノ型』は移動や運足に関係する型。攻撃性は持ち合わせては居ないが、他の型と合わせる事で真価を發揮する。

最後に『操流ノ型』。読んで字のごとく、力の流れを掌握して支配する。ただし、操流

ノ型は精密な動きを行うから、金剛ノ型と併用して使うことは出来ない。

あとは『無ノ型』って言うのがあるが、今回は保留にしておく。以上、これが二虎流つて訳だ』

説明を終えた二虎。照は描かれた系統を見ながら、凄まじい武術だと心の中で思つた。四つの系統は一つ一つの観点から見ても、実戦で十分に通用する。
もしも、これら全てを極める事が出来たのなら…と、今は遠い未来を想像してしまう。

「じゃ、照。お前の武術を教えてくれ」

「分かりました」

二虎から小枝を受け取り、地面を紙に見立てて筆を走らせる。書いたのは、自分の流波にして、前世で創り上げた武術『霸堺流』。

其れを大きく括るようにして、『釘撃』・『槍撃』・『蝗跳』・『蛇縫』『反乗』・『凱甲』と技を次々に書いていった。

「では、説明を。自分の武術『霸堺流』は『自分や相手の攻撃による衝撃を操作して征する事』を芯としており、攻撃・防御・運足の『三つ』の類を持っています。

『釘撃』は霸堺流の基本的な攻撃で、相手や物体の表面から衝撃を浸透させて、内側で破裂させる技。一方の『槍撃』は釘撃とは異なり、衝撃を表面から体内、そして体外へ『貫通』させる技です。ただ、槍撃は釘撃と異なり最初からは『使えません』

「質問だ。何で槍撃は最初から使えない?」

「はい。釘撃には浸透させる以外に『相手の肉質を調べる』役目があります。どんなに衝撃を操作出来るとしても、相手に徹る有効な衝撃が分からないと意味がないです。釘撃で肉質を知り、槍撃の衝撃で相手を貫く：霸堺流の攻撃面は此の二本柱になつています」

霸堺流の攻撃は特殊だ。衝撃を響かせ、貫き、敵を倒す。前世の子供時代に描いた武の形を、二虎さんに説いている。

「運足の『蝗跳』は二虎さんが言つていた通りなので置いておきます。もう一つの歩法『蛇縫』は、『膝の入り抜きと摺り足』で移動を行います。主に蝗跳で回避出来ない程、接近された場合に蛇縫を使い、相手の攻撃を凌ぐためですね。

霸堺流の防御技『反乗』は、敵の攻撃に合わせて筋肉を緊張・肥大させ、直撃時に衝撃を相手に返す技です。ただ、反乗は『一点の筋肉』しか肥大化出来ないので、相手の攻撃を見切る必要がある上、反乗を使つている間は他の筋肉が『弛緩』してしまった弱点があります。

『凱甲』は反乗と違い、『全身』を緊張させることで、背面等を狙つた奇襲を受け止めた
り、敢えて攻撃を受けた後で硬めて、相手を捕まえたりします。

今はまだ六つしか技は在りませんが、色々な武術を取り入れ研鑽を重ねて、新しい『霸堺流』の体系を創つていくつもりです』

武術の共有は終わり、二虎は霸堺流の技を見、照に向けて伝授する事を言つた。

「照の武術：霸堺流の衝撃浸透と貫通の特性、それと防御技から判断すると、二虎流では金剛ノ型と水天ノ型から教えていくべきか…。

既に力の入り抜きが出来ているし、不壊を覚えて精度と練度が上がれば、反乗の反撃力や凱甲の防御力、釘撃の威力も上がる事になる。

水天の脱力も有れば、相手から受けたダメージを身体で通しながら槍撃の貫通力を乗

せて返す…そんな戦法も可能だ」

的確かつ明確な道筋を示す二虎。どんなに研鑽を重ねても、どんなに才覚があろうと

も、積み重ねた経験値は雲泥の差。

しかし、此処からなのだ。一年後や二年後：その時どうなっているかは誰にも分から
ない。

「…ま、お前はなんやかんや言つて、結構素直な所があるし、武術に関する知識も持つて
る。分からぬ事がありや、燻らずにどんどん質問しな。的確に答えられる自信はねー
が、少しは力になれると思うぜ」

「そこは自信もつてください…」

こうして、照の二虎流修行は始まりを告げたのである。

* * * * *

二虎流修行開始から、早くも十日が流れた。

現在、俺は二虎流　金剛ノ型の基本技『不壊』と、指に不壊を掛ける『鉄指』の修行
をしている。

二虎さん曰く、「不壊は大樹のように足裏から根を伸ばして、がつちりと地面に身体を

固定するイメージ」というらしい。

『足から根を…がつちりと地に…』

感覚を覚えれば大体何とかなると、二虎さんから言われたとはいえ、これがかなり難しい。不壊を全身に掛けつつ、鉄指も同時に使うのは少し無理が合つただろうか？

『…………ん？』

そんな時、照は気付いた。凱甲は全身の筋肉を筋肉させることで防御を行う技、反乗は一点だけを硬化させる技だ。

ならば：『全身の緊張後に、指先に力を伝導させたのなら？』

大地に根を張り巡らせる想像を描く。全身を力ませ、筋肉を硬化。反乗を指先に発現させ。

そして――――――突く。

「…解ってきた。不壊で硬化して、鉄指で穿つ感覚が」

一度でも感覚を掴めれば、そこから詰将棋のように一つ一つ、足りないものを補つて、完成に持つていくだけだ。

『まだだ…もつと。俺はもつと、強くなれる…』

前世で成せなかつた霸塙流を天下に轟かせる野望は、気紛れな神によつて今一度の好

機を与えられた。

例え其の神が皮を被つた妖魔の類だとしても、俺はその者に感謝する。なればこそ、立ち止まる訳にはいかない。

一刻さえ、無駄にはしたくないのだから。

* * * * *

不壊の感覚を掴んでから、更に四日が過ぎた。今日は二虎さんと朝から組手をし、自分の技の熟達具合を見て貰っている。

「ハアアアア!!」

「うんうん。鉄指や鉄砕、不壊は良い具合に力めるようになつたな、照」

自分が繰り出す鉄砕の連撃を、二虎は余裕で全て弾き、叩き落とす。実力差がある事は分かつていて、こうしてまざまざと見せ付けられると、嫌になる。

「んじゃ、俺もやるぞ」

そう言つて二虎の鉄砕が飛んで来る。照も不壊を腕に掛けて受けるが、二虎は間髪入れずに、もう一撃放つた。

対処が遅れ、不壊を掛けるも、肩に手痛いダメージを負う。

「まだまだアツ！」

蝗跳で一気に距離を詰めつつ鉄指を放つが、二虎も不壊を使っていた為にダメージが通らない。

⋮『普通ならば』。

「…………鉄碎の連撃の中に、釘撃を紛れ込ませてたか。普通の打撃と遜色無いから、見分けるのは困難を極める。ほんと厄介だな、霸堺流の打撃は」

嫌そうな顔をし、左手を振る二虎。何度も負けた後で思い付いた事⋮『鉄碎に釘撃を付与した打撃』。

試してみたが、上手くいって良かつた。

『通用している』⋮俺の打撃は

実力差は有れど、自身の武術は格上の相手でも通る。

組手を通じて、其の事実が明確になつてゆく。

それが今の自分には、何よりも嬉しかつた。

「ハツ！」

攻める⋮鉄碎と釘撃を合わせた打撃で。

攻める⋮不壊を纏つた体当たりと蹴りで。

攻める…攻める…攻める！

「おーおー、張りきつちやつて。こわいこわい」

連撃に恐れる事無く、二虎は後ろに小刻み飛んで距離を取つた。照は見逃さない：彼が着地した瞬間、釘撃の衝撃を叩き込む事を。

そして攻めた。まさに絶妙なタイミングでの突撃。

完全に取『甘いなあ：照』

メギヨリ——と、これまでにないタイミングで胸に二虎の肘打ちが入る。しかもただの肘打ちではない：『不壊を使つた』肘打ち。

「二虎流。金剛・火天ノ型 『瞬鉄・爆』」

胸骨がめり込み、口と鼻から盛大に血を吐いて、照の意識はブツツリと千切れ飛んだのだった。

* * * * *

「…ううつ…」

「よお、随分眠つてたな。晩飯まで、もうちょい待ちな」

照が目覚めた時、空には星が瞬き、輝いていた。

二虎は焚き火を焚きながら、数匹の魚の木に刺し、焼いている。

情けない：それしか言い様が無い。一度ならず二度も返し手で負けた。あの時：二

虎が距離を取つた時点で、もつと警戒すべきだつた。

鉄砲+釘撃の合わせ技が成功した事に気を取られ、次手に対する警戒を怠つた結果、此の有り様である。

「くそー！ 次は勝ちますからね、二虎さん！」

「頑張んなく。ほれ、魚が焼けたぞ」

今は負けても良い。生きていれば次がある。

照は悔しさと反省と共に、焼き魚へと噛り付いたのだつた。

第五話 水中（すいちゅう）

『中なか』：東京程の面積を持つ無法地帯。其の地域の一つ、二虎と呼ばれる地域に一人の男と一人の少年が組手をしていた。

「ぐげぎがががが…！参った！参ったからばばばばばば!!折れる!?背骨折れちゃう?!!」

少年が悲鳴を上げ、腕をペチペチ叩く。少年は現在、『頸部と足首を掴まれ、山折の状態に背骨を極められていた』。

「はい、今回も俺の勝ち♪♪」

呑氣に極めを解除して、男は笑う。名を十鬼蛇ときへび 二虎にこと言い、この物語の主人公たる少年こども…鬼灯ほおずき 照の師てるである。

「ああもお!!瞬鉄決まつた時は上手くいつたのにい！其処から本氣で『海月固め』と『水龍脈すいりゆうみやく』の連続技繰り出すなんて反則ですよ！」

「阿保オ。アホ瞬鉄・爆と槍撃を組み合わせた、『瞬鉄・轟じゆんてつ・とどろき』なんちゅう殺意増々なカウンターの一撃食らえば、スイッチに入るに決まつてんだよ。

滅茶苦茶痛かつたかんな、アレ」

ワーワーギャーギャーと喧嘩口調で今回の組手を振り替える両者。

二虎が繰り出した『海月固め』は、ラリアットの要領で相手の首に腕を掛け、もう片方の腕で髪を掴み、絞めたり後ろに倒す水天ノ型の技。

そして海月固めと相性が良く、相手を後ろに倒した勢いで頸椎を手で、背骨を膝で極める水天の技『水龍脈』。

一方の照は、自身の流派である霸壠流の技の一つであり、衝撃で体内を貫く打撃『槍撃』と、二虎流の混合技にして、カウンターで繰り出す事により真価を發揮する『瞬鉄爆』を合わせ、威力を外に逃がさずに相手へ徹すという『瞬鉄・轟』。

圧倒的なキレと、状況に応じた最善の技を繰り出し、勝利する二虎。片や霸壠流と二虎流の二つの流派を合わせ、奇想天外な技に変える照。

この二人の師弟関係は既に『半年』続いている。

「…さて、今日の組手は此処までだ照。明日から二ヶ月、俺達は『外』で修行をする。しつかり休んでおけ」

* * * * *

日本某所、山岳地域。澄んだ空気と綺麗な川が流れる山間を二人は、川の遡り、徒歩で進んでいる。

「二虎さん、目的地はまだですか？」

「まだだな。ま、着いてくりや分かる」

手頃な岩が転がつており、照は霸堺流の修行で石を持つていけないだろうかと考える。

川沿いから森林の間を縫い、草木を搔き分け歩き。

歩いて、歩いて、ひたすら歩き続る。

終わりが見えない：それほどにまで長い時間、二人は歩いていた。

そして日が傾き、夕暮れが空を染める頃…。

「此処だ」

二人は目的地に辿り着いた。

場所は山頂付近で、轟々と音を立てて落ちる大きな滝とそれによつて出来上がつた池がある、謂わば隠れた秘境。

「すごい…」

「此処は俺が二虎流の修行をする時に使つていた場所だ。明日から本格的に身体作りと肺活量を鍛えていく」

二虎は背負つていた荷物を下ろし、中から腕輪と足輪を取り出し、照へ差し出す。
 「お前には、重りを身に付けて修行してもらう。重りは一個に付き2・5か3：いや、4kgかな。朝だろうが夜だろうが、俺が良いと言うまで『外すのを許さん』。

因みに俺は、お前の『倍以上』の重りを付けて修行するからな」
 全身が普段より重くなる中での修行：きつと有意義になるだろう。しかし、倍以上の重りを付けるつて、とんでもないな二虎さんは。

* * * * *

翌朝、俺は二虎に叩き起こされる。普段以上に重くなつた身体で何とか立ち上がり向かうと、二虎は池の畔に立ち、重りを着けているにも関わらず、軽々と準備運動を行つていた。

「まだ何も始まつてもねえのに、随分苦しそうな顔してんなあ照」

悪い顔でニタニタ笑う二虎。嗚呼、これは瞬鉄・轟の件を根にもつてるな…。
 「環境の変化に馴れるのつて大変なんですよ。…それで、これから何をするんですか？」
 照の問い合わせに對して、二虎は指先で池の方を指し言つた。

「水中でジャブ」

「…もう一度、お願ひします」

「水中でジャブ」

「…………本気ですか？」

「マジだ。言つたら、肺活量と全身の筋肉を鍛えるつて」

言葉を失つた。重りを四肢に着け、水に潜るに飽きたらず、其処で拳を打つ事になるとは、照自身も予想すら出来ない。

「ほれ、始めるぞ。息調えて潜水しな。息が苦しくなつたら、水面に押し上げてやるからよ」

そう言い、ニ虎は池の中へと飛び込んでいく。四の五の言つてはいられない。照もまた覚悟を決め、池へ入つていった。

* * * * *

水の流れが身体を耳を伝い、すり抜けてゆく。前世で修行と体力増強の一環として水泳をしてはいたのだが、水の中を歩くのは初めてだ。

池の底に足を着き、歩く感覚を感じ取りながらニ虎の元へ向かう。

ニ虎が平然とした様子を見せつつ、掌で『来い』とサインを出す。照は小さく頷き、『普段通り』に拳を繰り出す。だが：

『あれ、軽い…!けど、ぜ…全然…遅ツ!!』

水中は『無重力』とほぼ同じだが、地上とは違ひ空気圧よりも重い水圧がある。そして重り十無呼吸での運動…必然、体力と息の持続が削られる。

『不味い…!息が、苦しい!!』

必死に指と腕を上に向け、限界が近いことを伝えると、二虎はやれやれと言った表情で照の身体を持ち上げ、池の畔まで運んで行つてくれた。

「ぶはあ!? ハー…ハー…ハー…ハー…!!」

半身を地面に乗り出し、照は荒い呼吸で新鮮な外環の空気を贅沢に取り込む。そして自身の『異変』に気付く。

『…重い…!!』

体力を消耗した事で、四肢に付けた重りが通常よりも更に『重さ』を増した。腕が地面から動かない。持ち上がらない。

「分かつたか照。そいつが重りを着けて修行する感覺だ」

池から上がり、二虎が照の前に立つ。

「水中で訓練をするのは全身を鍛え、肺活量を高める為だけじやねえ。極限に到るほど体力の消耗し、底まで磨り減らした時の『感覚』を擬似体験させる事も、修行の中に含まれている。

お前は今まで体力に『余力』を残していた。此の際だ、体力を全部『使い切り』、自らを『死の淵まで追い込め』。

そうすれば見えるハズだ…。既に其の領域に『足を踏み入れてる』んだしな』
続けるぞと二虎はまた池の中へと潜つていった。

『足を踏み入れてる…何の事?』

疑問を抱え、照もまた畠の水中へ身を投じたのであつた。

* * * * *

「ぜえ…はあ…!!くつそ…全然、上手くいかない…!」

「水中と地上じや勝手が違う。感覚として感じ取れ。そうじやなきや、何時までも先には進まないぞ」

「はー!はー!畜生、もう一回!」

山に籠り、二十日が過ぎる。毎日毎日、来日も来日も朝から晩まで、水中でのジャブを繰り返す。

疲労で息が続かず溺れかけ、水から上がった瞬間に目眩を起こして倒れる…そんな日々。

「…そろそろ昼飯だな。一旦休憩にする、しつかり休めよ照」

一足早く上がり、二虎は衣服が吸い込み含んだ水を絞り出し、焚き火の用意を始めた。
「つ…かれ、た…」

ノロノロと、今にも死にそうな身体で水から這い上がり、地面にとつ伏した照。

身体が重い…一步も動ける気がしない。連日の修行で、体力は限界寸前。正直、この

状態で食べ物を口にするだけの余力は無い。

視界が曇気になり、意識が揺らぐ。

『死』がはつきりと感じ取れた、その瞬間^{とき}。

「…あ、れ…………？」

重く、動けなかつた筈の身体が動いた。

「何だ：何が、起きた：？」

「そいつはお前が、自分自身を死の淵まで追い込んだ事で発動した。分かりやすく言えば『予備燃料』つう奴だな。

無駄に体力を残すくらいなら、一回底まで使いきる事。身体から淀みが無くなり、動きが精細になる」

焼いた魚を食らい、二虎は照に起きた異変を伝えた。

「ただし、其の予備燃料は長く戦える程あるわけじやねえ。過信はするなよ？」

食いなど焼き魚を手渡され、思い切りがつつく。二虎が何を狙っているのかは分からぬが、この時間は必ず自分にとつて有意義な時間になるだろう。

《照。もしかしたら、お前にこのまま教える事になるかもしけねえな。俺の二虎流：其の『奥義』》を

照の姿を見ながら、二虎もまた、静かに決意を固めたのだつた。

第六話 奥手（おくのて）

山籠りを初めて、四十五日が過ぎた。

「…つはあ!!二虎さん、今どのくらい潜つてました!?」

「4分24秒、まだまだ短い」

「もう一回！…すうう～ん!!」

悔しそうに首を降つて、呼吸を調べつつ再度潜水する。

最初こそ一分と潜つて入られなかつた照だが、水中での修行に適応し、今では一回の潜水で4～5分は潜れるようになつた。

《この一ヶ月半、照の身体付きは大分良くなつてゐる。肺活量、筋力、以前に比べれば、見違えるレベルになつた。その上…》

水中に潜り、拳の連打を打つ照を見、二虎は心中で呟く。

《まだまだ粗削りだが、二虎流の『極み』も出来つつある。…本当に『奥義』を継承させ
る事も、視野に入れなきやならねえかもな。}

だが…》

透き通る水の中、重りによる拘束を感じさせない、凄まじい連撃を続ける照。

水面が衝撃に揺らぐ…自分の心と同じように。

『奥義体得は『命懸け』だ。照に、あいつに…其れが出来るのか…』

* * * * *

「照。お前に話がある」

焚き火で暖を取り、焼き魚を頬張る照に二虎が話し掛けってきた。いつになく真剣な表情から、照も何かを察して食事の手を止め、二虎と真正面に座り直し、向き合う。

「何ですか、二虎さん。物凄く改まつた感じですけれど…」

「…………」

静寂が空気に溶け、異様な緊張感を帯びる。

数十秒、そんな空気が続く。

「照。お前は二虎流の四大系統の『極きわみ』、そして『奥義おうぎ』を憶えているか？」

二虎が口を開き、照に問う。

「四大系統の極と二虎流の奥義ですよね？憶えてます。三ヶ月前、組手が終わつた時に二虎さんが教えてくれたのを」

極きわみ…二虎流の四大系統の中にある其の技は、武術で言うところの『奥義』を指す。本来

奥義とは、強力無比な技を指すことが多いが、二虎流の場合は『使用者が瀕死の重体に

陥つたとしても、最後まで戦えるようにする為の技』とされている。

そして『奥義』^{おうぎ}は、二虎流の全てを覚えた時に見える、二虎流の技術の粹を結集した技という教えを受けた。

「じゃ、それぞれの説明は出来るか? 照」

「はい。先ず操流ノ型の極は『傀儡』^{くぐつ}と呼ばれ、体力が底を付いたり、戦う事すら困難な場合に、操流で体内に満遍なく力を行き渡らせて、最小限の力で動ける様にする技です。

次に金剛ノ型、極の名前は『抱骨』^{ほうこつ}。骨折で指や足が動けない時に周りの筋肉を操作し補助する技。

『縮地』^{しづくち}は火天ノ型の極。骨で地面に立つ事を基本に、重心で移動を行います。通常の移動と違う為に『間』^{すいきよう}が異なります。

最後は水天ノ型、極は『水鏡』^{すいきょう}。関節を外されたり、骨を折られたりした際に相手の身体を使つて関節技や絞め技を繰り出す技。他の極と違つて水鏡には『決まつた形』^{けつまたたがた}が無いので、状況に応じて形を変えるのが特徴ですね

此処まで教えられた極について一通り話終えた照は、息を調えた後、最後の一つである『奥義』の説明を行つた。

「最後、二虎流の奥義は『唯一』四大系統全てが当てはまり、名前の由来が『鬼をも殺す』とされている『鬼麿』^{きおう}。

相手の一撃に対し、操流で衝撃を流し、水天の脱力で通過させ、火天で足場を確保し、金剛の攻撃で威力を何倍にも乗せ、相手へ返す『無形の返し手』とされます。

中でも操流と水天が重要で、失敗すると体内に痛手を負ってしまう上に、瞬間を見極めなければならぬので、とても難しい技です

：でも、何で『説明』させたんですか？二虎さん

理由が無い、無意味な事を言わせたり、させたりする訳じや無い事を、七ヶ月共に組手と修行で二虎と共に過ごし、学んだ照は知つている。

二虎は静かに。そして重い口を開き、言葉を発した。

「…三ヶ月前だ。雨が降った日の組手で俺が『瞬鉄・碎』を放つた時、お前は新しく創つた、操流・水天ノ型『導水』で威力とダメージを地面に逃がしただろ？」

其の導水の原理が：二虎流奥義の鬼麿の『流しと脱力』の動作と『同じ』なんだ。此処まで言えば分かるか？」

導水とは、照が創つた二虎流の技の一つであり、相手の攻撃を『安全に受け止める』事を芯とし、其の時に発生したダメージを脱力によつて体外へ透過させ、地面や壁に流す技だ。

また応用として、体内に蓄積したダメージを水天の脱力と操流で操作して取り除き、早期回復を促す事も出来るという二面性を併せ持つてゐる。

照はハツとなつた。二虎が以前、自分に向けて『其の領域に足を踏み入れてる』と言つた言葉の意味を理解したのだ。

「こうして話したのは他でもない。照：お前は二虎流奥義・鬼麿を継承出来るだけの素質と力を既に身に付けているからだ。

だが、奥義体得は『命懸け』だ。失敗し、最悪命を落とす事さえある。俺と同じ道を志した多くの友も、鬼麿継承の中で倒れ、死んだ。

やるか、やらないか。それは『お前自身』が決める。二虎流は鬼麿を体得せずとも、一つ一つの技を磨けば強くなれる』

二虎の目には、体験者だからこそ話せる嘘偽りのない『覚悟』があつた。

一方で、生半可な覚悟や決意では望んで欲しくはない、奥義が無くとも二虎流の道はあるとした、彼なりの『優しさ』があつた。

「もしも、お前が奥義体得を決意しているのなら。四肢に付けた重りを外せ。

俺も重りを外して、『本気でお前を殺しに行く』。

鬼麿は極限状態で『感覚』を研ぎ澄まし、タイミングを見抜いて、全力で繰り出す。一撃：鬼麿で一撃を入れられたなら。

其の時、お前は奥義を『継承』した事になる』

ゴクリ…と唾を飲み込んだ。二虎はいつも以上に真剣で、自分の行動に覚悟を決めて

いる。

例え其れで弟子の人生を潰し、殺す事になつたとしても。

「…答えなんて、最初から決まつてますよ。二虎さん」

照は立ち上がり、右手首の重りへ手を伸ばし、取り外す。ドスンと鈍く重い音が、暗闇の中鳴る。

「俺の夢は『最強』を目指すこと。最強に成るには幾つもの『試練』を超えてなければいけない」

左手首、右足首の重りも外れ、地面に落ちる。

「試練に負け、死んだのなら、俺は『其の程度』までしか成れなかつた…それだけです。だから。

超えていきます。二虎さんの：鬼麿繼承の試練を」

最後の左足首の重りを外し、照は一ヶ月半振りに拘束を解く。同時に左足左手の左構えの姿勢を取り、二虎へ向き合う。

「…お前の覚悟は決まつていたか」

二虎も重りを外し、ゆっくりと立ち上がる。同時に彼の気迫と殺気が爆発的に増大。其のエネルギーに当たられたのか、木々に泊まり、眠つていたであろう鳥達が一斉に逃げ惑い、夜の空へ散つてゆく。

「照。鬼麿は、お前自身が『死』の領域を超えた先に在る」

——『生』を、其の手で掴み取れ。

其の言葉と共に、二虎は照への攻撃を始めたのだつた。

第七話 繼承（けいしょう）

「鬼麿は、お前自身が死の領域を超えた時、初めて手にする事が出来る。

掴み取れ、生を」

其の言葉を皮切りに、二虎が攻撃を仕掛ける。

『真つ直ぐ』、其れも『直線』で。だが、速度はとてつもなく『速い』。

『二虎流・火天ノ型

烈火！』

照も二虎の接近に、霸壠流 蛇縫で回り込む。照の行動には烈火の『性質』を知つて
いるが故の『回答』でもある。

烈火は『逃走』や『接近』の為に『最短』を通る。故に回り込まれたり、急激な方向
転換を苦手としている⋮それが『普通』なのだ。

だが、蛇縫を見た二虎の移動がいきなり『左』へと『急激』に変更されたのである。

「んな！」

技の名は『畝焰』。^{うねりほむら}人間の体格の六割を占める上半身を移動中に傾ける事により、重
心を大きく動かし、急激な方向転換を可能とする、火天ノ型の技。

無論、急激な重心移動は脚に負担を掛ける。しかしひ二虎の表情は崩れない。積み重

ね、積み上げてきた経験が、敵焰に耐えるだけの脚を作ったのだ。

路線変更に驚く照を他所に、襲い掛かる二虎の瞬鉄・爆。返し手で本来の威力を発揮する瞬鉄だが、速度を乗せた状態で放てば、遜色無い破壊力へと昇華される、強力無類の一撃。

当たる。回避は間に合わない。

受け止める? そうすれば隙が生まれてしまう。

ならば――どうする?

「こうだッ――」

『直感的』に身体が動いていた。

ガツ!!!!

「…良い判断だ」

二虎の身体が照の横を通り過ぎていた。

走つた跡は、三日月を描くように曲がっている。

「操流ノ型『柳』^{やなぎ}で方向を曲げる。：『受け止める』為に導水を使つていたら、間違いなく『お前は死んでいた』だろうな」

「本当に殺す気ですね二虎さん。導水の後に柳で崩して、水龍脈で首を折るつもりでしたか」

伊達に半年間以上、彼と組手を続けてきた訳ではない。

再び、ニ虎が攻める。

握る拳は弛く、両腕が不規則な軌道を描きながら、無数の礫となり、照を襲う。

「今度は『水燕』^{すいえん}…！」

操流・水天ノ型 水燕。不規則な軌道を描く連打は、攻撃を見切る事が非常に困難な技で、対処方法は幾つか在れど、至難を極める。

《速い！氣を抜いたら確実に押し込まれて、殺される!!》

本能と直感が照に『回避』の選択を授け、彼も全神経を研ぎ澄まし、ニ虎の連打を捌く。

《そう。お前なら回避するだろう。だからこそ『手数を増やす』。そして同時に…》

アレを使う。

「はあっ!!」

連打の速度は変わらない。しかし當てに来る打撃の『数』が一秒毎に上がっている。必死に捌く照。だが、何かが違う。今までの打撃とは何かが。

「ズグン!!

「い”ツ” ～～～～～～～～!?!」

突如、捌き受けていた両腕に『内側から』鈍く、重い、痛みの感覚が走った。何より、自分はこの痛みの『正体』を知っている。

《ま、さか……》の痛みは!!!

二虎の弛く握った筈の拳が『固く』なつていた。

見間違う事など有り得ない。

「釘撃…!!」

霸壙流の基本技、釘撃。二虎が使つたそれは、浸透性と鋭さこそ無いが、子供の腕を挙げられなくするには十分過ぎる威力だった。

「これで打撃を捌くのは困難になつたぞ」

尚も拳速が上がつてゆく。全身をバネのように使い、回転率を上昇させ、威力よりも手数を増やし続ける。

「う…おお、おおおおお?!?!」

水燕と釘撃。此程迄に相性が良い攻撃が有つたのかと照は思つた。水燕で回避する隙が無い。かといって弾き、其れが釘撃なら体内に衝撃を負う。

照の脳は命の危険を全身へ警鐘を鳴らし、神經と感覚は回避の為に全てを注ぐ。

二虎もまた、更に回転率を上げる。只でさえ多い水燕はまるで夕立のように降り注ぐ。

照の皮膚を掠め、其の度に裂傷で出血が起ころる。

『紙一重。それでいい、照。

見極める。全神經と感覚を研ぎ澄まし、俺の攻撃から『打ち返すべき一撃』を『嘗ての自分も同じ思いで奥義を継承した。

志同じくした同門の友の死も見てきた。

もつと効率良く、痛みを伴わない：そんな奥義継承の方法は探せば見付かるかもしないと、いつも考えていた。

だが、自分は秀才ではない。

やり方も、この方法でしか継承出来ない。

血塗れに濡れる小さな少年へ、二虎は渾身の鉄砲を放つ。

* * * * *

* * * * *

全身から血が流れる。

數えきれない打撃が襲う。

捌き、回避するのに精一杯。

腕は釘撃を貰つた為に、傀儡を掛け続けなければ動かない。

照にとつて現在の状況は、とても芳しくなかつた。

だが何故だろうか？

今まで以上に、感覚が研ぎ澄まされている。

今まで以上に、動きが洗練されている。

今まで以上に、見えなかつた物が見えている。

『これなのか…？二虎さんが言つていた、感覚つて言うのは…』

限界に追い込まれた脳は、照が思う以上の集中力を發揮。身体は既に、思考で避けるのでは無く、反射で避けるという、ある種の答えを導いていた。

『…分かる。二虎さんの水燕が、何処を狙つているのか。どの打撃に釘撃が仕込まれているのかも…』

尋常成らざる状態の中で、感覚を研ぎ澄ます。

その時、照の脳内に想像で浮かんだ泉に一滴の雫が落ちる。刹那、照の視界が大きく変わつた。

『あらゆる力の流れが矢印として、自身の視界に写ったのである』

『これか…!? 感覚は…!!!』

連打の中、二虎の右腕が硬直し、筋肉が隆起する。

照は思う。右中段突きの鉄碎が飛んでもると。

『やるなら…今しかない!!!』

飛来する鉄碎。同時に照も動いていた。

左手で二虎の鉄碎を受け止め、威力と衝撃の矢印を操流で操り。

平行して水天の脱力を用いて腕から肩、肩から胴体、腰へと流して、威力を加速させてゆく。

左足を前へ出し、足場と攻撃の届く間合いを確保し。

残された右足の前蹴りが、真刀の斬り上げのように放たれた。

衝撃は二虎の左足を貫くと、鮫の背鰭のように地面を這い、池の水面を切り裂いて、滝を一瞬だつたが真つ二つに割っていた。

だが、右足を大きく振り抜いた反動で、照は綺麗に転び、後頭部を強打。出血も相まつて、照はそのまま気絶した。

「……………」

二虎は自分の左足を見る。ズボンはビリビリに千切れ飛んで、脛より上は前蹴^政撃^擊を食

らつた事により、内出血で真っ赤に腫れ上がっている。恐らく骨にもヒビが入つただろ
う。

「…『よくやつた』、照」

血塗れで気絶し、動かぬ弟子を見下ろしながら。二虎は小さく、だが健闘を称えるよ
うに優しい声で言う。

「二虎流奥義・鬼麿。今この瞬間、お前に『継承』された」

* * * * *

「…………う、うん…………？」

「目、覚めたみてえだな」

見慣れた光景だつた。自分が組手で負け、気絶した時に、二虎さんが焚き火を焚く姿だ。

空は暗闇の帳を下ろし、火に照らされる身体には包帯が巻き付いている。

「…俺は、死んでるんですか？ 奥義体得に失敗して…」

「馬鹿言つてんじやねえ」

落ち込む照に空手チョップを頭に叩き入れ、二虎は包帯を巻き付けた左足大腿を照に見せる。

「俺の鉄砕に対し、威力を前蹴りで返して、一撃を入れた。つまり、お前は鬼麿を継承出来たんだよ。照」

二虎の傷を見、鬼麿の強さを改めて実感する。

形を持たず、威力を何倍にも引き上げ、敵へと打ち返す其の技は、二虎でさえも此処まで傷を負う事実と、使い所は見誤れば、自分がこうなるだろう戒めを孕み、照に突き付けられたのだ。

「ま…奥義継承しても戦闘面で生かせなきや、なーんも意味がねーからなー♪ 照は組手で、俺に勝つた事も無いし♪」

「むう…！ だつたら俺は二虎さんを超えますよ！ 絶対に!!」

奥義継承後にも関わらず、其処には組手の後に見る、何時もの光景があつた。

ニ虎流の奥義を継承した照。しかし、彼の大いなる野望への道はまだまだ険しく、果てしなく遠い……。

第八話 遠征（えんせい）

山に籠り、六十一日。

奥義継承後も、残された時間を治療と軽い訓練に費やした二人。長く、充実した時間は流星のように過ぎ、二虎と照が山を下りる日がやつて來た。

「忘れ物はねえな？ 帰るぞ、俺達の居場所へ」

この日々を俺は忘れない。辛苦苦しい時間でもあつたが、同時に俺自身の大きな成長に繋がつた。

「また：此処に来れますか？」

「分からん。だが、お前が一人立ちしたら此処に来れば良いさ。気に入つたんだろ？」

「……はい」

そうして師弟は山を下る。元在るべき場所へと帰る為に。

「……？」

ふと：照は立ち止まり、後ろへ振り返つた。

後方には森林が広がり、滝から水が流れ落ちているだけで、何も無い。

「ん？ どうした、照？」

二虎が脚を止めた照を呼ぶと、彼はこう問う。

「二虎さん。この森つて、俺達以外に『人』は居ましたっけ？」

「人？いや、居ねえぞ？」

「……………そう、ですか。：分かりました、帰りましょう。中へ」

さらば、修行の地よ：振り返らず、二人は中を目指して歩みを始めたのだつた。

* * * * *

*

* * * * *

*

——ほお。あの坊主、オレの気配に気付きやがつた。

遠い遠い、暗き影の中。何かが照達を見て呴く。

——『虎の器』、ヤツは期待出来そうだ。

猫の如き、細い瞳孔と惡意が、山を去り行く照へと注がれる。

——十鬼蛇 二虎。お前の教えは全て無に還る。

暗き影から闇へ、其の者は姿を消した。

* * * * *

中へと帰り着き、三日が過ぎた。

「おりいやああああああ！」

「んゝ良い感じだ。が、まだまだ遅おそえ」

水燕を放つ照を、柳で華麗に投げ飛ばす二虎。

不壊を使い、衝撃を和らげるが、無防備の脇腹に蹴りが直撃した。

「ふげつ！」

「はい、俺の勝ち♪」

くの字にビク付き、延びる照。二虎は相変わらず、悪い笑みを浮かべ、熱くなつた身体を冷やす為に水を飲む。

「はあゝ旨うめえ。奥義を得しても俺に勝てないんじや、最強は程遠いぜ？」

八手目の鉄碎・穿は少し安直過ぎたし、十七手目で反乗はんじょうを使うのは、はつきり言つて

悪手だ。もう少しタイミングを見るべきだったな。

だがま、お前は大分駆け引きが上手くなつた。

特に十一手目にやつた、幽歩から蝗跳に繋いで、瞬鉄・轟の流れは緩急もあつて良い。二十手目の正拳突きを直前に止めて、肘打ちに変えたのも、状況によつて、どんな攻撃にするかが分かるようになつてきている証拠。

ほんと、良い筋してゐるぜ。照は』

ズバズバと悪い所、良い所を言つてくれるのは寧ろありがたい。次の組手に反映し、更なる向上を促してくれる。

「さて、照。そろそろ俺以外の奴とも、実戦を積むべきだ。自分の見解が広がれば、其処からアイデアが生まれる。

そうすれば、お前の二虎流と覇堺流は更に進化出来る。中は弱肉強食の世界：危機に追い込まれる事もあるだろうが、そいつを自力で乗り越えられりや、見える物も沢山有るのさ』

二虎にそう言われ、照は中の散策と自分自身の力を試すべく、行動を起こす事にした。

* * * * *

翌日の朝方、照は蝗跳を使いながら廃墟の合間を縫い、走り続けていた。現在、彼が居るのは二虎から少し離れた『五熊』^{ごゆう}と呼ばれる地域。

『二虎さんは『十鬼蛇^{とときな}』には未だ入らない方が良い』と言つていたけど……強い奴等が居るの

か、はたまた危険な場所だからなのか：うーん』

そんな思考を伴いながら、跳躍歩行中に周りを見渡す。やはりと言うか、身体に縫い傷や歯の欠けた者に、眼帯を着けている者。

柄の悪そうな連中が闊歩し、血生臭さが絶えない。

『嫌だな…こうゆうの』

と、余所見をしていた照。何かと衝突し、バランスを崩して転んでしまう。

「あ、ごめんなさ『なにしどくれとんじや、ガキイ!!!』

謝罪が搔き消される怒号。見るからに悪の一文字で表現出来る男が五人。眼帯、傷痕、手の甲には何かの絵柄。

「兄貴！このガキンチョ、ウチラの服にわざと当てやがったんつすよ！」

「嘗めていますね！かーんぜんに嘗めますね！ね！」

「おうよ、喧嘩吹っ掛けた事後悔させちよるか！」

男達が取り出したのは木の持ち柄に固定された短刀、よく分からぬ指に固定した金属の指輪といった、見た目だけで凶器だと断定出来る物ばかり。

売つたら金に替えられるか？と照は考えていた。

「おら、死に物晒せやア!!」

脅迫を放つて男が振りかざす短刀が、照の脳天へ迫った。

「五月蠅い、後遅い。身体の動かし方に無駄が多過ぎる」

左足を横にすらし、紙一重で回避。同時に右拳で瞬鉄・碎を『置くべき場所に置いて』、男を空へと吹つ飛ばした。

「あ、兄貴いいいいい!!?」

「やろお!!」

!??」

指輪を付けた奴が正拳突きを仕掛ける。見たところ構えも良い、武術を嗜んでいたのだろうか？

目線と拳の角度、そして『力の流れ』から、左肩を狙っているのが分かる。

「ふんっ」

直撃の瞬間、不壊+反乗の合体技で衝撃を完全に弾き返し、男の体勢を崩させた。転んだ男、起き上がる前に他の奴を倒す。一対一にすれば、後々楽になる。

照は覇堺流 蛇縫と釘撃、そして二虎流 鉄碎・穿を合わせながら、スルリと三人の間を切り抜けつつ、人体の急所の一つである鳩尾に地獄突きを叩き込んだ。

「釘撃・蛇牙。」：初めてだけど、上手くいったみたい」

痛烈な、そして時を隔てて襲う衝撃に、男三名は泡を口から噴き出し倒れる。

「は、は、：は!?」

目まぐるしい状況の変化は、残された男の思考を絡み付いた糸のように、こんがらせ

では何故、照は無事だつたのか？

二虎流操流ノ型 流刃と呼ばれる技がある。相手の打撃の入斜角を見極め、手の甲や手首の硬質の骨部分で押し当て、本来進むべき『軌道』を曲げる技。

二虎曰く、この技は経験上『弾丸』さえも弾く事が可能である。

「…出来ちやつた」

「あ、ああ…あ

男は失禁と共に意識がぶつかりと切れてしまつた。無理もない、小さな子供に切り札の拳銃が意味を成さないのだから仕方無いかも知れない。

「あ…終わり？」

辺りを見渡すと五人の男達が倒れ伏して動かない。

戦闘は終了した。

* * * * *

「刀と鉄砲、何か固そうな金属の指輪…ふむ、後は財布…このくらいね。しかし…どいつもこいつも、中々面白いじやあない！」

戦いを終えた照は男達が持っていた物を物色し、使えそうな物を漁つていた。前世では見たことも、触れたことも無い物体に、少年の心は興味津々。

顔もニヤニヤと、若干気持ち悪くも見えてしまつてゐる。人間というのはどんな生物よりも好奇心に溢れ、其れを元として強く、種族として逞しく進化を続けてきた。

「売つたら値が貼るだらうか？ そうすれば魚以外の食べ物を手に入れられるだらうか？ 楽しみだな！」

仕分けた物品を抱え、蝗跳でその場を後にした照は売れる店を探し始める。
だが、新たなる会合が迫りつつあることを照本人はまだ知らない。

第九話 褐色（かつしょく）

俺の名前は、鬼灯 照。

現在、俺は——五熊で暴れています。

『何だテメエは!?』

『やつちまえやあ!!』

「俺は敵じゃないって言つてるでしようが！話を聞けえ!!!!」

『ぎやああああああ!?』

『こいつ、強えぞ!?』

近くの建物で休もうとしたら、何処かの組織か組合の拠点だった。自分は間違つて入つただけなのに、どつかの組織の連中とか疑われて、攻撃を受けました。

しかし、どうしてこう：人の話を聞かない連中ばかりなのか。おかげで黙らせる為に倒すという強行手段ばかりが上手くなつてゆく自分が嫌だ。

そうこうしてるうちに制圧完了。全員気絶させ、服を縄代わりに両手両足を縛り上げ、取り敢えず事を済ませる。

「えつと：何か使えたり、食べられたりするものは：」

棚や二虎さんから教わった冷蔵庫なるものの中身を調べたり、食べ物を毒味したり、自分の見解と視野を広げてゆく。今の時代、どれが食べられ、どれが食べられないかを知ることは、傷を癒し体力の回復に欠かせない。

「…これは食える。これも、こいつも…。こいつは駄目な奴、これは良い…」

食べられないと判断された食べ物は、鼠が囁られた口後のようにになり、床に散開。食べられるものは、一片たりとも残さず食つて胃袋に納めた。

たぞ

奴だ

うわ

あ!!

不意に外で響く、人の声と悲鳴。

気になり、窓から下の様子を見るため頭を外へ乗り出すと、数十人の大人が誰かと戦っていた。目を凝らすと、大人達の合間を駆け抜け、腕や脚を利用して鋭い蹴りを顎や頭に叩き込む、少年の姿があつた。

少年は自分と同じ程の年齢ながら、髪は白く肌色は土のような茶色、目付きの鋭さや座り具合から自分以上に修羅場を潜り抜けてきた事が伺えた。

《あの子：強いな》

唾が喉をぐくりと鳴らした。

生き残る事だけに全てを注いだ戦い方。野生を剥き出しにした獣のような撃。戦いたい。あの少年と。

そう思つた瞬間、自分の身体は動いていた。部屋を飛び出し、階段を駆け下り、烈火と蝗跳を使い分けながら、少年の後を追い掛けた。

* * * * *

付けられている——彼がそう思つたのは、生きるために大人達を倒してから少し経つた後の事。

それもかなりの速度で自分に接近してきている。以前倒した奴等の仲間か？それとも別の連中か？何はともあれ、逃げなければ。

決めた後は早かつた。自慢では無いが脚力には自信がある。そろそろ追い付かれる事はな『見付けたあ!!!!』

『はっ！』

目の前に誰かが下りてきた。立ち上がったのは自分と同じくらいの歳の少年。

だが、其の体つきは少年とするには体格が良過ぎる。必然、彼に対する警戒心が高まり、強くなつていつた。

「さつき大人達と戦つていたのは君?」

戦いを見ていた——其のワードだけで、コイツを潰す理由は出来上がった。存在を知つた以上、潰すしかない。刹那の内に走り出し、渾身の回し蹴りを放つ。狙いは顎部。奴は余りの速さに動けない。確実に取つた：そう思つていた。

『おつと』

軽く。まるで油断しきつた昆虫を捕まえるように。回し蹴りに腕を差し込んで、直撃を防いでいたのだ。

* * * * *

正直に言おう、滅茶苦茶速い。
繰り返します、無茶苦茶速い。

この歳で、なんちゅう速度で跳躍上段回し蹴りを放つんだ、この少年。

幸い、不壊と反乗で止めたは良いが、速過ぎた為に筋肉の引き締めが甘く、腕にダメージを貰つた。

「…今のが何だか」

後ろに下がり、トントンと小さく。軽く跳躍しつつ、少年が此方の様子を伺いながら呟いた。

「いや、本当に驚いた。あんなに速い回し蹴りは初めて見たよ。何より鋭くて重い。相手を『確実に倒す事』に重きを置いた蹴り：凄まじいな」

本心から相手を称え、左手左構えの体勢を取る。

「一つ、手合わせを頼めるかい？俺が負けたら、君には金輪際関わらないと、命に掛けて誓おう」

「…本当か？」

「二言はない。俺が勝つたら、其処に置いてある物を売れる店を紹介して欲しい。何分土地勘が掴めなくて困っているんだ」

「…分かった」

了承は得られた。後は…全力で戦うだけ。

緊迫の空気の中、先に仕掛けたのは——褐色肌の少年だった。

《速い！》

直線的、だが速い。純粹に速い。

「シャイツ！」

足首狙いの間接蹴り。照も蝗跳の跳躍で上を取る。

「ハアツ！」

「チエヤア！」

空中の蹴りに、手を地面に付けた状態で上段へ蹴りを放つて、威力を往なした少年。蹴りの技術は此方よりも上。まともに食らえば、やられる可能性が高い。

『だつたらこうだ！』

烈火を使い、少年へと突つ込みながら鉄碎・穿を放つ。だが少年は、直撃ギリギリの所で体勢を屈め、照の踝くるぶしへ小さく脚を付けたのだ。

『な!?』

高速で移動する烈火。移動に重きを置く為に、相手が視界外へ滑り込めば、姿を見失うのは必然。

勢いのまま倒れる照、其の無防備になつた腹部に少年の拳撃が放たれる。

——はずだつた。

「?」

当たつた。そう確信した時、自分の体が空を舞つていた。確かに撃ち抜いた筈だつた。なのに何故、自分が投げられているのか。

「危なかつた……烈火の速度を踝蹴りで止める。思わぬ弱点を突かれた。だが、おかげで

良い具合に勢いを付けられたよ、少年」

見ていた空の景色が急速で移動し、数瞬で背中と後頭部に強い衝撃が襲い掛かる。投げられ、地面に叩き付けられたのだ。

肺から息が零れ、背骨と背筋が締め付けられる。
【霸塙流】振子投げ。相手に投げられる、もしくは崩される威力を利用して『返す技』だ

振子投げ：照が二虎との組手の中で編み出した、霸塙流の新たなる体系・返し投げの技術である。相手の崩し技や投げ技に発生する力を逆に利用し、崩し返したり、投げ返したりする此の技。

合気道に近いのだが、此の技は崩しや投げの『精度』が高ければ高いほど、比例して威力が強く、鋭くなる異質な特性を備えている。二虎曰く、振子投げは釘撃に並ぶ『初見殺しの技』と謂わしめた程。

照は追撃の鉄砕を放とうとした。が、腹部に鋭い爪先蹴りが入り後ろに飛ばされる。照は決めようとした。だが、この少年は其の瞬間に最も無防備になる腹部を蹴る事で追撃を阻止し。且、蹴りの反動で後ろに転がり、距離を取つた。
戦い馴れている——照はそう思つた。

機転の利かせ方も、自分とは全く異なる。

見るのが違うだけで、鍛え方が違うだけで、此程迄に戦術が変わるので。
《：ありがとう、二虎さん》

心から感謝していた。彼との組手だけでは見えなかつた世界が見えた。考えていいな
かつた戦い方を知れた。

「やるじゃないか、少年」

照の発言に少年の表情が不機嫌なものに変わり、彼は一言呟く。
「……涼」

「？」

「少年じゃねえ。……『氷室涼』。自分で決めた名前だ」

「氷室涼……涼君か。良い名前だ、俺は鬼灯照」

強さの深みへ至る為、最強を目指している

背筋が締まり、あらゆる毛が逆立つた。自分と同じくらい、もしくは一つか二つ歳は上だろう。コイツは自分と見ている景色が違う。

生きるために、時に殺人さえもやつた。

生きるために、自分の力をぶつけてきた。

だがコイツは、果てしない最強を目指し、自分の力をモノにしている。

『試したい』……自分の力がコイツにどれだけ通用するのか。

武先

氷室の身体は、脳が命令するよりも早く。

そして普段の疾走と同じように、自然と動いた。

「そうだ…そこなくてはな！」

照もまた吠える。さつきと同じ高速の移動、踝蹴りか前蹴りで止める。

「よつと！」

照が跳んだ。蹴られる前に自分の頭上を飛び越えられた。

『だけど距離がある。此処からなら、まだ蹴りの『間合い』に在る！近付けさせねえ！』

構える。掴まるつもりなら回し蹴りを、殴つてくるなら腕を手取つて首や頸に前蹴りで倒す。

だが、取つていたはずの間合いが、照のグンツとした移動で、一気に『潰された』。

「ハツ!?」

「縮地。しゆくちや蹴りの間合いは潰した…ちょっと痛いよ？俺の一撃は」

飛んできた左拳の横フツク。腕で脇腹を防ぐ。

ガードはギリギリ間に合つた。だが――

『重ツ!?』

これまでにない威力。ヤクザ大人が振るう重いだけの打撃とは違う。体を突き刺し、内側を抉る鋭い打撃。

一撃を受けた腕の皮膚が、筋肉が、骨が。今まで受けたことの無い衝撃で軋み、悲鳴を上げる。

「釘撃。^{くぎうち}さ、見極められるかな？」

風を切り、速撃が頬を捉える。

先程より威力は無い。しかし問題は其処じやない。

多い——手数を優先した打撃。その上、拳と腕の軌道が不規則にブレを起こつ、迫つてくる。

見極めるのは難しい：ならば！

「ツツツツ！」

照の体がぐらついた。顔面、其れも鼻先に鋭いカウンターを貰つた為だ。だが照が驚いたのは、水燕^{すいえん}の連打を搔い潜つてカウンターを叩き込まれた事ではなく……

「……涼君、其の『拳』。一体なんだい？それは——」

水室少年が『縦拳』^{たてけん}を放つていた事だつた。

第十話　縦拳（たてけん）

「涼君、其の拳は一体なんだい？」

カウンターを貰い、赤くなつた鼻に指先を当てつつ、照は氷室に問い合わせる。通常、拳による撃は横拳を用いて行うのが一般的である。

現在の空手も、横拳での逆手打ちや正拳突きが主流だ。

だが、氷室がカウンターを繰り出した際に用いたのは、縦に構えた拳。所謂縦拳、もしくは縦拳じゆうけんである。

「縦拳。俺の『切札』。あんまり使いたくは無かつたけど、そもそも言つてられない」

『切札たてけん』か。ふふふ：『嬉しい』ねえ》

闘氣を帶び、深い呼吸へと変わつた氷室。

照は：笑つていた。

自分が彼にとつて『切札』である縦拳を使うだけの相手だと、認識してくれた事に対

して。

《嗚呼。素晴らしい…》

刹那、氷室が攻めた。

照も釘撃を放ち、迎撃。

が、右拳で即座に横に弾かれる。同時に槌を釘に叩き付ける様に、顔面に拳が当たる。状態が後ろへ下がり、其処に右拳の追撃が左肩に。照、右足の回し蹴りも、左腕でガードされ即座に腹部に二発。弾かれ右。受けられ左。止められ右。

右、左、左、右、左、右、右、右、左、右：

《速い……これほどとは……ツツツツ!!》

照は二虎流奥義継承の副産物として、ありとあらゆる力の流れが視界に見えていた。其れ故、単調な攻撃ならば赤子の手を捻るように対処出来てしまう。

その照が、冰室の縦拳への対処に苦しんでいた。

何故か？

答えは『速度』。

一般的な正拳突きで放つ横拳は時速 10 km/h とされているが、縦拳の場合、其の速さは時速 15 km/h になる。さらに縦拳には『受即功』の特性を持つ。

空手などの受けの場合、腕の横に当たる部分を使い、横に押し出して軌道を変える。だが、縦拳の場合は腕の甲で攻撃を逸らす。

最小の力で軌道を変える為に、腕に掛かる負担は断然軽く、通常の突きよりも早く動

ける。其のが縦拳の『真骨頂』。

攻防の切り換えと、即座に動作へと転じる『速さ』。

力の流れが見えていようと、動体視力で『認知』される前に『叩く』、通常とは異なる『速撃』。

其の『攻撃速度』と『連携連打』こそが、氷室涼の『切札』——縦拳の『武』であつた。

《流れが見えても、対処出来ない速さか……》

返そうとしても、連打に押し込まれる。

打たれる度に、筋肉が悲鳴を上げる。

初めて感じる、敗北の気配。

上等じやあないか：其れでこそ倒す価値がある。

逆境と限界：其れは乗り越えるべき物だ。

最強へ至る為：此れが最初の試練。

「ハアッ!!」

ズドンツー！と空気が震えた。

「かはっ…!?」

氷室の胸に、釘撃の撃が突き刺さつていた。
ボロボロに傷付きながら、氷室が攻撃に集中した僅か数秒を穴を突いて、釘撃を叩き込んだのである。

空気が肺から出、呼吸が苦しくなる。

この上ないカウンターを貰い、後退する氷室。

「速いな！縦拳の連打は。だけど、負ける気がしない！寧ろ、燃える！」
求道者は顔を上げる。

体は傷だらけだが、其の眼は死せず。

血潮が猛り、魂が震える。

反撃が始まる。

* * * * *

全身が痛む。
呼吸は荒い。

《結構：効いてるか。なら、あれを使おう》

即断即決。照は呼吸を放つ。

鳩尾から炭田へ、腹圧を高め、大きく呼吸。

二虎流 無ノ型 空。
むのかた そら。

体内機関を調整するために使われる呼吸法の一種であり、導水を作る前の照はこの技を使い、二虎との組手で負つたダメージを治癒し、早期復活を行つていた。

『今回は其処に、これも使う』

空で吸い込んだ息を鼻から吐く。と、眼から涙が溢れ出し、頬へと次々に、止めどなく流れ行く。
覇堺流 煌涙。
はかいりゅう きるい。

涙には網膜を洗浄し、潤いを保つ機能が備わつてゐる。照は泣くことによつて頭を冷静に、同時に視界をクリアにし、気持ちを整理する事を目的とする新たな体系だつた。
「何泣いてるのか分かんないけど、無防備だぜッ！」

氷室が吠えた。速撃連打の縦拳を食らえれば押し込まれる。今の自分には、其の状況を覆すのは容易ではない。

『躊躇せなければ』であるが。

「?」

繰り出したはずの左の縦拳が、照の身体を『すり抜ける』。直後に照は左下段で氷室の右太腿を一閃した。

『痛ッ!――コイツの打撃…やつぱり何か『おかしい』!』

氷室は照との攻防を重ねた事で、ある違和感を抱いていた。照の打撃は『重く』、そして『鋭い』。速度を重視する自分とは異なり、一撃一撃に強さを感じた。

問題は其の打撃を打ち込んだ後に来るはずの『衝撃』：それが『一向に来ない』事。照は最初に打撃を与えた時、釘撃と言つた事を思い出す。

『どんな打撃か分からぬ、だが速度は俺の方が上だ！』

迷いは捨てろ。

考える隙があるなら叩け。

連打し続ける。

叩け、叩け、叩け。

連打、連打、連打。

神経を攻撃に集中させ、子供とは思えぬ凄まじい、縦拳の乱打が放たれる。

だが。

『ツツツツツ……』

其の乱打が照を捉える事は無かつた。

あと少しで直撃する所で、拳の進行方向をずらされている。流れる刃の様に手の甲で縦拳が押し出され、空を切る。

『当たらぬえ！何で？さつきまでは当たつてた！なのに！』

痛みの中で、氷室は照の『真の狙い』を理解した。

そして同時に彼は、完全に『やられた』と理解するに至る。

「チクショ——」

言葉が紡がれる前に、頬に食らった釘撃の衝撃が炸裂し、脳を大きく揺らす。顎を殴られた以上の一撃に、氷室は耐える事が出来ず、白目を向き、地面へと倒れ伏したのだつた。

* * * * *

「う、うう——……ん。あ……ぐッ！」

目が覚めた時、当たりは暗くなっていた。起き上がるうとしたが、右腕と右足に思うように力が入らない。

其の理由が分かつた。生活に支障をきたさない、短めの木棒で当木され、包帯で巻き付けられていたからだ。

「あ、涼君。目が覚めたようだね」

焚き火が炊かれ、照が火の近くに座つていた。彼もまた、腕や足に包帯を巻き、其の戦いの苛烈さを静かに、だが確実に物語る。

「此処は……五熊、か？」

「ううん。此処は二虎、俺の生まれた場所? なのかな。取り敢えず、故郷: だと思う。あの後、涼君を抱えて蝗跳で二虎に戻ってきて、師匠に治癒をお願いしたんだ」

「師匠?」

「む、目が覚めたか」

此方に歩いてくる影一つ。其処には三十代の男が一人、薪を抱えて歩いてきた。彼は照の師でありニ虎流の使い手、十鬼蛇 二虎である。

水室は見ただけで、彼の底知れぬ実力と圧力を感じ取り、脂汗を垂らす。
「照と戦つたって聞いたが、成程……こりや強いな」

「でしょう? 特に縦拳の速さは俺でも防御に集中しないと、全然対処出来ませんでした」「ほお……そんだけ称賛するとはなあ。

——よし、水室 涼君よ。俺の弟子になつて今までより、もつと強くなつちやおうか?」

「…………は?」

まさかの弟子入れ宣言に、水室は啞然となり、やつとのこと絞り出した言葉も「は?」だけだつた。

「生きるために随分無茶してるようだしな。こつから先、確実に生きて行くなら弟子入りしちまつた方が楽になるぜ?」

ま、照にとつても君にとつても、互いが居る事で実力を磨き、伸ばし合える好敵手^{ライバル}が
増えて、良いと思うぞ。無論、強制はしねえさ。

最後に決めるのは君だし、な

二虎はそう氷室に告げ、石ブロックで即席の調理台を作り、其処に鉄板を乗せて、肉
を焼き始めた。

「晩飯は食うかい？ 氷室君」

「……………食う。 いただきます」

「食べよ食べよ！ 一人より三人の方が食事も美味しいよ！」

照と氷室の手合わせ。そして始まつた関係は、二人にとつて、戦友^{とも}として。

後に拳願仕合において、照は^は魔王^{おう}と。氷室は^{ひょうてい}冰帝として名を知ら占めるまでになるの
だが……其^そはまた、別の話。

第十一話 流星（りゆうせい）

中の地域の一つ、二虎。

「フツ！ ハツ！」

一晩の思考の後に弟子入りを決めた氷室は、二虎との組手に望んでいた。
「おーおー、速えなあ。氷室君の縦拳はあ。

——だが、動きがまだ単調だねえ」

自分の縦拳の連打を、昨日の照と同じような技で弾かれる。しかし其の動きは、照以上のキレと精密性を誇り、まるでそれは——

《何て言うんだつけ…あの、ひらひらした生き物》

まるで、空を優美に舞う。一羽の白い蝶々の様に美しかつた。
刹那、氷室の身体は宙を舞つた。

同時に意識を一瞬で、脳が認識するよりも早く、体から刈り取られたのである。

「二虎流・操流ノ型 天地……つと」

地面に叩き付けられる前に、照が氷室を受け止める。

「二虎さん！ あんまり強くやらないでくださいよ！ 涼君、まだ怪我治つて無いんですか

「らね！」

「ばかたりい。元々怪我させたんはお前じやろがい。

此方はこれでも、かなり手加減してやつたんだ。これ以上の加減、俺にやあ出来ねえ。
めーんどくさいし〜♪」

《本当にこの人は〜！》

「ツ：ハ！」

「あ、涼君目が覚めた」

「…………負けた、のか…………」

しょんぼりと落ち込み、暗い表情になつた氷室。

それを見た二虎は、彼にこう助言を投げた。

「…それでも、縦拳の速度はかなり良かつた。次に繰り出すなら、肩と背筋の脱力を意識しながらやつてみると良い。

後、連打の最中に下段蹴りや膝を使つて、相手の体勢を崩したり出来るようになれば、御得意の連打が通りやすくなる。それと真つ直ぐだけじゃ読まれやすいから、時々上下からも攻撃してみろ」

んじや休憩つと、二虎は丸太に腰掛け無ノ型 空で呼吸を調えつつ、目を閉じて集中し始めた。

「脱力…」

冰室はそう言い、疲労で重くなつた身体を地面に投げ、静かな寝息を立て眠る。

『脱力か…これは俺が、一肌脱ぐべきだろうか?』

二虎からの反省点を整理しつつ、照はそう考えた。

最強に至るには、より強い相手と戦い、打ち勝たねばならない。自分がやろうとしている事は、其の野望を叶える道を険しくする行為。

しかし、照はこうも思う。そんな困難で進み難い道を越えた時こそ、武道家という生き物はより強く、より高みへと進む事が出来るようになるのだと。

* * * * *

「涼君、少し良いか?」

翌日、二虎からの助言を元に縦拳の鍛練をしていた冰室へ、照は未開封の缶詰と長い板を抱えて声を掛けた。

「何だ? 今、鍛練してるんだけど」

「分かつてる。けど、昨日の涼君の戦いを見て、これはやるべきだと確信した。絶対にやつた方が良い」

缶詰を置き、板を乗せ、照は其の上へと乗つた。

「昔、曲芸師が丸い物体の上に乗りつつ、速い御手玉をしていたのを見た。初めは何だあれと馬鹿にはしたが、実際はとてもなく難しいの分かつてね。」

彼等は身体の『重心と力の入り抜き』を駆使する事で、不安定な場所でも軸がずれる事なく、演技を可能にしていた。其れを知り、鍛練を積み重ね続けた。お陰で、俺は身体の力みと脱力を使いこなせるようになった訳だ。

涼君は蹴りの銳さや脚の瞬発力、縦拳の速さが武器。其の武器が、身体の無駄な力みのせいで活かしきれていない。先ずはこれで身体から余分な力を抜いて、より速い動作が出来るようにならう。

「お、とう…」

水室も照に続く形で乗り、バランス感覚を掴もうとする。だが：

「ううおおおお!?ふげつ!!!」

コロコロと不規則に転がり、バランスを取らせない缶詰。身体を立て直そうと重心をずらした際に、水室は勢い余つて地面に叩きつけられた。

「俺も最初はよく転んだよ。何度もやつて、何回も失敗して、そして成功した時の嬉しさが何倍にも膨れ上がる。諦めないこと：これが大事」

前世で学んだ事。どんなに長い道のりだろうと、進み続ける事、歩み続ける事にこそ『意味』がある。途方のない道の果てを目指し続け、いつか辿り着けるように。

「照：お前 オツサン臭いな」

「涼君。俺、君と同い年位なんだけど？地味に俺、言つた事を気にしてるんだけど？」

「オツサン臭いっつって何が悪いんだ、思つた事を言つただけだ」

「縦拳みたいに真つ直ぐつてか：つて上手くねえよ！」

「ワーワーギャーギャーと口喧嘩を始めたと思えば、何時の間にやら組手に発展し、互いに殴り合いで血を流し合う少年二人。

『仲良いなあ、アイツ等』

そんな様子を片腕腕立て伏せをしながら見た二虎は、心中でそう呟いた。

* * * * *

雨が降る日も

「こうか!?」

「違う、膝と足首が硬い！左足が離れてる！外向きに出てるのは、了君の癖みたいな所があるから注意して！」

雪が降る日も

「肩に余計な力が入つてるから、重心取る前に必ず深呼吸！」

「があああああ!!わつかんねええええええええ!!」

二人の特訓は休む事なく行われる。

氷室は照から学び、照は氷室から学ばされた。

教える事の難しさ、感覚と理論は背反している事。

だからこそ。何度も、何回も。

特訓と組手を繰り返し、二人は互いに何をするべきかを汲み取り、自分の物にしてゆく。

* * * * *

月が昇つては沈み、太陽が其れを追い掛ける。

そんな日々が過ぎ、アキラが二虎の弟子となつて九ヶ月、氷室は三ヶ月が経つた、ある日の組手……

「フー……フー……！」

「ゼエ……ゼエ……！」

その日は風も凧ぐ、雲一つない、中では珍しい快晴日和。

照と氷室は、互いに身体に内出血と打撲傷が目立つ。

《釘撃……ホントに厄介過ぎる……》

喧嘩と組手を繰り返す度に、両者は相手の武を思う。

氷室にとつて、照の繰り出す打撃は、相手の防御を通り越したガード不能の貫通する打撃。

照にとつて、氷室の放つ打撃は、動体視力の認知を上回る速度を持ち、対処する事が困難な打撃。

互いにダメージを負い、消耗した体力を加味。繰り出せるのは、おそらく一発限りだろう。

故に二人は最後の一撃を放つために構える。

何だ？』

其の感覚を、二人はほぼ同時に感じ疑問とした。

照は奥義を継承した時と同じ、感覚が研ぎ澄まされ。

更に全身の力が『心臓』の中心から溢れ出す感覚を。

氷室は膨らませた風船から空気が抜かれ、萎んでゆくように。

全身から『力』が抜け、あらゆる『力み』が失くなる感覚を覚えた。

『今なら…撃てるかもしれない！最高の撃をッ…！』

『今なら出来る…！最速の縦拳が…！』

同時に、二人は動いていた。

『分かる……感覚が――――――!!』

全身を絶え間無く流れ続ける血流。

其の流れを、鬼麿の原理と同じように操り、背筋→肩→腕の順に連鎖的に伝導、加速させて行く。

其の打撃は至つて単純。^{シンプル}しかし単純故に最高の打撃となる。

放つは血流の加速+筋肉運動。

直線の撃で敵を貫き、^{破壊する。}

後に照は、此の撃に『釘撃・迅』^{くぎうち}と『槍撃・迅』^{じん}^{そうげき}いう名を与えた。

『脱力から緊張へ！全身をバネに：たつた一撃に全部乗せる！』

深く、深く、深く。息を吸い込み、其れを一気に吐き出す。吸い込みに連動し、冰室は身体を低く、低く下に構え――息を吐いた瞬間に地を蹴る。

彼が行つた一連の動作は、武士の放つ居合に酷似していた。だがしかし、其の拳速は居合の比に非ず。

まるで夜空を駆ける、一閃の星光の様に煌めき。

拳の風圧を、拳の撃音を、彼の後ろへと置き去りにしていた。

後に冰室は、光速へと到達した此の必殺の縦拳に『流星』^{りゅうせい}と名付けた。

カツ!!!!と、拳は一瞬でぶつかり合い、爆弾が弾けた様な轟音が、二虎に響く。

「おい————しつかりし————お————！」

この日、二人の少年が薄れ行く意識の中で最後に見た景色は、血相を変えて二人へと走り寄る、十鬼蛇 二虎の姿だった。

第十二話 本物（ほんもの）

「へ？涼君つて『狼參』出身だったの？」

一日の修行を終え、食事を取つていた時の事。二虎が一人に出身地を聞いてきた為、冰室が答えたところ、照は驚かされた。

「食べ物を探してて。狼參は食料が全然無いから、大体他の奴から奪つたり盗んだりするしかなかつた。五熊ごゆうに来たのも食べ物を探しに遠出してた。

まさかニコさんに弟子入りするなんて思わなかつたけど」

そう言つて冰室は串焼きにした魚へと豪快にがつつき、魚肉を頬張る。三ヶ月半が過ぎた了君の身体付きは、以前よりも筋肉の隆起がくつきりとし始めていた。

修行と組手の日々が、彼を着実に成長させてしているのが伺える。

「因みに俺は十鬼蛇ときたの出身だ。二虎に来たのは修行の一環。ま、お陰で良い拾い物が出来た訳だしな」

話を終える間に、もう三匹焼き魚を食べ終えていた二虎。

「まあ…暫くしたら、お前等を修行の為に十鬼蛇区へ連れていくこうと思つてる。強い奴等と死闘して、少しでも実戦経験を積みたいだろ？」

『自分勝手なところもあるけど、なんやかんや言つて、俺達の事を良く見てるんだよね、二虎さん。まるで父親みたい』

そんな事を抱きつつ、照も負けじと焼き魚に噛り付いた。

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

二虎から十鬼蛇区へと向かう話をされてから、五日が過ぎた日の事。今日の照は一足早く起床し、自分の流派である霸堺流(はかりゆう)の新たな技の開発に着手していた。

数日前、氷室との組手で掴んだ釘撃(アレ)の感覚を完成へ近付けようとしたのである。

「血流と筋肉運動…脱力から緊張へ…」

一撃、一撃、一撃。

一手の度に修正を見つけて、また一手繰り出す。

一手放つて、修正。一手放つて、修正。

何度も、何回も。繰り返し、繰り返し、繰り返す。

「むう。足の重心…違う。…じゃあ手首や拳の位置かな? そうなると膝の力み…そうじやないか。…うむむ…」

ほお。随分と変わった撃を撃つてるな

「!?

刹那、反射的とも呼べる反応で照は身構えていた。

其の者が放つた声は、底知れぬ力が宿り。

其の者が纏う気迫は、一言では表現等出来ず。

其の者が宿す力は、二虎と同等か其れ以上の力が在った。

「アンタ：『誰だ』？」

照の視線の先——其の者、男は立っていた。

男は黄金に輝く短髪を後ろに整え、瞳孔は猫のように細く鋭利であり、袖の無い黒の胴着を着付けている。

「誰か、か。というか、まさか半年で『奥義繼承』まで漕ぎ着けるとは、正直予想外だった。

——ホント、末恐ろしい野郎だ

奥義繼承——其きおうが鬼麿きめうの事を言つてゐる事が、照には分かつた。

「何でアンタが鬼麿の事を知つてゐる？」

「そりや知つてゐるさ。俺は『アイツ』と同門だしな」

何を言つてゐるのか、照には分からぬ。だが、ハッキリとしている事がたつた一つだけある。

此の男は、自分の『敵』だと言ふこと。

全身の毛が逆立ち、神経を研ぎ澄まして、相手の身体から発する流れを観る。此の男を相手に、自分は一瞬たりとも、絶対に油断してはいけない。

「ありやりや、もう臨戦態勢に入りやがった。切り替えが早え」

「……つだけ、問います。アンタは『何者』だ?」

照は問う。これまでの時間は僅か二十秒弱。

男は、照に対し。獰猛に、其の答えを言つた。

「……俺は『本物の二虎』だ——」

ズドン!!!!

「ツとお……オイトイ、いきなり仕掛けるたあ随分せつかちだなあ、よお?」

言い終わる前に、男の左足の筋肉が一瞬『力んだ』事を力の矢印を見て察知した照。

霸 壕 流

蝗 跳 十二虎 流

火 天 ノ型

烈火。

今自分の出来る『最高速の移動』と、ぶつつけ本番だった瞬鉄・碎十縦拳の複合攻撃を行つたが、攻撃を『外された』。

それも、二虎との組手で飽きるほど、やつたり、やられたりしてきた『柳』に酷似した技によつて。

「アンタは二虎さんと同門とか言いましたけど、俺にとつての『十鬼蛇 二虎』は彼だけです。」

「二度と二虎を名乗らないでください」

「そりや乗れない話になる。十鬼蛇 二虎は『俺の名前』だ」

そう言つた本物の二虎を名乗る男は、高速で照との間合いを潰す。照は火天ノ型
幽歩^{ゆうほ}で距離を保とうと動く。

しかし男も幽歩で距離を取らせない。照の脚を柳で崩し、片腕を掴み取り、鉄碎^{てつさい}・穿^{うがち}を彼の鳩尾へ放ちに掛かる。だが…：

「ん!?」

柳で崩した筈の自分が逆に崩された。同時に照が御返しとばかりに柳を使って男を投げ飛ばす。しかし着地され、瞬鉄・爆で再び接近されてしまう。

『距離を取らせてはくれないか…！厄介だ…くそつたれめ！』

「今のは『二虎流には無い技』だつたな。崩し技の柳を崩し返すたあ、中々やるじやねえの。益々気に入つた！」

「アンタと話すつもりはない！」

「連れないねえ～！」

右腕で鉄碎・穿。照は脱力し、男の腕を絡め取り、脇で押さえ込み、反撃の釘撃を入

れる。

この技の名は二虎流・水天ノ型にこりゅう すいてんのかた 水草取りと呼ばれ、槍や突きを見切りつつ押さえ、敵を逃がさない為の技だ。

『アイツにしちゃ、随分と良い弟子を育ててやがる。技のキレ、運足もさる事だが、力みと脱力が10にも満たないで『一流』の域に居やがるときた。

こいつは油断してると、逆に食われるかもしけねえ』

男はそう思いつつ、水草取りで取られた右手の鉄碎・穿を解くと、直ぐ様鉄指てつしに切り替え、指先で照の肋骨を圧す。

骨を押され、痛みで拘束を解き離れる照。しかし男も逃がさない。

操流・水天ノ型そうりゅう すいてんのかた

『速い！けど、涼君が本気で繰り出す縦拳程じゃない！』

水燕すいえんでラツシユを掛け、地力の差を見せ付ける。
回避に集中し、霸壠流はかりりゅう 蛇縫へびぬいを使いつつ、男の懷に飛び込んだ。

男の『予想通り』に。

照が男にダメージを与える為には、自ら射程距離に入るか、相手が入りに来るのを待

つかの『どちら』かしかない。ミドルレンジでの戦いにおいて、手足のリーチで劣る事を繰り広げられる攻防で知つてゐる。

積極的に攻撃の隙を窺つた照なら、確実にラツシユを狙つて攻め入ると予測を立てた。

カウンター気味に瞬鉄・穿を放つ。それで終わりだ。

3cm：2cm：1cm 照の身体が、瞬鉄の最も威力を發揮する間合いへ入る。左手で繰り出す貫手の一撃。

回避は間に合わない。まさに一撃必殺である。

——この瞬間までは。

「！」

飛び込んだ筈の照の姿が其処には無かつた。

「シャアッ!!」

キレの有る一声、男は直感で空いた右腕で頭上をガード。直後、ズシン！と重い一発が右腕に乗り掛かり、地面に輝が入る。

「ちい、防がれた!!」

奇襲の一手を防がれ、照は悔しそうに吐き捨てると、再度距離を取った。

彼が放つたのは、蝗跳の跳躍時に生まれるエネルギーを推進力として飛び、水天の脱力と金剛の筋肉硬化を付与し、空中で回転・落下することによつて、威力を高めた変則踵落とし。

新たなる『蹴り技』の体系。

其れが、ばかりりゅう
霸堺流おのぐらま
斧車である。

「戦いの中で『自らの可能性を広げる』：厄介な才能だ。だが、其れでこそ『器』に相応しいとも言える」

「しかも右腕が痛みやがる。さつきの『打撃』：衝撃が時間差で襲い掛かるつたあ、面白い技だ。

お前、名前はあるか？個人的に名を覚えておきたい

姿勢を崩さず、鋭利な目は変わらないが、其の言葉からは『知りたい』という気持ちが在るのが分かる。

「…………鬼灯 照」

「照、か。良い名前だ。じゃあ照よお。俺は此処から先、滅茶苦茶『強くなる』。其れを

凌げたら、さつきの打撃を『より強く出来る』、ヒントを教えてやる
「ヒント？ 何ですかそ——」

一瞬。空気と地面が、轟音と共に爆ぜる。

砂埃が空間の急激な変化に巻き上げられ、空氣中に散り行き。

そして――――――『響いてくる』。

ドツ！ ドツ！ ドツ！ ドツ！ と、まるで地響きと銅鑼の音を混ぜ合わせたような、けたたましく。それでいて聞くと『嫌な感情』と『不快感』に襲われるよう。

風が吹きすぎ、視界が晴れた時、照はギョツと目を見開いた。

男の身体は全身の太い血管が浮かび上がり、髪は逆立っている。目は真っ赤に純血、熱を帯びた白煙が体に纏うようだつた。

「サア……いくぞ、照!!!!」

第十二話 沖縄（おきなわ）

「むにやむにや……へへ……」

五熊・某所。薄手の布団に抱かれ、少年が一人眠っていた。名前を氷室涼といい、ある人物の元で修行中の身に在る。

「てるう……すげえだろく……俺のりゅーセーはく……」

夢現、何を思う、氷室涼。照ならきつと、そんな事を言うのだろう。

「もーい」「かーい……もーいつかーい……えへへ……」

ドンッ!!!!!!

「うおああああ!!!!!!」

そんな氷室を叩き起こすかのような、謎の爆発音。跳ね起きた少年は即座に臨戦態勢で構えを取り、周囲を警戒する。

「起きてるか!?」

一人の男が、氷室の様子を見に来た。彼は十鬼蛇二虎、氷室ともう一人の少年の師

にして、二虎流の使い手。其の顔はいつもなら在る筈の『余裕』が一切無い。

「ニコさん!! 今のは何?!!」

「今話してる暇はねえ! 照は何処行つた?!!」

「分かんない! 起きた時には居なかつたよ!!」

『……嫌な予感がする、照。無事で居ろよ……』

* * * * *

二虎区域・某所：

ドツ！ ドツ！ ドツ！ と聴覚を害し、真剣を逆撫でするかのような嫌な音を響かせ、豹変した男は照へと言う。

「サア…止めてみろ、照！」

『こいつ…本当に何なんだよ…!? これだけの殺意を、人が持てるのか!?』目に見えるような、濃厚で絶大、そして比較出来ない殺意の大きさに、照の警戒心はMAXまで跳ね上がる。

極度の緊張で、口の中が異様なまでに乾いてゆく。

殺意に当てられたのか、呼吸も乱れ始める。

まさに照に起きた変化の隙を見逃さず、男は静寂を破り仕掛けた。

そして其の姿が、照の前から忽然と消える。

「え――――――」

直後、頭部右側を抉る鋭い。

否。『銳過ぎる』打撃が、照の顔面を撃ち抜いた。

殴られた事は分かる。ならば男は何処に行つた？

思考の最中に再び打撃が襲い掛かる。

右足をロー・キックが一閃し、左腕を手刀で叩かれ、左脇腹を三日月蹴りみかづきげを貰つた。

「ゴホッ……！」

肝臓、肺、鼻、太腿、大胸骨：一撃一撃が重い。

蓄積して行くダメージ。口や鼻から血が流れ、意識が朦朧となつてゆく。

『本当に…死ぬ――――――』

打たれる度に走馬灯のように思い出す、僅かな転生からの二度目的人生。

『二虎、さん。俺は――――――』

血で赤にぼやけ、霞む視界。

既に四肢は内出血で腫れ上がり、肋は十程折れただろう。

傀儡を使い、やつと動かせるかどうかまで消耗しきった身体。

全てが終わる…そんな思考が頭を過った時。

『照、お前は何で強さの深みに至ろうとしてるんだ？』

二虎の言葉が、照の失われかけた意識と力を呼び戻した。

「——そんな事…決まつているツ!!」

男の左前蹴りを、膝に僅かな力を入れ、縮地を併用して紙一重のラインで回避する。

『今のを躊躇すか…！やはり『器』に見込まれただけの才覚はあるツ！』

「俺が最強になるのはツ…！」

『俺』の『霸壇流』こそが！

『当世最強』だと！

此の世界に轟かせる為だア！』

足を捕まえ、懷へ滑り込む。

飛んで来る鉄碎が、おでこに当たる。

『痛い？そんな事は分かっている。『此の瞬間』しか勝機は無いんだろ!!

だつたら、行け！行くしか無いんだ!!』

額から血が放たれ、眼球に掛かり、視界を赤く染める。

ありつたけ

外したら負ける。此の一撃に、今の自分の全身全靈を乗せて撃つ。

『覚悟を決めた日だ…良いだろう、お前に『神』を宿してやる。鬼灯 照！』

男の右手が貫手に変わつて放たれた。狙いは心臓——自分と同じ『力』を、少年に宿す。そうすれば『器』は出来上がる。

ドンツツツツツツツツツツツツツツツツ!!!!!!

「ハアツ…ハアツ…ハアツ、ハアツ…ハアツ…ハアツ…！」

——『畏れ入つたぜ』、照

けたたましい音が男から鳴り続ける戦場。呼吸を荒く、片膝を付いたまま動けない照。

一方の男は左腕から『大量の血を流していた』。だらりと垂れた其の腕からスプリンクラーのように、止めどなく流れ続けている。

傷口を見た後、男の身体は元の肌色へ、赤く充血した目も戻つていた。

いつつ、氷室との戦いで得た釘撃・迅の血液と筋肉の流動を加えた、新たな鬼麿で男が差し込んだ左腕をブチ抜いたのである。

「アイツの奥義……糞だと嘗めたが、どうやら認識を改めにやイカンらしいな」

腰帯を取り、傷口付近に固く強く縛り付け止血すると、不敵な笑みを浮かべつつ、照に対して言つた。

「俺を退けた褒美だ……さつきのヒントを教えてやる。」

『平良 厳山』、ソイツの元を訪ねて弟子入りすると良い。……んじやな、鬼灯 照』

くるりと、何事も無かつたように男は歩き去つていった。

『勝てた……のか、な——いや、勝て、た……訳じや、無い…………『負けた』……これが、正し——い——か……』

振子投げ。釘撃。斧車。鬼麿：男を驚かせ。手傷を与えられた技は、四つしかなかつた。

▲…………遠い、なあ。……最強へ、至る道程……つての…………

誰かの声が聴こえる。全身の倦怠感と許容量の限界で、照は意識を失う。

「照！ 照！」

「ツ——重傷じやねえか……医者ん所に急ぐぞ!!!!」

二虎に抱えられ、照は運ばれて行く。氷室は血塗れの照を見、此の場で起きた出来事

を想像しながら、二虎の背中を追い掛けたのだつた。

* * * * *

二虎某所：闇病院一室。

「……ツ、んあ……？」

照が目を覚ました時、白のペンキに塗り染まつたコンクリートの天井が視界に映る。次に気付いたのは、自分の身体中に包帯が巻かれ、身体には柔らかな布団が掛かつていた事だ。

「……此処、何処だ——」

「あ！ 照！ ……良かつた、目が覚めたんだな」

聞き馴れた声。横に首を向けると、水室が自分の顔を覗き込んでいる。其の表情は安堵の色があり、照の手を握つていたのだが、ハツとなつて彼の手を放した。何故だ。

「起きたか、照——」

壁に寄り掛かっていた二虎が、水室の隣に置かれた椅子に座り、照と視線を合わせた。「回りくどいのは無しにしよう。照——」

お前は誰と、戦つていた？

二虎の問い。

照は彼に対し、正直に。

そして――素直に答えたのだつた。

「其の人は……『本物の二虎』、そう名乗つていました」

二虎の目が、驚愕と共に丸くなる。氷室は何の事だと疑問を浮かべたが、照は次々と自身が感じた疑問を投げ掛けた。

「二虎さん。……『二虎流』って一体何なんですか？ 彼は貴方と同門だとそう言つています。それに、俺を『器』に相応しい男とも。

教えて下さい。……彼は」

「照」と、二虎の貫手が自分の首筋に触れていた。今までの殺意が生温い物だと思える程、本気で込められた其れに、照は息を飲むことも、言葉を発する事も出来なくなってしまう。

「――そいつは『まだ』教えられねえんだ。いずれ其の事は話す、だから……な？」

優しい言葉に関わらず、顔は一切笑っていない。氷室は腰を抜かしているし、照は微動だに出来ずについた。

「照。氷室。数日前、十鬼蛇区に連れていく約束をしたが、予定を変えざるを得なくなつた。

「…これから『二年』、お前ら二人を『知人』に預けようと思う」

「えつ！・じやあ組手は!!組手出来なくなるじゃんか！」

組手で一度も良いところを見せられていない氷室が反発するも、二虎は頭を軽くポンッと叩き、こう言つた。

「落ち着けえい。其の知人は俺が今まで見てきた中でも『ダントツに強い』。正直言つて、俺の師匠と『同格』のレベルに居るかもしんねえ。

其の人の元で暫く修行して、自分の視界を少しでも広げておけ」

「…それで、何処に向かうんですか？」

「……『沖縄^{おきなわ}』、だ」

二虎が言つた知人。俺と氷室、そして後に二人の弟弟子が世話になり。

後に、俺こと——鬼灯 照の最強にして、最大の壁として立ちはだかる、ある人物との出逢いが待ち受けていた。

第壹章 琉球篇

第十四話 怪腕（かいわん）

照が本物の二虎と名乗る男と戦い、一ヶ月の時が過ぎた。

あの戦いで負つた傷が粗方治り、医者からも激しい運動禁止の令が解けたので、二虎は氷室涼と鬼灯照を連れて、退院翌日に無法地帯『中』を出た。

三人は港で船に乗り、二虎の知人が居るという目的地、沖縄を目指して、船に揺られる事に。初めて見た海に氷室は歓喜の声を上げて大いに燥ぎ、照は泳げないかなあと海を見つめ。

そんな二人を見ながら二虎は、彼等へ操流の修行と組手をやるように指示。不安定かつ不規則な波に揺れる船上での操流ノ型の修行、今まで以上に難解に変わった組手に二人は苦戦しながらも、何とか環境に適応していくつた。

船旅は三日程続き、四日目の昼下がり……

彼等は沖縄に上陸した。

* * * * *

青い空と海、白い砂浜と雲。

照り付ける灼熱の日射し、赤土で創られた屋根瓦。

自分達があの頃に見た沖縄は、まるで楽園のようだつたと、照と氷室は後にそう語つた。

二虎に導かれ、二人は沖縄を歩く。

歩いて、歩いて、歩き続け。

日が水平線へ沈み、入れ替わりに三日月が顔を海から出した頃。

「——此處だ」

三人は目的地に到着。辿り着いた場所は、港町から離れた所に在る、他と比べれば一
際大きな一軒家。照は此の家が、高い階級の武家屋敷にも見えていた。

そして玄関と思われる曇硝子と木材交差の扉の横には『怪腕流』^{かいわんりゅう}とだけ書かれた、達筆な墨汁文字と、木彫りで出来た不動明王の木像が置かれている。
照。涼。二人とも、粗相な行動はするなよ。」

ゴクリと喉を鳴らす少年達。二虎が扉を横に開き「失礼する」：：：そう言い、玄関へと

足を踏み入れた。

部屋は和室で、蠟燭の明かりが四方にのみ灯り、薄暗さも相まって少し不気味な雰囲気を醸し出す。彼の後に続き、玄関へ入る照と氷室。

『二虎か』

たつた一言。

何気なく、素つ気なく。

只々放つた一声。

ビクリと身体が跳ね、二虎の後ろに隠れた二人。

「あの時は世話になつた」

部屋が突然、白く明るくなり思わず目を細めるが、其れも一瞬。恐る恐る目を開くと、二虎の視線の先——部屋の奥に、一人の男が上半身裸で片手に巨大な瓶かめを、何事も無いかのように軽々と持ち上げていた。其れも『指先の力』だけで。

彼と目が合つた瞬間、二人には解つた。

否：『解つてしまつた』。

此の男の持つ、圧倒的で絶対的なまでの実力を。

二虎が言つていた『ダントツに強い』という意味を。

「照。涼。彼は黒木

くろき玄齋げんさい、俺の古くから知り合いだ」

巖を打ち碎く事など、朝飯前とも云わんばかりの剛腕。
どつしり地に根を張り、構える大樹の如き太い足。

あらゆる衝撃に曝されようとも、決して崩れないだろう頑強な体幹。
平静の状態ですら、格下を全く寄せ付けない巨大な闘氣。

見た目の年齢は二虎と同じ位——もしくは何歳か上だろう。

たうじん達人：俗世から離れ、自らの目指す境地の為に全ての時間・労力を捧げ、求道を進み続ける。かつて、前世でそう呼ばれる者達が居たのを、照は臆気ながらに思い出していた。

そして同時に照は、ある考えに至る。其れはある種の、照自身の『悪癖』とも言えるモノ。

拳を握り締め、決意を秘めた眼差しと共に、彼は二虎と氷室よりも前へと歩み出たのである。

「て、照……？」

氷室は疑問を投げ掛け。

「……はあ」

二虎は彼が何をしようとしているのか、その意図を見破り。

「小僧……何か言いたげだな」

黒木は只、目の前へ出て来た少年を見る。

「——黒木さん。一手、俺と組手をしていただけますか」

照はそう言い切つたのである。組手に置いて今日まで、二虎から一度も勝利していない彼が、黒木と闘えば待つて『敗北』のみ。

だが、そんな事は当の本人が一番理解している。

彼を駆り立てた物——『圧倒的で絶対的な強者』に今の自分は何処迄食らい付けるか、求道者達が共通して持ち合わせて『挑戦心』による物。

「この黒木、生憎『弱者』に撃つ拳は持っていない。そして、お前自身が分かつてい「それでも——」

黒木の言葉を遮り。照の言葉が響いた。

——それでも構いません。俺は、二虎さんが認めた貴方の『強さ』が知りたいんです

单纯。だがしかし、この上ない程に。

鬼灯 照という人間の本質を示した答えだつた。

強き者と戦い、自らの強さを証明する。

例え其の相手との差が、圧倒的な迄に離れていようとも。

「黒木、俺の弟子が——」

謝罪しようと頭を下げるが、掌を翳して黒木は制止させつつ言う。

「いや、良い。それよりもだ…二虎。時間を計れるな」

「！」

「小僧。名を名乗れ」

瓶を置き、鬪気を解放した黒木。其の圧は先程の物とは比にすらならないほどに大きく、覺悟なき者が対峙したならば、まず確実に萎縮してしまうだろう。

「鬼灯 照。二虎さんの弟子の一人です」

「——鬼灯 照。お前の気概に免じて、其の我が儘に三分間だけ付き合つてやる」
来いと、其れだけ言い。瓶を同じように指先の力だけで持ち上げると、先導して三人を案内していくた。

* * * * *

黒木邸兼道場。屋敷内でも特に大きな間取りを持つ其の場所は、現在異様な空氣に支配されている。

「黒木さん、ありがとうございます。我が儘に付き合つて貰つて

「三分だけだ。現状のお前の持てる、全力を見せてみろ。後悔しないためにもな

「ツ…はい！」

両者、奇しくも左手左構えの体勢。

夜の静けさに、柱時計のからくり音が不気味に響く。

「準備は良いか?」

「大丈夫ですニ虎さん。何時でもどうぞ」

「無論」

緊迫した空氣の中、ニ虎の左手が静かに上がる。
氷室が息を呑み、今より起きる戦いを待つ。

そして…。

「…………始める」

濃密で、凝縮され、あまりにも一瞬。

それほどまでに、凄まじい組手が始まった。

第十五話 圧倒（あつとう）

「始め」

二虎の合図が響くと同時に、即座に仕掛けたのは照だつた。自身の流派：霸壠流にして、長距離移動にも転用可能な跳躍歩法：蝗跳。

不規則かつ緩急を加えた其れは、まさに水田を自由自在に跳ね回る蝗の様：更に二虎流の歩法：火天ノ型：火走を同時に使用する。

これにより、照の幻影達が四方八方に現れているかのように彼等には見えた。

『此処だ――』

狃うは死角、音を立てぬように爪先で着地。火天ノ型：烈火で高速接近。そして撃つは、霸壠流の基礎たる技。

相手の体に衝撃を徹し、筋肉や骨へと浸透、中芯に到達させ時間差を以て破壊する、釘撃。

通常の打撃と遜色が無いがために、撃の本質を見抜く事は不可能に近い。

二虎や氷室に、初見殺しと謂わしめた此の技ならば。

当てる事は可能な『ガツ！』――『はずだつた』。

「え——」

黒木の身体が、攻撃してきた照の『真正面』に向き直り、釘撃を繰り出した腕を、別方向へ弾いていた。

『嘘だろ……!? 見えてたのか、照の動きが……!?』

水室は驚愕する。彼が黒木の死角を狙つて釘撃を放つたのは分かつた。黒木はそれを『分かつた』上で、数瞬『早く動いた』のだ。

「……すげえ」

本来ならば、距離を取らねばならない。

相手の出方を、確実に警戒しなければならない。

初撃を防がれた事の原因を、頭の中で思考しなければならない。

其の何れをも、照はしなかつた。否、『したくなかった』。：答えは最早其れ以外に無い。

今は。

此の一分一秒さえ惜しい！

「ハアアアアアアアアアア!!!!」

釘撃と水燕、奥義継承の戦いで二虎が使つた合体技。

不規則な軌道に加え、判別が難しい釘撃の撃。

滅多打ちとも、暴風雨とも言うべき連打の嵐が、黒木へと襲い掛かる。

『何だよアレは……!?』

『マジか……!!』

照、そして氷室は心で同時に声を上げた。

『撃墜』されている。連打に繼ぐ連打、攻撃を一切途切れさせぬように放っている。――

にも関わらず、全て弾かれ、叩き落とされ、黒木には『一撃』も当たらない。

その時、照が連打を止め、打撃を肘撃ちに切り替えた。しかし、これさえも止められる。

直後に下段蹴りを放つたが、軸足を払われ地面に背中から落ちる。

黒木の正拳が照の顔面に襲い掛かり、何とか紙一重で躱わして、今度は瞬鉄・碎。
だが下に崩され、左の掌底が鳩尾当たる。

身体の悲鳴が呼吸として上がるよりも早く、続け様に裏拳が顔面を直撃。

『ツツツツツツ……!!』『重い』ツツツツ!!!!

二撃喰らった事で、照は黒木の打撃の『質』を知った。照が思うに、打撃には『三つの質』がある。

『速』と『強』と『重』。

氷室の繰り出す『速』の打撃、二虎繰り出す『強』の打撃。其の何れとも黒木の打撃

は違う。

自分と同じ『重』を持った撃。此程までに重圧を乗せた打撃は初めてだつた。

——こうゆうのが良い。

「！」

黒木の表情が一瞬：ほんの一瞬だが、驚きの色を見せる。

「…小僧、笑つているか」

「そう、でしようか…？…分かりません」

けれど！と、照が再び攻める。次に蛇縫(へびぬい)で懷へ入らんとしたが、其処に左膝が『置かれていた』。直感でヤバいと、止まつた迄は良かつた。

だが其の直後に、左鎖骨からバツサリと。胴体を斜めに袈裟斬りで切り裂かれたかのような痛みが襲う。

右手刀、完全に『誘い込まれていた』。

《やつぱりだ！—この人、『先読み』が使えるッ！》そうじやなきや、俺が殴りに行つた時に反応出来たのも、水燕の連打を撃ち落とせた事にも説明が付かない！！》

先読み：武の理(ことわり)に、強さの深みに近付くと其の領域に至るとされる、一種の極致。

『先んじて行動する』という其れは、人により様々な解釈が出来るものの、共通の認識と

して『究極の力』と位置付けられている。

《空手の練度、先読み、冷静沈着に正確無比な迎撃・規格外の達人ってのは、こうゆうのを言うのかな》

釘撃・迅に水燕、現時点の最速の連打さえも防がれる。そして連打の中、両腕を掴まれ、膝蹴りを腹に貰い、頭に黒木の頭突きが迫り来る。

《だけど！》

「一発くらい入れられなきや…自分が納得出来ない!!」

「ゴツ！」と一際大きな音が屋敷に響く。

「…ほう。この黒木に、一撃見舞うとはな」

確かに頭突きは決まっていた。しかし、照の額からは細い血の線が引かれ、軸足にした右足の周りに大きなクレーターが出来上がる。そして照の左足は黒木の右腕を蹴り抜いていた。

頭突き直撃の瞬間、照は操流・水天ノ型
（てうすい）導水で衝撃の八割を体外へと流しつつ、残り二割を攻撃速度に転用。

渾身の釘撃・迅と鉄碎・蹴で黒木の右腕に一撃を叩き込んだのである。

「あ、当たった!! 照の攻撃が!!」

「ハア！ハア…どうだ！」

「だが……」

まだまだ、だ。

瞬間、照の身体を連續で撃ち抜く、六連の正拳突き。

咄嗟に操流で一発を流し、不壊で一発を凌ぐが、残りは諸に攻撃を貰い、道場の壁まで軽々と吹き飛ばされて、めり込むように少年の身体は叩き付けられた。

「て、照！」

「…………三分経過。組手終了だ」

終わりを告げた二虎の声。同時に駆け出す水室。

『……強い、な……本当に……。いつか……俺も、其の『領域』に……』

最後まで不敵な、それでいて何処か嬉し気な笑みを浮かべながら、この日の照の意識はプツツリと途切れたのであつた。

「…………」

「すまん。俺の弟子が――」

謝罪の意を示そうとした二虎に対し、黒木は言葉で遮つた。

「二虎よ。……良い弟子を持つたな」

「黒木……」

「右腕が『軋んで、響いている』：衝撃が身体の内側で爆ぜる打撃。一朝一夜、ましてや

並大抵の鍛練では決して身に付かぬ。

この俺に、戦いで爪痕を付けたのは『お前以来』だ
ズグン・ズグン…と、響き続けている右腕を見つめながら、黒木は氷室に肩を貸され、
壁から立ち上がりせられる照に視線を移し、言い切った。

「黒木…頼みがある。一人を、俺の弟子達を二年間。預かつて欲しい」
「何か、理由が在るようだな」

「ああ」

ニ虎は黒木に此迄の経緯を話してゆく。

「…俺は弟子は取らん。其れは分かつてゐるな?」

「承知してゐる。アイツ等はあれでも『中』の過酷な環境を生き残つてきた。修行や食料く
らいは自分達で考え、行動して、何とかするさ」

「…良いだろう。お前は必ず戻つてこい」

黒木の言葉に、ニ虎は静かに頷き返した。

照と氷室、そしてニ虎。運命が再び交わるまで、彼等は暫しの別れとなるのであつた
⋮。

第十六話　観察（かんさつ）

俺が目覚めた時、二虎さんは既に道場には居なかつた。

黒木 玄斎曰く、他用が有り危険を伴う為に涼君共々、二年間預かる事になつたとか。食べ物なんかは自分達で取つてくる代わりに、寝場所は此方で用意するとか……あの人、飄々してゐるのに良く見てるんだよな。

そんな訳で、俺達二人は彼の元で御世話になることになつた。取り敢えずは食料確保が最優先になる。

* * * * *

沖縄生活、一日目。

俺達は黒木さんから千円札を一枚ずつ貰つた。何かあつた時の為に持つておけと、彼は渡した。

自分が生きていた時代とは変わり、今は金も金属では無く紙が主流：涼君は初めて奪う以外の方法で手にしたお金に興奮して、まるで兎のように跳ねている。

まずは、食べ物を確保する為に道具を買うことにする。そうなると釣りが良いだろ

う、涼君でも簡単に出来ると思う。

お金を渡した後、黒木さんは鍛練に戻つていった。思つたけれど、あの人つて一体何時休んでるのかな？

道具屋で手頃な棒と針、丈夫な糸を買い、簡易的な釣竿を造り上げた。前世の記憶を頼りに作つた為に、若干粗末だが、釣りをするなら何とかなる…と思いたい。

早速やりたいと涼君は、子供らしくはしゃぐが、海や川が穏やかな場所を探してから

と制止させ、目星を付けることにする。

先ずは近場で良いだろう。黒木さんの屋敷から歩いて少し掛かる、海に突きだした道の先に在る、変な形の岩達がある場所。今回は此処にしてみよう。

それから数時間。

全く食い付かない事に怒つた涼君は、文句を垂れて釣るのをやめてしまった。今日の飯は此の釣りに懸かっていると言うのに…。

そんな俺達に声を掛けたのは、少し小太りなおじさん。大きな箱をぶら下げて、手には釣りの道具と空いた缶を持っている。…そして何だか酒臭い。

話を聞くと餌が無いから食い付かない、気付けば当たり前の事を言われてしまつた。

釣用の餌を少し分けて貰い、直後に竿が撓り、俺は全身の筋肉を使つて、一匹の魚を豪快に釣り上げた。川で釣った魚よりも大きくて太り、そして綺麗な赤い鱗を纏つた魚。大興奮する水室、釣つた魚を見たおじいさんは驚いた顔をしていた。

彼が言うには、俺が釣つたのはハタと呼ばれる沖縄では一番高価な魚で、刺身も良いが煮魚にすると、とんでもなく旨いのだとか。

刹那、俺達二人の腹の虫が元気に鳴き、彼から「魚屋に持つていて捌いて貰いな」と言われた。

この日、俺達は沖縄で初めて魚を釣り、そして旨い食事に有り付いたのだつた。其これから夕方まで釣りに挑み、俺は十四匹で涼君は七匹釣り上げた。因みに酒臭いおじさんは十四匹と、かなり釣つていた。

最後に彼は大屋おおや健けんと名乗り、俺達と別れる。此れが後に色々な驚きを生むのだが：それはまた別の話…。

* * * * *

沖縄生活、八日目。

釣りに行こうとしたが、天気は生憎の雨。何をしようかと考えた時、黒木さんが瓶を両手に指先の力で持ち上げていたのを見た。

何れ越えなければならない相手：其の強さの根源を知れば、自分自身も今以上に強くなれるかもしない。武とは観て学ぶ：そんな言葉がある。

涼君と共に物陰から様子を伺っていたら、視線が此方に向けられた。特にどうする訳でも無く、ただ見ているだけと彼に伝える。

「照の打撃は、足りない『要素』が二つある。

『正しい重撃』と『全身の連動』。其れが出来ねば、格上は倒せん』

そう、黒木さんに言わせてしまつた。正しい重撃：つまり型だろうか？そして全身の連動：新しい課題を前に俺は唸つたが、悩んでも仕方無いと涼君と共に黒木さんを『観察』し、修行の型を真似る事にした。

二時間近く観察した後、涼君と共に組手を行う。課題の正しい重撃と全身連動を達成するためには。

この日の組手は五回行つて、一勝三敗と涼君に初めて勝ち越されてしまった。どうも、俺は『速攻型の相手』は苦手みたい。

* * * * *

* * * *

沖縄生活、十五日目。

照り付ける快晴の陽射しの中、黒木さんが朝から巖を屠っている。彼曰く、怪腕流の部位鍛練は昼夜問わず行われ、肉が裂けたり、骨が折れる事は日常茶飯事だそう。其処で正しい重撃を放つためのヒントを貰うべく、隣で彼の正拳突きの型を、涼君と共に観て真似て、練習する。

「照。型は成つても、下半身が動いていない。

涼。足は出来ても、踏み込めていない」

何十発、何百発放つた所でそう言われた。言われた通り下半身に重きを置いて、また黒木さんの正拳突きを観察する。涼君も同じく、目を凝らして見ていた。

「先ずは観よ。強くなりたければな」

彼の言葉は、後々まで大きな教えとして俺達の心に深く刻まれた。一日一日を生きるために魚を釣り、合間を縫つて彼の修行を観て、欠かすこと無く組手で得たものを生かす。

そんな毎日が続いていた――

* * * * *

沖縄生活、二十四日目。

今日の組手は場所を変えて、真っ白な砂浜でやることに。黒木さんに教わった事を自己流に解釈した涼君の縦拳は今まで以上に速くなつた。力の流れが見えていても、相変わらず其れを上回る速度…過信してはいけないという事だろう。

柔らかく形を変える上に、不安定で熱い砂上の戦い。蝗跳で思うように跳べず、着地にも失敗。其処には飛んできた縦拳を、何発も受ける羽目になる。

嫌な感じだ：凱甲かいこうで防御を硬め、どうするべきかと考える。

「型は成つても、下半身が動いていない」

「正しい重撃と全身連動

其の言葉を思い出しながら、涼君の打撃を観察した。

彼の打撃は『腰と足首を捻り』つつ、『腰を座らせ』ながら撃つている。

「下半身が動いていない」

下半身…腰の動き…捻り…連動

全てが一直線に繋がつた時、身体は勝手に動いていた。涼君の右昇拳を腕の甲で横に弾く。

腰を据え、左足を後ろに下げ、重心と拳の位置を調節し直し。左足首から腰へ捻りを

加え、連接・連動した力の流れを背筋に伝達。

脱力によつて伝えられた力を透過させ、釘撃(くぎうち)の動作と同じく背→肩→腕へ通して、渾身の打撃を放つたのである。

ドン!!と荒馬に撥ね飛ばされたかのような音の後に、バシャアン!!の水音が響く。ハツと我に返つた時、涼君は撲られた勢いで吹き飛び、海に落ちて沈んでいた。

「う、う…うわああああああああああああ!?大丈夫かああ涼君ごめえええええええん!!」

烈火で走りだし、落海した涼君を直ぐに助けに向かい、案の定其の後、滅茶苦茶怒られる事になつたが仕方無し。

課題解決の糸口は掴めたが、まだまだモノに出来てはいない。俺達の修行はこれからも続く。最強へ至るために。

第十七話 穴熊（あなぐま）

「……つはあ！」

「涼君、結構出来るようになつてきたね」

「ハア…ハア…照に比べたら、…まだまだだ！せめて…今より一分、以上…潜つて、ハア…！…られ…ないと！」

「良い心意氣だ、じやあもう一回やるか」

「おうよ…！」

二人が二虎の知り合いの黒木くろき 玄齋げんさいの元に預けられてから、四十日の時間が過ぎた。照は現在、海中を利用し奥義体得前に二虎から教わった、肺活量と全身の筋肉強化を行う訓練を、氷室に対して教えている。

『沖縄は晴れてる事が多いし、海も近いから此の訓練を活かしやすい。何より地上で鍛えた縦拳も、水中で行つてもつと速度が上がれば、必然的に威力も上がる。
：俺も浮々うかうかしてはいられない。もつともつと強くなるぞ！』

水中組手の交錯の中で照は更なる飛躍を誓い、氷室との戦いを続けていく…。

* * * * *

* * * *

「ハア…ハア…ハア…！」

「お、お疲れ…さん…」

砂浜に打ち上げられた座頭鯨^{ザトウクジラ}のように、砂浜に伏せた氷室と大文字型に身を投げる照。あれから二人は、体力が底を尽きるまで水中組手を繰り返した。其れもざつと三十一戦ほど。

一戦あたりの平均潜水時間は三分程度。休憩を一分挟み、二時間近く戦っていた事になる。

「腹減った…」

「だなあ…一応釣りで作つた資金を削つて、何か食べに行くか？」

「うん…塩辛い物が食べたいな」

「塩たっぷりの巨大握り飯、刺身丼、あとは…塩らあめんという、奇つ怪な物…くらいだろうか」

「麺を奇つ怪つて…言つてるの照くらいだぞ…？あれ、ツルツルしてて旨いんだぞ？」

「箸で掴めないから、俺は苦…手…」

ある程度、疲労が抜けたため起き上がり、海とは真逆の車道を見た照が硬直し、言葉を無くしていた。

「…どうしたんだ？ 照」

「涼君。今さつき何だけどね…『大きくて』、『変な縁の二足歩行獸』が、道路を全速力で走っていたんだ…。」

何を言つてるか分からんとは思うけど、俺も自分自身の眼を疑つてる。頼むから、一発平手をしてくれないか？

夢か現か其れで分か

言葉を言い終わる前に「せい！」と右から強烈な平手打ちが飛んできて、頬を抉るようすに突き抜ける痛みが脳に響く。

「えつと、どうだつた照？」

「うん、痛いね。夢じや痛くないし、現なのが分かつた」

「…………」

『捕まえるか』。

彼等が其の判断に至るまで、十秒とて掛かりはしなかつた。

* * * * *

「此方で合つてる?!」

「間違いないよ！走つて行つたのは此処の方角で大丈夫！そして蝗跳は慣れない内はゆつくり、一回一回を意識しつつやつていこう」

蝗跳のやり方を涼君に教えながら、俺達は奇つ怪な動物の後を追い掛ける。ピヨンピヨンと歩道を跳ねながら、進み続けていると、遠くにあの生物の姿が見えてきた。

「いいいいいたああああああああ！」

「ナニあれ？え、ナニ！？あれ本当に生き物？」

興奮と驚きで騒いでいた矢先、此方の声を気付いたのか、緑色の生き物はスタコラサツサと逃げ出した。

それはそれは、とんでもない速度で。

「逃げた！しかも速いぞ！」

「ただ追い掛けるのもつまんねーし、烈火で競争しようぜ照！」

「お、それいただき！じやあ：ドン！」

同時に駆け出した。二虎流 火天ノ型・烈火：お馴染みになりつつある高速移動の技で、離された距離を着実に積めてゆく：筈だつたのだが、いつの間にか氷室に烈火で抜かされて、徐々に距離が開いていった事に照は気付く。

『涼君は速いな。火天ノ型は彼の得意分野になつちやつたか？』

ライバルの成長を嬉しく思える。其の反面、少なからず積もる寂しさも彼にはあつ

た。

『つーかまえーたあ！』

そんな折、氷室が緑色の生き物まで追い付き、飛び掛かつて押し倒す姿が見えた。感傷に浸るのもこれまでに、照も足の回転率を高めて漸く追い付く。

「照、照…こいつ、へんてこな感触してるぜ！」

氷室を振り落とそうと抵抗し、暴れる奇つ怪な生き物を相手に重心を崩さず中心を保持し続ける。その時：生き物の首根っこが、栓を抜いたように胴体から外れたのを見てしまった。

『ゑ!?』

そして其の中から、三十代程度の年齢であろう金髪の鬱男の顔が出てきたのを。

「うつへえ…着ぐるみ着けたまんま走ったのは間違いだつたかあこりや。ん？お前らど
した？」

『エエエエエエエエエエエエエエエエ!!!』

* * * * *

*

「…つまり、お前さん達は俺を新種生物と間違えたつう訳かい」

「はい、まさか役者さんだとは思いませんでした」

「いやいや、謝る必要はねえ。俺は『演技』の為に好きでやつてるだけさ。端から見りや不審者扱いされても、何も言えねえ」

謝罪の言葉を述べる照を静止させながら、器用に着ぐるみと呼ばれる着用物を外して身軽になつてゆく男。上は白地の薄手の服装一枚で、下はかなりブカブカした物を履いている。

しかし全身は、かなり鍛え抜かれている事が照には一発で分かつた。そしてあちこちに細かな傷痕や、拳に痣が有る事から、徒手格闘の経験者である事が伺える。

其れも『かなり強い』。黒木 玄斎には及ばないだろうが、十分な強さが此の男にはある。

「照、役者つて何なんだ？」

「涼君。役者つて言うのは劇なんかで演じる人達を言うんだ。鼓を叩く人、獅子舞を被る人、舞いを踊る人…。一言で役者と言つても、沢山役目があるから一概には言えないかな」

へえ…と言つた具合に納得した冰室。中々物知りじやねえかと誉められ、男に頭をぐしやぐしやに撫で回された照。

「しつかし…着ぐるみを着けた状態だつたとは言え、俺に追い付くとはな。やるじやねえか…んと、涼坊。そして、照坊」

「涼坊？俺の事？」

「おう、良いだろ？」

ニッと白く磨かれた歯で笑みを見せる男だが、氷室は不機嫌そうに頬を膨らませて、「涼坊じやないやい！氷室 涼だ！オツサン!!」と反論。

彼は驚きの表情を浮かべたが、直ぐニンマリと笑いガツハツハツハ！と高らかに上機嫌に笑う。

「そうか、そうか！坊呼ばわりは気に入らねえか！コイツはうつかりしたぜ！」

おおらかに、そして朗らかに、人生を謳歌するかのような笑い声。聞いてるだけで、何故か身体を奥底から力が湧いてくる。

と、彼は自分の腕に巻いた金属らしき物を見て言つた。

「おつと！そろそろ撮影の時間だ、すまねえな二人共！」

脱いでいた着ぐるみを脇に抱え、彼が立ち上がる。

「あ、オツサン！名前は!?名前、何て言うんだ!?」

別れ際に彼の名を問う照。男は振り返り、ニッと笑うとこう告げて炎天下の中を走り出した。

「俺は倉穴 熊五郎！他の奴等からは『穴熊』って呼ばれてんだ！」

じやあな！と走り去る其の大きな背中からは、凄まじい自信と、誇り高い気質が放た

れていた。

そして俺達は彼と、意外な形で再会する事になる…。

にこりゅう
二虎流・金剛ノ型

こんごうのかた
てつし

筋肉を硬化、硬直させ、形を維持。

はかいりゅう
霸塙流

がいこう
凱甲。

歯を食い縛り、体勢を固定。

絶対に指から瓶を離さず、絶対に落とさず、絶対に其の場から動かない。

目を閉じ、意識を外界から切り離し、聴覚視覚嗅覚を閉じる。

感じるのは、爪先と空気の震えを感じる触覚だけ。

呼吸：呼吸：呼吸……

其の時、照の身体は岩石の彫像の如く、時を止めた。
一寸の狂いも無く、完全に静止したのである。

「て、照……？」

「……喋り掛けるな、涼。照は今、完全に入っている。邪魔をせず、お前も鍛練に戻れ」
「あ、……はい……」

叱喝を受け、涼君も瓶を両手に持ち直し、形を作り直して鍛練を再会してゆく。

結局、俺が意識を現実に呼び戻し、再度覚醒したのは其れから半日が過ぎた後の事。
そして暫くの間、腕が凝り固まつたみたいに全く動かせなかつた。

* * * * *

* * * *

瓶を両手指先で持ち上げ、静止した修行から数日の時間が過ぎた、ある日の夜。

蒸せ返り、茹だるような暑さで目が覚めた俺は、廁で用を足そと屋敷を歩いていた。ガツ・ガツ・と、遠くで何かが打ち付ける音が、夜の世界に響いてくる。まさか…そういう思い、音の鳴る方へと向かうと、黒木さんがいた。

月明かりの中、無言で静かに巖を貫手で貫く姿を、美しいと思つてしまつたのは、今でも思い返せど理由はハツキリとしていない。

「照、どうした」

此方の気配に気付いた黒木さんが声を掛けてくる。

「暑くて目が覚めてしまつて…廁を探してたら、黒木さんが何をしてるのか気になつて、見ていたんです」

正直な事実を述べて、彼が向き合つていた巖を見たとき目を丸くした。岩肌に小さな孔が『四つ』や『五つ』開いていた。其れも一つや二つだけでなく、数十個は下らない。

まるで其れは蜂の巣のように、沢山開いていたのだ。

「あの、黒木さん。これは…？」

「…見ていろ」

重心を置き、左手を貫手の形に変えた彼は、呼吸を調え、目を閉じた。数秒の沈黙：しかし照から見た其れは、数十時間以上の重厚で重圧の沈黙。

次の瞬間。カツと稻妻が空を駆けるが如く、巖に叩き付けられた。

「……………ツツツツツツ……………！」

言葉が出なかつた。巖に五つの穴が刻まれ、『其の周辺』には『一切の輝割れが無い』。真に凝縮された破壊の衝撃は、周りに其の痕を遺す事は決してないと言わわれてはいるが、今まさに黒木さんがやつた事がこれだつた。

理論だけでなく、其れを実際にやつてのけてみせる。

卓越した技術に、揺らぐことの無い確かな実力。

俺は、黒木さんの持つ『武』の一面を今宵、垣間見た気がした。

「怪腕流かいわんりゅう」の部位鍛練は昼夜問わず、骨折だろうが、裂傷だろうが、休むこと無く毎日続けられる。

頑強な巖を撲り、吊した鋼鉄を蹴り、太き大木を擊ち、其れを続けた先に得られる物。

其れが、この『魔槍まそう』だ

息を飲むしか出来ない。改めて思い知らされる、この人との圧倒的なまでの『距離』、そしてかけ離れた『実力差』。今の自分では、まるで相手にもならない…ましてや、彼の本気を出させる事さえ『不可能』。

「……一朝一夜で実力差は埋まらん。だが一年後や二年後。どうなつてゐるかは、お前次第だ。鬼灯 照」

心中を見透かされたのか、其れとも辛氣臭い顔色だつたのか：彼にそう言われてしまつた。

だが事実、彼の言葉は其の通りでしかない。

『最強への道、一日にして成らず』：最強へと至ると決めた前世、掛軸にそう記した事を思い出す。

忘れていた事。忘れてはいけない事。

最強への道程。最強へと至る夢。

「……そうですね。…よしつ！もつと頑張つて、もつともつと強くなるぞ！」

高らかに拳を掲げ、決意を新たにした照。

同時にある事を思い出して、黒木にこう問い合わせた。

「あ、黒木さん。一つ質問して良いですか？」

「何だ」

「……『平良^{たいら} 嶺山^{げんざん}』という方を知りませんか？」

第十九話 厳山（げんざん）

「黒木さん。平良^{たいら} 厳山^{げんざん}という方を知りませんか？」

俺の発した其の名を聞いた黒木さんは、落ち着いていた。だが、表情に現さずとも空気が少し変わった事を、照は静かに感じ取る。何か関わってはならない事に触ったか：そんな心配をした。

「平良 厳山：奴は俺の古くからの同業者であり、そして友でもある。二虎から、事の顛末は聞いた。

「今度、奴と久方ぶりに会うことにしている」

「じゃあ…其の時、付いていつても良いですか？」

何を思つているのか全然分からぬのだが、これは好機：駄目元で同行の許可を貰おうと、頼んでみた。

黒木さんは数秒間を置いた後で「……勝手にしろ」とだけ呟いた。今思えば、顔に断ろうとも絶対に付いて行くと言つていたのだと、そう考えずにはいられない。何せ、顔は口ほどに物を言う：そんな諺が在るのだから。

* * * * *

そんなこんなで、約束を取り付けてから五日が過ぎた日の逢魔が時。夕方と夜の丁度中間とも言える時間帯、俺と涼君は黒木さんの後に付いて行き、一軒の建物の入口に立つた。

「いらっしゃい、黒木さん」

扉を開けた先の景色：まるで隠された宝物庫の内側を見たような、幻想的な空間に俺達は開いた口が塞がらなかつた。

薄暗く。だが：とても煌美やかな光と、凝縮され、熟成された年代物の地酒の様な、淡く漂う高級な香り。まるで祝福の政の時に流れ、場を演出し盛り上げる音色が、子守唄の如く、奏者達が部屋の中心で奏でている。

「久しいな、黒木」

椅子に腰掛け、黒木さんを呼ぶ声が一つ。所々に白髪が混じる黒髪に、着物を纏う軽装の男性。しかし、其の出で立ちは強者特有の気質を纏い、其処に在る。涼君も彼の強さを感じ取つたのか、ゴクリと唾を飲み込む。

この人が黒木さんの友人、平良たいら 嶽山げんざんで間違いない。

「む……其処の童達は」
 「氷室涼、鬼灯照。成り行きで、知人の弟子を預かることになつてな。実力に関しては、まだまだ未熟の域だが、自ら考え、日々成長を続けている」

黒木さんの隣の椅子に涼君が、俺は平良さんの隣の椅子に各自よじ登つて、二人の会話に耳を傾ける。

其の時の話を簡潔に纏めると、仕事の話をしていたようだつた。：何でか、複数人の名前や場所を確認していたようだけど何だつたのだろう？

まあ、そんな事はこの際置いておき：「平良さん」と俺は声を掛けた。無論、俺が彼の隣に座つた事も計算の内。其の狙いは唯一つ。

「照か……何か言つたか？」

「はい。……俺と『組手』をしていただけませんか？ 貴方の『強さ』を俺は知りたい。知つた上で、貴方に『弟子入り』して、其の強さを学びたいのです」

「お願いします！」と正面に向き直つて、頭を深く下げた。俺の言動に、平良さんは少し驚いた表情で、涼君は「マジかよ」と言つた具合に口を開け、黒木さんは表情に出さずとも、呆れているのが眼に見える。

「黒木よ、この少年：鬼灯 照とは、こうゆう人間なのか？」

「ああ。俺も初対面で組手を頼まれ、三分だけ相手をしてやつた。こいつは、俺との実力

差を承知し、怖じ氣付く事無く、最後まで戦つた。

：『悪くない』時間だつた』

そう言い、黒木さんは硝子の器に注がれた酒を静かに口に含み、喉へと送つた。

：あれ？これつて、黒木さんに『褒められた』のか？

「…『あの』黒木に、こうも言わせるか。：照と言つたな。明日の朝、黒木の屋敷から近い浜辺に来なさい。其処で力を見極める」

交渉は成立。約束を取り付け、弟子入りの為の段取りは付いた。後は自分の持てる力を、平良さんに対する示しきるだけだ。

* * * * *

* * * * *

翌日。未だ日も海から顔を出さない時間帯、俺は待ち合わせ場所の浜辺に立ち、平良さんの到着を待ちながら準備運動をしていた。
体を暖め、怪我を防止し、力を存分に奮う。

強くなるためにも、必ず彼に弟子入りして、其の強さを学び取り、自身の糧にする。

「來ていたか」

声が聞こえた。振り向くと平良さんが歩いてきており、俺は「はい」と答えつつ、深く頭を下げる。

「分かつてているとは思うが、組手をする以上、此方は手を抜くつもりはない。もし辛いと思つたのなら、直ぐに言う事。無茶をしてまで、戦う事は無いからな」

首と手首を回しながら、戦うに当たり、平良さんは俺にそう言つて警告した。ありがたいことだと、素直に領き賛同の意を示す。

「どちらかの降参、もしくは戦闘不能。組手と弟子入りの試験を同時に行う。照：覚悟はいいな？」

ビリリ！と全身を駆けた、絶大な殺氣。

分かつてている、この人は只者じやない。

だからこそ魂が滾り、身体中が熱く燃える。

自分自身の力を、この人に全てぶつけられるように。

最初から全力全開でいく。

「きなさい」

彼の言葉を受けて、俺は即座に仕掛けた。

繰り出したのは霸壠流はかりりゅう蛇縫へびぬい：砂浜や湿地帯では足を取られてしまい、十分な威力を

発揮出来ない蝗跳いなごととは違い、摺り足を利用した歩法。

蛇が獲物に狙いを定め、音もなく近付く様に、平良さんとの間合を一気に潰す。次に繋げる為、拳を手刀に変えた其の時、平良さんが左足で砂浜の砂を蹴り上げ、砂塵を此

方に飛ばしてきたのだ。

「くッ！」

反射的に目を守る為に腕を差し込む。其の直後、全身に悪寒が走り、俺は不壊と凱甲を同時に使用した瞬間、これまでとはまるで違う『未知の衝撃』が自分の左脇腹を襲う。空気が肺から漏れ、防御の為に硬化した体が『解かされる』。俺は砂浜を一尺程吹つ飛ばされ、背中から地面に落ちた。

「くそ、やら……な……なんだ、これ……!?」

即座に立ち上がった時、自分の左脇腹を見た俺は衝撃を受けた。其は、自分の皮膚が『捻れて』小さな渦を描いた事。そして其の中心は赤く腫れ、出血を起こしていた事。『何だこの傷は！…今の打撃か?!』

自慢では無いが、不壊と凱甲の硬化には自信がある。だが、平良さんは其の防御を難なく突破し、自分に手傷を負わせてきた。

『…………ああ。良いね、そうこなくちや』

世界にはまだまだ、沢山の強者が居る。黒木さんも、そして平良さんも、其の『格上の強者』の領域に居る。

『俺は負けるだろう。けれど、負けるなら最後までやりきつてやる！』

瞳は闘志を失わず、更に強く、真っ直ぐに彼を捉えている。構えも何時も以上に力が

満ち、それでいてとてつもなく落ち着いていた。

『黒木が言っていた意味が分かつた。負けると分かつていても、自身よりも格上の相手との戦いを望む、生糸の『挑戦心』。そして貪欲なまでに強さを求め、唯ひたすらに武を極めんとする『求道者』。

これが：鬼灯 照という男か』

平良 嶽山も微笑し、柔術家特有の両手を前に出した形の構えを取つた。
勝負は此処から、更なる熱を帯びる。

第二十話 羅刹（らせつ）

日本の中で、最南に位置する県・沖縄。なおと 波音が響く美白の浜辺は、赤い血が滴り落ち、二人の男の戦いの場となつていた。

『構えを変えた：柔術か何か、か。：絶対に見極めてみせる、最強に至る夢の為！』
目の前の着物着の男：たいら 平良。嚴山に起きた変化を前に、此の物語の主人公こと鬼灯ほおづき 照は冷静と平然を保ち。

しかし、其の魂を確かに熱く滾らせ、其の血潮を熱く燃やしていた。

『いくぞ！』

照が咆哮ほ える。

繰り出すは、最初に彼が仕掛けた歩法である、霸壠流はかいりゅう 蛇縫へびぬい。獲物を追尾する毒蛇の如く、砂浜と言う名の悪路だろうが突き進む。

が、再び嚴山が砂を蹴り飛ばし、此方に目眩ましを行つてきた。

「同じ手に二度は掛からない！」

刹那、彼の体は水中で外敵から逃げ延びるべく、急速に方向を変える魚のように、『直線から左方向へ』と移動先を変え、更には滑るように嚴山との間合に入つたのだ。

これは前世に置いて、彼の体得した武術である霸堺流とは異なる、『此の時代』で得た武術の『二虎流』。其の中の技の一つ、畝焰^{うねりほむら}：上半身の急激な重心移動を行い、進行方向を無理矢理変える歩法。

当然、足には大きな負荷が掛かるが、照は砂の摩擦による滑走を利用する事で、まるで氷の上で滑つたかのように移動したのである。

「中々」

「霸アツ!!」

繰り出す、渾身の釘撃^{くぎううち。}

しかし左に捌かれ、拳は空を切る。

『かに思われた』

「！」

ビタリ…と、空中で止まつていた。

黒木との修行を通じ、鍛えられた照の体幹と筋肉が、本来なら捌かれ、別方向に向かうしか無かつた拳を、其の場に押し留めたのだ。

「…中々」

「シイツ！」

腰を捻り、制止した釘撃の正拳突きから裏拳へ繋げ、更に下段回し蹴り、そして二虎流・水天ノ型 水燕と、次々に技を切り替え、巖山との距離を維持し、自分の攻撃時に発生する隙を生ませない。

『一手一手、自分の全力を注いだ打撃。馬力は上々と言つた所だろう』
中段後ろ回し蹴りを躊躇し、前蹴りで照を蹴り飛ばして巖山が距離を取る。腕を挿しひ込み、諸に食らう事を辛うじて防いだ照。

『強い……』

そんな時、彼は『瞬き』をした。人間の体内調整の一種である反射の其れは、誰も避けられぬ摂理。其の瞬間を巖山は見逃さなかつた。

瞳が閉じた僅かな一瞬。音もなく、気配もなく、巖山は照の真後ろへと、静かに。其れも散歩でもするかのように、意図も簡単に回り込んだ。

これが、平良 巖山の源流：『狐影流』。相手の死角へと瞬時に移動する歩術『瞬』である。

そして繋げるのは、照の引き締め、硬化した肉体を捻らせた打撃。肩から腕、腕から手へと運動エネルギーを伝導し、相手の体に衝撃と螺旋を纏つた掌底を撃ち込み、体内に伝達し、臓器を捻り、破壊する。

其のが狐影流の打撃。『人を喰らう悪鬼』から名を冠した『捻り込む打撃』こと『羅刹掌』^{らせつしやう}だ。

「!?また消え：殺氣!?」くつ…うう！」

空気の流れが変わった事に気付き、全身を再び引き締め、巖山の放つた打撃を受ける。

今回は左肩に当たり、再び後方へと飛ばされ、砂の上を滑走した。

「まだ、やるか？」

巖山が問い合わせる。本当に強い。向かい合ってみて、改めて思い知る彼との実力。

敵わるのは、最初から自分が解っている。

だが…：

『やめられないな…』

照は笑う。

覆せない逆境故か？…否。

圧倒的実力差に絶望したからか？…否。

『強い奴と：戦えるのは。何時だつて胸が高鳴るし、血が騒ぐ。生きている実感が、全身を巡る』

『強者と戦い』、『霸堺流こそが当世最強』である事を証明する。敗北を積み重ねながらも、高く遠い、見果てぬ頂を目指し、進み続ける事。

「勿論！」

瞳に焰を灯し、少年は再び立ち上がる。直後に巖山が自分との距離を潰し、間合いを狭めてきた。

『一瞬で背後を取る奇術は分からぬ。だつたら…！』

照は『眼を閉じる』。再び巖山が、狐影流 瞬きを使い、彼の背後を取つた。腕が捻られ、螺旋を纏つた打撃が照に迫る。

バチイ！

「む…」

羅刹掌が『弾かれた』。反動で体が後方へと押しやられる。直後、照の縦拳が飛来。首を傾け、避けると距離を置いて様子を見る。

『今のは…』

確かに羅刹掌は当たつていた。其れなのに自分の腕が痺れている。

霸壠流 反乗^{はんじょう}。相手の攻撃が直撃する瞬間に、其の部位一点の筋肉を膨張・硬化させ、直撃時の衝撃を相手に倍にして弾き返す、一種の返し手^{カウンター}。

此の技は相手の攻撃を見切つた上で、タイミングを上手く合わせなければならず、更には其の部位以外の筋肉が弛緩してしまう為、読みを外せば大ダメージは避けられないハイリスク・ハイリターンを抱えた技だ。

『視覚で追おうとするから、消える歩法で隙を作られてダメージを負う。だつたら『見なければ』良い。

全身の感覚を研ぎ澄まして、空気や風音の寸分の変化を感じ、逃さない。そして：相手の攻撃を一点に誘い込んで、反乗で跳ね返して攻撃する：これだ！』

敵の動きを『見ないこと』で、自身の技の新しい使い方を導き出した照。目を閉じたまま、呼吸を調べ、一気に砂浜を駆け抜ける。

『これで決めにいく！全身全霊の一撃で！！弟子にしてもらうんだ!!!』

5m：4m：3m：順調に走っていた照だが、厳山との距離が2mへ入るか否かという辺りで、底知れぬ悪寒に襲われた。

先程迄、厳山が居た位置に彼が居ない。

砂浜の音、波の変化、空気の振動。

それらを感じても、厳山が居ないのだ。

『どうゆうことだ…？何処に…？』

トン…

「え……」

目を開けた時、自分の鳩尾に大きな男の掌が触れていた。右肩を通り、カタカナのフを逆に書いた形で、厳山の掌が其処に置かれている。

「続けるか」

後ろから厳山の声が響く。既に腕は捻られ、何時でも螺旋の撃を放てる状態にある。防御出来る隙も無い、殺意を込めた其れを食らえば、再起不能は免れないだろう。照は静かに。そして満足気に一言、「……参りました」と返したのだつた。

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * *

*

「負けたあ…。やつぱり強いなあ…」

日の昇る水平線を見、砂浜にへ口へ口と座り込む。

「鬼灯 照」

厳山に呼ばれ即座に振り向き、正座に構え直す。

「お前の弟子入りの試験。：『合格』だ。既に戦い方の基本は、ある程度出来ている。

明日から玄斎の修行と平行して、お前に色々教えていく。今日はよく休みなさい」

力及ばず敗北したが、それでも当初の目的である弟子入りは果たせた。

ありがとうございます！と深々と頭を下げ、照は厳山に礼を述べる。

沖縄で出会つた、黒木 玄斎と平良 厳山。此の二人の師を新たに得て、霸場流は更

なる進化を遂げて行く。

第二十一話 回転（かいてん）

「今日より修行を始める。玄齋との稽古も平行して行うが、覚悟は良いな？…照」

「はい！よろしく、お願ひ致します！」

平良 嶽山との組手兼試験を終え、正式な弟子入りを決めた鬼灯 照は今、三つの水が入った龜の前に立っている。

「まず始めに、言つておく事がある。我が流派・狐影流には『二つ』しか技がない」

「二つだけ？それって…『一瞬で視界から消えた移動』と『回転しながら衝撃が捻り込む掌底』…ですか？」

「うむ。正式名称は『こえいりゆう 狐影流・瞬』と『こえいりゆう 狐影流・羅刹掌』という。

瞬は、相手の瞬き…つまり瞼を一瞬閉じた瞬間に、相手の視界の死角と呼ばれる領域へと移動する歩法だ。

音もなく、気配を殺し、一瞬で、迷い無く、其の場所へと移動する。恰も、其の場から消えたようにな。

羅刹掌は背から肩へ。肩から腕へと。力を伝導させて、腕の回転で伝導した力を増幅し、相手の身体へ回転した打撃を繰り出す。

<

瞬は組手を通じて教えてゆくが、羅刹掌はそうはいかん。まずはこれから始めてゆ
腕を捻り…そして放つ。

「……『回つてる』ツ！」

龜の中身を満たす水が、彼の羅刹掌の撃を受けて、渦を巻いて回つてゐるのだ。
「羅刹掌が完成へ至るには四つの段階がある。

先ずは水から始まり、次に砂、さらに砂利、最後に動物の肉へと段階を重ねる。ま
ずは水に衝撃を捻り込む感覚を身に付ける事だ。

出来るまで、何回も果てしなく続けてゆく。例え其れが、修行で掌が痛みの感覚を失
おうとも」

努力無くして、体得成らず。

こうして俺は、羅刹掌体得の為に水の入った龜へ向き直り、修行を開始した。

* * * * *

『……わからん』

羅刹掌の修行を始めて、黒木 玄斎の修行も行いながら過ごす日々も、早いもので一ヶ月が過ぎた。

しかし現在、照はある問題に直面していたのである。

其が『捩じ込む感覺が分からぬ』事。

釘撃と力の伝導の工程が『同じ』であるにも関わらず、釘撃とは根本から『違う』衝撃の浸透方法に、四苦八苦を余儀無くさせていた。

水を突く度に波紋は生まれども、渦を巻く事はない。

それでも何度も、何回でも、衝撃を水へと流し込む。

《何か『切欠』^{きつかけ}が有れば良いんだがなあ……》

二虎流・操流ノ型を利用してみたりと、彼の思考錯誤の時間は続く。

そんな悪戦苦闘を続けている、照の様子を見ていた巖山は、近くに歩み寄り、こう言つた。

「照。羅刹掌の『回転』は腕で行う……そう言つた。ならば、其の回転は『何を以て』成すのか。
其れを考えてみろ」――と。

* * * * *

* * * *

『回転は何を以て成す』……なあ……』

「——る。——おい、——照！——どうしたよ！さつきからぼおつとし

て！」

羅刹掌の修行中、巖山に回転の事を言わされてから二週間が過ぎた、ある日の昼過ぎ頃。海岸で呆けたように空を見上げながら、言われた言葉の意味を思考し、没頭し続けていたところ、どうやら話を聞き逃してしまっていたようだ。

横に視線を向けると、彼の親友にして好敵手の氷室 涼が頬を膨らませ、怒った表情で立っている。

「ふえつ？あ…涼。で、何だつけ？」

「はあ！何も聞いてねえのかよ！縦拳がまた速くなつたって言つて、組手しようぜって言つたんだよ！」

「あ、ああ…それか。うん……」

「…何かあつたのか？」

「実は…」

照は、巖山との羅刹掌の修行で言われた事を、涼に対しても説明する。

かしくなり始めた。

《やばい…目が回ってきた…倒れ——ん?》

照は『何か』に気付く。回転する中で、唯一動いて居ない場所：『軸足』の接地面が、砂浜に少しづつ『埋まつて』いつている事に。

《そうかツツツツツツツツ——!! そうゆう事だつたんだ!! 厳山さんが言つていた言葉の意味はツ…!!》

ビタツ!と急停止したが、それまでに蓄積した回転による反動で、照は砂浜に横向きで、釣り上げられ全長を測られる太刀魚のように、真っ直ぐに伸びて倒れる。

「おっしゃ、勝つた!! 照に勝つた、ぞおく……」

涼は照に勝ち、歓喜の叫びを挙げたものの、此方も同じく反動が襲い掛かり、背中から大の字に倒れてしまう。

《……『軸』だった。回転しても、絶対にぶれない場所…。}

『腕骨』を『軸』にして、『筋肉』を『捻る』事。これが…羅刹掌の『力の伝導方法』だつたんだ…』

答えて、辿り着いた瞬間だった。

《…力の『矢印』を『真っ直ぐ』に撃ち込む『釘撃』。…其の技術を元にするなら、肘より先から矢印を『大きく』、腕に『巻き付くように』コントロールしてみよう…。

そうすれば……きっと——

』

照は目を閉じる。羅刹掌の体得への切欠は手に入れた。
果たして、彼は新たな技術を元に、狐影流の羅刹掌を。

そして、霸堺流の新しい進化

を見出だせるか。

第二十二話 回答（かいとう）

沖縄に来てから五ヶ月と三週間程の時間が流れた。

「霸アツ！」

黒木さんの鍛練と平行して始めた、厳山さんの武術、狐影流・羅刹掌の修行は、新たな段階に至ろうとしている。

「霸アツ！」

水で充たされた瓶の水面に、捻りを加えた掌が入る。

放たれた衝撃が渦を巻き、遂に瓶の中で螺旋が描かれたのだ。

「で……出来た……やつた！やつと出来た！厳山さん！出来ましたよ！第一段階の水に螺旋を描きました！」

「……ふむ。確かに水を回す螺旋が出来ている。だが、本来の威力とは程遠い。精進を怠るなよ、照」

「はい！ありがとうございます！」

『修行を始めて二ヶ月：本来羅刹掌の習得には、一段階毎に最低でも『一年』、最短でも『八年』の月日を費やす。その上、『実戦で手札として使うとするなら』、確実性を求めて

『十年』は必要だ。

黒木から聞いた『衝撃が時間差を以て襲い掛かる打撃』…察するに照は、『力の細かな調整』に関して、何らかの形が既に出来上がっていたのかも知れんな。

そうだとすれば、驚異的な速度で第一段階を突破した事にも合点が付く。まつたく、未恐ろしい童だ』

嬉しさで拳を天に、高く力強く突き上げる少年の背中を見つめながら、巖山は心中でそう呟いた。

* * * * *

「照。久しぶりに組手しないか？」

黒木邸の庭で稽古の最中、氷室涼が組手に照を誘う。普段なら照の方から涼を誘う事が殆どだが、こうして誘われるのには何かしらの理由が在るのだろう。

「珍しいな。俺は良いけど：何かあつた？」

「ふつふつふく…、其れは組手で戦うまで教えねえよ！」

「ふうーん…楽しみにしてるよ。じゃあ、組手は昼餉の後、場所は何時もの浜辺でやるか

？」

「応よッ！」と張り切る涼を見ながら、照もまた組手で繰り出す技を選別してゆく。

そして昼飯を食べ終えて、食休みを終えた後。

黒木邸から一番近い、二人の修行場に成りつつある浜辺で、両雄は準備運動を取る。

「形式は何時も通りで良い？」

「ああ、相手が『戦闘不能になる』か『降参を言わせる』……だよな？」

「うん。じゃあ……始めようか。――構えて」

照の言葉を聞き、涼は両拳を握り、両腕を肩程の辺りまで上げつつ、右足を前に小刻みにステップを踏む。

一方の照は、自身の左手左足を前に出し、どつしりとした構えで、迎え撃つ型を取つた。

涼が響く中、二人の集中力は高められてゆく。

波の音が。

潮の香りが。

砂浜の熱さや感触が。

感じなくなるほどの中集中状態に入り。

回りの色彩さえもが真っ白になつた時。

二人は静寂を破つて激突した。

* * * * *

* * * * *

* * *

* * *

足先が砂を蹴り、裂く。

そうして砂浜に出来たのは、雨粒が水面に落ちては波紋を広げるかのような、着地後。奇しくも二人が初手に繰り出した技は、照が前世で創設・形成し、転生し現代の他武術の特性と技術を吸収・発展させ、進化を続ける霸堺流（ばかりいりゅう）の運足歩法の一つである蝗跳（いなこび）。脱兎の如く跳ね回り、互いが互いの出だしを警戒する。

——が、其れもまた一瞬。

『霸アツ！』

先に動いたのは、照。

砂浜を縫うように。素早く、刹那の内に涼との間合いを潰す。

「来たッ！」

「せいつ！」

照の三手目は、涼の左足を狙つて放つ踝への右爪先蹴り。着地の瞬間に直撃するように、狙いを絞つてきた。

「しゃあ！」

空中で胴体を捻り、左足で後ろ回し蹴り。

照も気配を感じて、上体を重力に任せて倒れつつ、蹴り一閃を躱わし。

同時に出ていた右足を引っ込め、地面を転がりながら距離を取る。

涼は其れを見逃がさない。着地と同時に二虎流にこりゆう 火天かてんノ型のかた・烈火れっかで間合いを取らせない。

『照は強い！だけど、俺の縦拳たてけんを捉えられた事は、今までの組手で『殆ど無い』！至近距離なら俺の連撃速度が上だ！』

涼は知っている。照が『力の流れ』という『矢印』が見えている事を。幾度と無く、厭きるほどに繰り返した戦いの中で、彼が其の境地に達している事を否応なしに重い知らされた。

だが同時に、照が見ている矢印は、『万能』と言う訳では無く。動体視力等や彼自身の感覚といった、様々な要因で『あまりにも速いモノ』に対する反応速度が『追い付いていない』事も知っている。

故に近距離ショートレンジ下での縦拳は、絶対的に優位。

『貰った!!』

繰り出すのは、自身の十八番たる縦拳。右拳が唸り、風を切り裂き、照の顔面へ向けて放つ。其の瞬間は、まるで雷が落ちて、白光の輝きと衝撃に包まれるかのようで。涼の一撃は、照に直撃する

「俺も、何時までも受けっぱなしじゃあ：ないんだぜ。涼」

——はづだつた。

繰り出そうとした縦拳。其れは突き出す前に、照の左手によつて『手首』をガツチリと押さえられ、『止められていた』のである。

「確かに今まで縦拳を繰り出されたら『耐えるしかなかつた』。——だが、今は違う。『耐えようとするから』叩かれる。だつたら：『打たせる前に止めれば』良いんだ」

どんなに速くとも、繰り出せなければ、意味は無く。
どんなに強力な打撃だろうとも、出す前に止めてしまえば、脅威には成り得ない。
其れが鬼灯 照の。

水室 涼の縦拳に対する『回答』^{かいとう}だった。

「……やるじやねえか、照！」

「どうも！……んじや、喰らえ！」

涼からは見えない照の背筋が隆起し、其の力の流動が、肩から右腕へと連動。

狃うは涼の右肩、繰り出される照の十八番、^{はかりいゆう}覇堺流^{（くぎうち）}

釘撃。

直撃すれば、筋肉や骨の中芯へと衝撃が浸透し、時間差を以て其の衝撃が爆ぜるとい

う、荒唐無稽の必殺技。滅茶苦茶なわざ通常の打撃と遜色無いが故に、初見で釘撃か否かを見切る事は、ほぼ『不可能』である。

そして、其の動作の最中に彼は、腕を流れる血流の速度を加速させ、速度を大きく上げた。

放された技の名は、『釘撃・迅くきうちん』。其の速さと衝撃の浸透力は、通常の釘撃よりも『速く』、進行途中でも瞬発的に『加速可能』。

ドゴッ！と音が響き、照の速く重い拳が涼の肩筋にめり込む。これで遅かれ早かれ、涼の肩は衝撃と言う名の爆弾が爆ぜる。そうなれば攻撃力は激減し、一気に有利となる

「つはあ！！……あぶねえ、何とか間に合った！」

はずだつた。

照の打撃：釘撃・迅は確かに。涼に直撃し、衝撃は肩へと浸透した。しかし、彼の肩には直撃で出来た『小さな痕』しか在らず。代わりに左足が接地している砂浜には『クレーターの跡』が生まれていた。

「照の釘撃は正直、今の俺でも食らつたら一堪りもない。でも、其の衝撃が来るのには『時間差』が在る。

だつたら其の時間を利用して、操流ノ型^{そうりゅうのかた}で『衝撃を流して、体外へ逃がせば』良い！

其の衝撃が如何に強かろうとも、何れ程重かろうとも、そしてどんなに速かろうとも。衝撃が炸裂する前に、体外へと一片残らず流しきり、逃がしきる。

涼が導き出した『回答』は、端的に見れば荒業で。しかしこの上無く、とても単純明快な回答だった。

「そうか：辿り着いたんだな。釘撃の『攻略法』に」

「俺だつて、照に負けっぱなしなんてゴメンだからな。俺なりに努力してききたんだ」即座に照の右手首を左手で鷲掴み、組み合う両雄。どちらも二虎流^{にこりゅう} 金剛ノ型^{こんごうのかた}・鉄指^{てつし}で互いの間接を握り締め、圧迫し合う、我慢比べに入つた。

「…フフフ！」

「…ハハハ！」

が、突如として笑い始める。

この瞬間、互いに理解したのだ。

『此処から』。

お互いの『最得手』を攻略した此の瞬間からが。

本当の意味で『対等』であり。

そして同時に『始まり』なのだと。

「良いな！こうゆうの!!」

「ああ、だからこそ!!」

『負けられねえ!!!』

『負けたくねえ!!!!』

照が操流ノ型・柳そりゅうのかたやなぎで、涼の足元を崩しつつ、握りが弛んだ一瞬の隙を突いて、拘束を

逃れた。

だが涼も、素早く崩された体勢を立て直し、直ぐに攻撃へと転じる。

拳を弛く握りつつ、不規則にシャドージャブをしながら、照に猛スピードで突っ込ん

できた。

『拳の握り方が弛い：水燕すいえんが来るか』
 拳を弛く、軽く握り、脱力した状態で放たれる其の連打は、不規則な軌道を描きながら、敵に襲い掛かる。

涼の連打は速く、何より水燕の連撃は照から見ても、厄介極まりない。

が、しかし

「いくぜ！」

大振りに振るわれた右腕。其の先の手が正面に集中し、疎かになつていた左脇腹に直撃する。

「ツツツツツツツ〜〜〜〜〜〜?!?!

直撃の瞬間、突如として右手が『硬化』したのだ。
 二虎流 金剛ノ型の基本、『不壊ふえい』の原理に等しい一撃に、照は思わず膝を付く。
 「どうだ、スゲエだろ照！」

「…まさか、そう来るとは思わなかつたぞ。：：凄いな、涼」

金剛ノ型と操流ノ型。

『本来ならば』複合及び併用が『不可能』な筈の二つの型。
其れを、氷室 涼は『可能』にしていたのである。

第二十三話 鋼打（はがねうち）

二虎流の金剛ノ型と操流ノ型は『併用する事は出来ない』——そう、ニコさんと照から、俺はそう教わった。

力の流れを操る為に、纖細な動作を必要とする体系の『操流』。

攻防一体を成し、硬化し、一撃を叩き込み、破壊する体系の『金剛』。
他の型は併用して使えるのに、どうしてこの二つだけは複合で使えないのか……と。
必死に考えた。寝てる時も。食事の時も。

考えて、考えて、考えて、考えて。

何度も、何度も、頭の中で考えて。

そして、ある時。俺は気が付いた。

そうか——。

『打ち込む瞬間に、硬化すれば良いんだ』……と。

* * * * *

「…全く。俺の予測を超えてくるなんて、本当に凄いな。——涼」

左脇腹を擦りつつ、照は素早く体勢を立て直し、改めて構えを取る。

「…二虎流 金剛・操流ノ型。名前は鋼打。はがねうち 名前は組手の前に思い付いた。水燕すいえん を軸に、不壊の原理を合わせて作つたら、此の技が出来たんだ」

軽く、小刻みにステップを踏みつつ、自慢気にそう言つた涼。

照は思う……此の鋼打という技は、氷室 涼が自らの手で編み出した、『氷室か 涼だけ』の二虎流の体系』なのだと。

「いくぞ、照！」

「…いっ！」

涼が二虎流・火天かてん の型 烈火れつ で突つ込んでくる。

先程受けた鋼打、驚異に成るのは『腕の軌道』……操流の流転の如き、動き回る腕の挙動は、かなりの驚異となる。言うなれば『無形』の技——『武』の理の外に在るが故に、判断を誤れば敗北は必至。

「シャア！」

涼の両腕が大きく、不規則な軌道を幾度と無く描いてくる。狙いは先程、不意打ちに等しい一撃を貰つた左脇腹を中心に、左肩・右胸肉・段中・鳩尾……その他。

複数箇所を狙つた波状攻撃。

照もまた、其の連撃に対して、構えを変える。

取つたのは、肘と膝を内側に置き、足で八の字を、腕で逆八の字を作り、延長線上の鳩尾部分で×の字になるようにし、肉体を筋肉を締める。

直後バチバチバチチチチチイイイ！と、鞭の先端がぶつかつたかのような高音が、複数に渡り響いた。

「……『堅い』——」

不壊で固めた両掌は確かに当たつた。手応えも有る。しかし、結果はどうだ？ 攻撃は弾かれ、逆に反動で痺れている。

「あの構え：黒木のオツサンがやつてるヤツか！」

「正解。名前は『三戦』：黒木さんが、そう言つていた」

三戦——其れは空手に伝わる、伝統的な受けの型であると同時に、防御に置いて重要な型である。

其の構えは下半身を固め、しつかりと構える事により、単純なれども、極めた者が使えば、あらゆる打撃に耐えられるという、究極の防御とも呼ばれる。

照はこれに、自身の流派である霸堺流凱甲と二虎流・金剛ノ型 不壊を更に重ね掛ける事で、鍛治職人が洗練し、丹精込めて鍛え上げた、剛鋼に等しい防御力を得たのだ。

構えを解き、照は反撃へ転じる。

「させるか！」

涼の十八番、縦拳が飛来。

首を傾け、紙一重で躱わして、間合に入る。
だが――――――――――――――――――――

「ツ!?」

悪寒を感じ、右に体勢をずらした直後、照の頭左部分、眉毛の辺りの皮膚が斜めに切れ、出血。

涼の左腕で繰り出した鋼打が、彼の皮膚を切ったのだ。

そして、涼の左手の親指を除いた、指の第二関節全てに血が付いている事から、縦拳の握り方を応用して皮膚を裂いたのだと予測出来る。

《参ったな、こりや……》

接近すれば縦拳が、距離を取れば鋼打が、とんでもない速さで飛んでくる。
速く、鋭く、連続で襲い掛かる斬と打と突。

照は思う。自分は今、鎖鎌の使い手と棍棒の使い手を同時に相手取つて居る感覚を。
辛うじて致命傷は避けているが、何れは其れを貰いかねないだろう。

《……たまんねえな》

衣服を、皮膚を裂かれ、出血する度に。

叩かれ、癌が出来、傷付く度に。

身体の内側で疼く感覚が、火山で渦巻く溶岩の如く、沸々と湧き出し、五臓六腑を満たして行く。

『……嗚呼、本当に——良い』

変人だと思われるだろう。気持ち悪いと思われるだろう。だが、それでも良い。漸く分かつたのだ。

自分はこうして、強い奴との戦い。逆境に追い込まれ。其処から這い上がり、全てを乗り越えて逆転するのが。どうしようもなく、自分でもどうする事さえ出来ない程、好きなのだと。気付いたのだから——。

「ハアッ!!!」

涼の鋼打の一撃が、照の顔面に迫りくる。直後まで数秒も掛からない。貰つた!と、そう涼本人は確信していた。

!!!!『?????
そう：此の瞬間迄は。

ドンツツツツツツツツツツ！

『右手首』及び『右肘』が、普通ならば『在らぬ方向』に、ボツキリと、完全に曲がつて
いる。

「う」：ああ”：ツツ”ツ”ツ”……！」

関節の感覺がない。肘先以降に力が入らない。

初めて味わう、釘撃とは別物の筆舌し難い痛みに、涼は悶え苦しみ、悲鳴を上げない

嗚咽に近い苦痛を漏らした。

「一虎流・操流ノ型 緒。加えて、狐影流 羅刹掌の捻りの原理を用いて形成した、新し
い技だ。

そうだな—— 潟喰：とでも名付けようかな」

顔に付いた血を手で拭い取り、自身の髪を搔き上げる。

其の目は鋭く、強く在りながらも、落ち着きを保ち、膝を付いた涼に向けられる。

「こんなもんじやないだろう？俺はまだ戦えるぜ、涼」

左手左構えの体勢に構え直し。

鬼灯 照は、不敵に笑い、そう言つた。

第二十四話 剛烈（ごうれつ）

右手根骨内^{みぎしゆこんこんこつない}：船状骨・月状骨・豆状骨・三角骨。及び上腕骨滑車^{じょうわんこつかっしゃ}の以上、計五ヶ所の複合骨折^{ふくごういっせつ}。

並びに右手首関節^{みぎてくびかんせつ}・右肘関節^{みぎひじかんせつ}の二ヶ所複合脱臼^{ふくごうだつきゅう}。

氷室 涼、右腕を使用不能となる。

鋼打^{はがねうち}の技の性質：涼の説明から『掌より上以降の筋肉は、操流の纖細な動作の為に脱力せざるを得ない』と考察を立てた照は、『敢えて』彼の攻撃を受けにいき、自分の予測が正しいかどうかを確かめていた。

結果として自分の立てた予測は大方当たり、裂傷多數・打撲傷多數・出血箇所多數の大ダメージを引き換えに、涼の右手首に二虎流^{にこりゆう}・操流ノ型^{そうりゆうのかた}絡十狐影流^{がらみこゑいりゆう}羅刹掌^{らせつしょう}の回転エネルギーで発生した捻りを組み合わせ、霸壠流^{ばくりゆう}の十八番とする衝撃伝導で右腕に其の威力を徹^{とお}し、骨折と脱臼を同時に起こしたのである。

「ぐつ…ああ…ツツツ”ツ”ツ…！」

苦虫を噛み潰したような顔で、涼は照を見上げている。

『お前は何時もそうだった……』

ライバル

組手を重ね続け、敗北する度に見た鬼灯 照の顔。頭は冷静沈着に、しかし心は熱く滾る、一見矛盾した其れば、涼にとつて『憧れ』であり、同時に『嫉妬』でもあつた。

『だから負けたくねえ……！』

どんなに苦しく、辛い状況に追い込まれても、絶体絶命の窮地に立たされようとも、決して失わず、揺らぐ事の無い、冷静な判断力に。

強さの深みに至る為に、どんな努力も惜しむこと無く出来る、不動の精神に。強者との一期一会の闘争を、真に楽しめる心の有り様に。

同じ歳にも関わらず、既に其の技量は一流の域に足を踏み入れている事実に。

『負けられねえんだよっ！！』

舌を噛みながら、意識を筋肉に集中。力業で無理矢理、関節を嵌め直しつつ、不壊の筋肉硬化で折れた手首関節と肘関節を固め、右脇腹をガードする。

動かせずとも、三日月蹴りを止める事くらいなら可能だ。

：最も、照の源流パックボーンである霸塙流には、衝撃伝導がある。焼け石に水で有るかもしけないが、無いよりはマシであろう。

『右腕は使っても、マシな打撃を放てない……：だったら、どうやつて『勝つか』を考えろ

……』

歯を食い縛り、思考を回転させる。

鋼打は既に見切られた、それでも戦う為の手札は在る。

思考の末——涼が動く。

「…………！」

『歩いてきた』。其れも『散歩』でもするかのように。

必然、照の警戒は強まる——『速攻』と『早期決着』を当たり前のように仕掛けてくる涼が、戦い方を変える事は殆ど『無い』。

『必要無い為』だ。大抵の場合、相手の体勢や攻めが始まる前に叩き、出だしや攻めを封じ、そして倒す。其のが氷室 涼という男の戦い方。

それがどうして、ゆつたりと落ち着いているのか。

『決して悟られるな……俺には一度しか好機チャンスが残されてない』

暗殺者の如く、涼は静かに。照との距離を詰めて行く。

照が現状で防げなかつた技は二つ。一つは自分の十八番である縦拳、そしてもう一つは自身の切札である流星りゅうせい。

だが縦拳が攻略された今、涼に残されたのは、『最速』にして、『最強』の縦拳である流星のみ。

流星：涼が持つ此の技の射程距離はおよそ1～2m程度。そして通常の縦拳が時速15km/hであるのに対し、流星の最高時速は其の3倍強：時速50km/hに到達する。

武士が使う、居合の要領で放たれる一撃は、風を。音を。光さえ置き去りにする速度で、対象を打ち抜き、相手は打たれた事にすら気付けず、倒される。

事実：涼が『初めて』照に組手で勝った際に、決まり手となつたのも流星だつた。

『右腕は嵌め直しだろうが、本来の威力は出せないはず。なら涼は、確実性を求めて『左腕』で打つてくる。集中だ…』

一步・一步・また一步。其の距離はどうどう、5mまで縮まつた。

次の瞬間

涼の体勢が崩れ、地面に上体が吸い込まれて行く。
だが、其れも一瞬：涼の身体が一気に加速した。

『此所で縮地かッ…！』

二虎流 火天ノ型 極・縮地。

照と涼が出会い、最初の組手となつた戦いで照が繰り出した、仙術から名を頂いた『重力を利用する重心移動』。通常とは間合いが完全に異なる、特殊な移動であり、二虎流の

移動等に関係する火天ノ型の『奥義』。

十鬼蛇二虎との組手を通じて、火天ノ型に適性が有ると彼から見込まれ、修行の合間を縫つて、密かに練習し続けてきたのだ。

間合いの外からの縮地で、照の反応は完全に遅れた。

涼は流星を放つべく、左手で拳を作り、前に出す。

狃うは頸椎こと下顎：脳と直結する、人体の共通して持つ弱点の一つ。どんなに頑丈な相手でも、臓器までは鍛える事は『絶対に不可能』。其れ故に当たり処によつては、文字通り『戦闘不能』に追い込める。

《…と、思つてゐるんだろう？》

照は涼の狙いに、数瞬早く気付いていた。故に左で放つた流星を受けて、止まつた所を掴まえ、先程と同じ渦喰うずばみで肘と手首の両関節を同時に破壊する。

其れで——決着が付く。

『涼、お前は本当に強くなつた。強く、そして俺の想像を超えて、進化し続け、此処まで來た。

お前と戦える時間が、俺は……何よりも好きだ』

目を見開き、流星の衝撃に備える。首筋を不壊で硬化・固定し、足を強く踏み締め、一撃を受け止める体勢を取つた。

迫る、最速にして最強の縦拳：流星。

煌めく一閃が、照の顎へと狙いを済まして、白光と共に直撃する——

「…はッ?!」
ピタリ……
其の筈だつた。

涼は縦拳を、照の顎の寸での所で急停止させた。

驚愕を隠せない照：其れもそうだ。今日だけで、今まで戦ってきた『氷室 涼』と言
う少年の、様々な面を尽く覆され、全く予想だにしなかつた考え方や行動を、次々に見せ
られ、実行されたのだから。

そうして思考が一瞬：時間にして0・36秒、照の動きが完全に止まつた。そう――『此の一瞬』を、涼は待つて：否。『待ちわびていた』のである。

繰り出すのは、嵌め直した右腕。先程と同じ流星：然れど、其れは只の流星に非ず――『右手中指が突き出た状態の流星』。

涼の右手の握り方は、空手の中高一本拳(なかたか一本けん)の其れに酷似していた。違うのは其れが『正拳突き』では無く、彼の十八番である『縦拳』だろう。

照の思考が再び動き出す前の――回避も防御も取れぬ、まさに無防備になつた照の眉間に、速と重：二つの特性を折り合わせ、融合した渾身の縦拳が直撃。

同時にベキヤリ：!!と。そんな卵の殻が割れたような、鈍く痛々しい音が響き、額から血がプシュッ！と噴出し、彼の鼻を、唇を赤い線を描き伝つて、白い砂浜に赤の斑点を落とす。

完全に決まつた。手応えもある。

照の反つた身体がゆっくりと、背中から地面に傾いて行く。

『この組手：俺の勝ちだッ！照！！』

「いや……まだだよ、涼ツッ!!」

グルン！と、倒れかけた筈の照の身体が一気に戻る。
何故だ？

確かに縦拳は直撃した。手応えも在った。

なのに何故、照は『倒れなかつた』？

「効いたさ……思いつきり。……だけど、其の威力を『逃がして』……衝撃を、最小限に押さえ
たのさ……」

照の足元を見たとき、涼は彼の言つた言葉の意味を理解する。

兩足に出来た、一際大きな窟み……其の正体は当たつた直後に照が使つた、二虎流操流・水天ノ型導水で出来た物。彼の縦拳による、絶大な威力と無類の衝撃を、頭→首→胴体→足の順に経由し、体外へと流していたのである。

無論、照自身も只では済まなかつた。涼のフェイントに加え、中高一本拳で受けた衝

撃は『完全』には流す事が出来ず、縦拳を受けた衝撃で脳が揺れ、平行感覚に深刻なダメージを負っていた。

だが——照の目には見えていた。自分が勝利へ向かう為の道筋が。

歯を食い縛り、照が吠えた。

涼も直ぐに防御体勢を取ろうとしたが、照が片足を差し込んで、其の体勢を直ぐ様崩す。腕を重ねるも、彼の右手刀が叩き、下に押し込まれる。

其の刹那——照の両拳が六回、涼の身体を一瞬の最中に撃ち抜いた。照が放ったのは、この沖縄に来て黒木玄齋くろき げんさいと出会い、最初の組手で敗れた際の決まり手となつた、正拳六連撃。

敗北を糧とし、其の技の威力、強さを直に受けたからこそ、身に付ける事が出来たのである。

「ガツ……！」

鼻と口から血を吐き出し、膝から地面に崩れ落ちる涼。薄れて、消え行く意識の中で、彼が其の日の最後に見たのは、今にも自分と同じく意識を手放してしまいそうな瀬戸際で、食い止め、持ち堪える照の姿だつた。

『……やっぱ、強え……』

ドサリ……と、砂浜に倒れて動かなくなる涼。

「……名を……釘撃くぎうち……剛烈ごうれつ……だ——」

照もまた、意識を繋ぐ紐がブツリと切れて、砂浜へと落ちて倒れ伏す。

『やばい……攻撃を、受け……過ぎ、た……』

二人の少年の組手は、鬼灯 照に軍配が上がった。

其の数分後、彼等は様子を身に来た黒木に助けられ、屋敷にて手当てを受ける事になる。

そして目が覚めた時、二人は黒木に、こつびどく叱られ、一週間の絶対安静並びに組手をするなら、必ず俺に相談してからやるようになると言わされたのだつた。

第二十五話 鷹村（たかむら）

「霸ツ!!」

ドツ！と打撃が『砂』に掌が『捻り込まれる』。

何度も、何度も。一人の少年は其れを反復練習のように続けている。

ほおぎき　てる鬼灯照——この物語の主人公にして、現在は怪腕流かいわんりゆうと狐影流こけいりゆうの二つの流派を、平行修行で身に付けている最中だ。

「霸ツ!!」

空手から得た、重さを乗せて、放つ撃。

腰から背中、背中から肩、肩から腕に、連動して乗せた『力』を矢印に見立て、拳先に伝える。

同時に腕を捻り、真っ直ぐに向かう矢印を『捻り』、回転を帯びた『螺旋』に変えた。そして螺旋に成り、破壊の衝撃と連鎖が乗った拳が、砂で満たした龜に、ドン！と叩き付けられる。

「…………『まだまだ』、か」

本来なら『捻れ』、砂には『渦痕』が残るのが、第二段階の『完了』を示す。しかし、

照の羅刹掌は砂に渦を残せていない。

「ふう…。水なら、上手く衝撃が伝わるんだけどな…。まだまだ、回数と修行が全く足らないって事だな」

一度打つては、重心や掌の位置、腕の捻れに膝や肘の曲げる角度を微調整してゆく。失敗しては同じ事を繰り返し、試行錯誤を重ねて続ける…。

* * * * *

「黒木さん、何を読んでいるんですか？」

沖縄に来て七ヶ月に近付いた、ある日の夜更け。

廁に向かう途中、黒木さんが一人で机に向かって正座し、一冊の本を読んでいるのを見ていたので、照は声を掛ける。

「これが。人体の経穴を記した本だ、読んでみるか？照」

経穴とは…人体における金的・首・頸といったような外的弱点、肝臓・心臓・頸椎等の内的弱点も異なる、身体の神経系に存在する弱点の事だ。

人間は其所を突かれると、通常より大きな痛手を負つたり、逆に傷が早く癒えたりす

るといった具合で、各々異なった効果が現れるという。

「首にある経穴の亜門・肘の経穴の三理・色々有りすぎて、一個一個覚えるのは大変ですねこれ」

本と睨めつこして、頭を搔く。事細かく書かれた其れは照からすれば、とても難解で厄介なものだつた。

「照。人は物事を一編に、全て覚えようとすると、逆に覚えられなくなる。経穴の数は膨大だ。先ずは部位を一つに絞り、覚えろ」

まるで先生のように、どうするかを教えた黒木さん。やつぱりこの人、弟子は取らないとか、なんやかんや言いながら、ちゃんと見てくれている。

素直に弟子にならないか?とか言えば良いのに:と思いつつ、照は本に向き合い、読み方が分からぬ所は黒木に質問し、理解していくつたのだつた。

* * * * *

経穴の本を読んでから四日後の朝。

この日は黒木さんがやつてゐる部位鍛練の一つ、重しを巻いた棒を振り、肘・肩関節と腕の筋肉を鍛える鍛練をする。

ただ棒を振るのではなく、一定の間隔を常に意識し、型を維持しながら振るう鍛練。

当然ながら、疲れが溜まれば速度は落ち、遅れが発生してしまう。

「ふつ！・ふつ！」

「せいつ！・せいつ！」

そうならないように、自分の体力と力の入れ具合を調整し、最小の力で振るえるように意識し、自分の力を正しく操る。

俺と涼は二虎流・操流ノ型を利用して、棒を振りながら、無駄なく動けるように鍛練を続ける。

『七ヶ月、二人の成長を見てきた。体付き、動き方、打ち方…どれも以前と比べ、見違える程になつていて』

個々の持ち味もだが…涼は体力と精神面、照は関節の強度と力の伝導が、目覚ましい』黒木は静かに、二人よりも倍以上の重りを巻いた棒を、二人よりも遥かに速い速度で振るいつつ、心中で思う。

『やつば、すげえな…黒木のおっさん』

『…負けてられないや』

彼を見ながら、涼と照、二人の少年達もまた、鍛練に集中してゆく。

* * * * *

* * * *

それから五日の時が過ぎた、昼下がり。

「シツ！シツ！」

「フツ！ハツ！そりや！」

この日は俺と涼が、黒木さんの立ち会い下で、組手に望んだ。但し……今回は今までの組手はない、『新しい形の組手』を始める事にした。

其のが『三本先取』と『五分の時間制限』の二つの要素の付与。

俺達二人の組手は戦い：つまり『死合』という観点が強く出ており、事実、双方どちらかがズタボロになるまで、ずっと戦い続けていた。

だが、このままではいけない。

『限られた時間の中で、如何に相手を倒すか』

『死合』ではなく『仕合』。

『殺す』のではなく『倒す』。

身体だけでなく、頭も平行して使い、戦う。

最強に至るならば、どんな状況下でも己の持ち味を活かせなければいけない。

「はああああ!!!!」

数多の連撃と交錯、紙一重の回避。

一手、また一手と重ねる度に、二人の動作は鋭く。
日本刀のよう!に洗練され、磨かれ、強くなる。

「おおおおお!!!」

にこりゅう

涼の縦拳の嵐を^{にこりゅう}虎流の技の一つ、流刃で細やかに捌く。

りゅうじん

直後——其の僅かな隙間を縫込み、照の顎へと放たれる、涼の右貫手十下突き。
此れを照は両腕を交差し、彼の肘関節を押さえて、腕が伸びきる前に止めた。

「うらあ！」

「せいつ！」

同時に繰り出す頭突き。石同士が激突し合つた鈍い音が鳴つた。

「…………そここまで」

時を読み、黒木の声が小さく。

強さを纏つた声で、終戦を告げる。

「……ぐつ、引き分けか——」

「……ちい、参つたぜ——」

額から小さく、赤い線が引かれ、二人の少年達は地面へドサリと倒れ伏す。
沖縄に少しづつ晩秋の気配が迫る：そんな風と匂いがする時期であった。

※ * * * * * * * * * * * *

《拝啓、十鬼蛇 二虎殿。季節も夏よりずつと涼しくなりました今日この頃、如何御過ごしでしょうか。私こと

鬼灯 照と、相方の氷室 涼は一つ、歳を重ねました。

私は十^{とお}に。涼は九^くに。

以前に比べ、身体の方は随分立派に成り、彼方此方に小さな傷も出来ました。

そうそう。最近、涼が二虎流 金剛ノ型と操流ノ型を組み合わせた、鋼^{はがねうち}打なるものを創りました。きっと貴方も驚く事は間違ひ有りません。

一年と三ヶ月後、無事に再会出来る事を楽しみにしております。

鬼灯 照》

十一月末期：年の移り変わり迄、一ヶ月を切り始める頃合い。鬼灯 照と氷室 涼
は、黒木邸の大掃除に取り掛かっていた。

「……ふう」

屋敷の広い庭で草を筆り取り、残骸を竹箒で掃き、掃除をする照は、改めて彼の住ま

う場所が、大きく広い場所である事を実感する。

「せいせいせいせいせいせい～～！」

そんな彼の視線を過ぎて行く影一つ。雑巾を手に、涼が長い木造廊下を元気に駆け抜けている。

一向に勢いが落ちないのは、今まで以上に体力に余裕が出来た為か。はたまた、今在る体力の効率の良い使い方を見出だしたか。

「…よしつ！俺も、もう一踏ん張り…やるか！」

氣合いを入れ直し、屋敷入口付近の掃除に入る事にした照は、塵取りを竹箒に引っ掛け、小走り気味に向かた。

その時――

「おーい」と、大人びた男性の声が入口辺りから響く。

「誰だろう…？」

篠達を置くと、照はそろりと慎重に、岩壁から頭を少しだけ出して、様子を覗き見ると、其処には頭に茶色い被り物を乗せた、金色の巻き毛髪の男が一人立っていた。

男が身に付けている衣服は、照の前世の記憶の中の何処にもなく、茶色の纏いの下に薄い空色の服、腰には革製の帯を締め、足首まで伸びる『ズボン』という物を付けている。

「お。おい、其処の」

「…俺ですか？」

「そうそう。今、黒木は居るか？」

「黒木さんですね、今居ます。伝えましょうか？」

「そりや助かる。じゃあ『鷹村たかむらが来た』って、黒木に伝えてくれや」

「分かりました」と一礼し、屋敷の中へと入った照は、蝗跳いなごとびを小刻みに使いつつ、黒木を探して走る。

二つ、三つの部屋を抜けた頃、本棚を整理中の彼を見つけた。

「照、どうした」

話し掛けようとしたが、先を越されてしまう。やはり現役の殺し屋、気配の感知もま

た、超一流の域か。

「あ、黒木さん。さつき、屋敷の入口に人が居て『鷹村が来た』と伝えてくれって言わされました」

「…分かつた。照、お前は掃除を続けていろ」

「はい！」

入口へ歩いて行つた黒木を見送り、照は蝗跳で別方向から外へと出て行き、箒を回収すると、せつせと砂払いを再開する。

しかし――

《……気になる》

黒木の事を呼び捨てにする、鷹村なる男がどうにも気になつて仕方が無い。そこで照は掃き掃除でゴミや埃を一ヶ所に集めると、袋を取りに行く傍ら屋敷の中に戻り、気配を消しつつ、二人の居る部屋を散策し始める。

「あれ?」

そうして屋敷を進んでいると、涼が襖の前で何かを覗き見ている。

《涼、黒木さん達は此所に居るの?》

《うん。何か話してる》

口を使わぬ、指先での会話をすると、どうやら此の部屋で二人は話をしているようだ。聞き耳を立てて襖越しに内容を聞いてみる。

「すまねえな。いきなり押し掛けよ」

「気にするな……また、数日は泊まるか?」

「ああ……二か三日は世話になるぜ」

「分かった。……涼、照。其処に居るのだろう」

《えつ!? 何で気付いたの!?》

《……気付いてたかあ》

涼は驚愕の表情で、照を見て。照は観念し、小さな溜息を漏らした。そして襖に手をそつと掛けて、ゆっくりと引く。

部屋では小さな机を境界線に、小さな椅子に座る黒木と鷹村の姿が在る。

「友人の弟子の鬼灯 照と氷室 涼だ。訳あつて、俺が暫く預かる事になつた」「よろしくお願ひします」と照は頭を下げ、「お願ひします」と、涼も照に習い、同じ行動を取る。すると、鷹村は二人を見つめ、暫く無言になつた。

涼は彼が何をしているのか分からず、首を横にかしげたが、照には鷹村という男が『自分達の品定め』をしているかのように感じた。

「成程……こりやあ『強いな』、黒木」ニンマリと笑う鷹村に、「そう思うか」と黒木が返す。

涼が「どうゆう事?」と照に聞き、照は「見定められていたんだ」と答える。

鷹村は少し顎を搔いた後、何かを思い立つたかのように懐から取り出した、掌程の大きさの長方形の物を開けて、親指で叩いていく。

「おつ……丁度、明日の夜にあるか。さて、涼と照……だつたな。お前ら——」

『拳願仕合』に、興味はあるか?

ガチリと音を立てて、彼等の運命の歯車は大きく回り出す。

二人の少年と、一人の達人の運命が。
新たな形で交わろうとしている。

第二十六話 拳願（けんがん）

涼と照。お前らは『拳願仕合』に興味はあるか？」

鷹村はそう言つて、長方形の物を折り畳み、懷にしまう。

「拳願……」

「仕合……？」

「あ……そうだよな。いきなり言われても、分からねえのは仕方ねえか」

コホンと一拍置くと、鷹村は大まかであるが、拳願仕合と呼ばれる物について教えてくれた。

話によると江戸時代の頃、商人達は御用達の地位を巡つて争い、社会が大いに混乱していた時があった。其れを徳川家継と呼ばれる少年將軍が『正々堂々雌雄を決せば良い』と一声放つたらしい。

これにより商人達は自らの愚かさを恥じ、組合を結成。以後は私闘を禁止とし、対立したならば組合を通じて、各々が雇い入れた腕自慢達を戦わせ、其の勝敗を絶対の物として決めるという決闘方法——其のが拳願仕合という、三百年近くの歴史を持つ決闘方法なのだと。

「……よく分かんねえけど」

「兎に角、その腕自慢が戦う場所がある…という事ですね？」

「ああ。二人共、中々見所もある。知つておいて損はないと思うが…どうする？」

たかむら
鷹村が微笑し、尋ねてくる。

涼も、照も。互いに顔を見合せた。そして飛びつ切りの笑顔で、こう答える。

『勿論!!!』

其の言葉はとてもストレートで。だが、これまでに無く一人の少年達を滾らせていた。二人共、最強を目指す目標がある…故に見物を広め、自らの力を知りたい、試したいと願っていた。

其の好機が転がり込んできたのだ——絶対に見逃さない。

「ハツハツハ…！ 迷いなしか：良いね。因みに、明日の夜に其の拳願仕合が在るんだ…って、既に答えは決まってるか」

「行くに決まつてますよ」

「俺も！」

「オーケー。取り敢えず、明日の午後五時にタクシーの予約を入れておく。

くろき
黒木はどう

「俺は…」

「俺は…」

黒木が断ろうとする雰囲気を感じ取った照と涼は、熱い視線を送る。子供だからこそ許される、そんな視線だ。

「あーこうゆうとき、子供二人を護つてやれる大人がもう一人いれば心強いんだがなー」少年達の視線に便乗して、黒木に言葉を投げ掛ける鷹村。

「はあ…。：分かった」

三人の連携に溜息を一つ溢して、同行を承諾した黒木。よしつ！と涼と照は拳をコツンと合わせたのであつた。

* * * * *

鷹村が黒木の屋敷を訪れて、一日が過ぎた黄昏時。今、屋敷の前には一台の車が停まっている。

「よし二人共、忘れ物は無いな？」

腕組みし注意を促す鷹村、其の横で静かに助手席へ乗り込んだ黒木。

「これが…たくない。：何か怖いな」

「お？ ビビつてんのか、照？」

「悪いかよ。：：そりや初めて乗るし、何て言うか：：密封空間つて、こう：：落ち着かないんだよ」

「まあ分からなくもねえさ。さ、乗んな」

鷹村に押され、涼が右側の窓席に座り、真ん中に鷹村が、最後に照が乗る。ドアが閉まり、タクシーは静かに。目的地に向けて走り始めた。

窓の外を高速で移り行く景色に、涼は大いに興奮し、鷹村に色々な問い合わせを投げ掛けては、其の答えに一喜、また一喜し。照は其の様子を見ていたが、やがて眼を閉じて、年相応の小さな寝息を立て始める。

街中を走り、幾つもの信号を越えて、数多の車とすれ違い、一時間と少しの時が流れた頃――彼等を乗せたタクシーは、漸く目的地に到着したのであつた。

* * * * *

四人を乗せたタクシーが停まつた場所は、市街地より離れた山沿いに在る、古びて廃れた建物の前。辺りが既に暗闇を帯びたにも関わらず、其の周りには多くの車が止まつており、建物内には二百か三百、多く見積もれば四百近い人々が、所狭しと円を描くよ

うに並び立っている。

「すげえ…」

「多いな…」

「ああ。此處に居るのは、全員が拳願会けんがんかいつう、一種のグループ：分かりやすく言うなら、集まりみたいなもんだ。仕合ともありや、刺激を求めて内や外から、色々な奴が集まつてくる。

さて…今日の仕合はどんな奴等が戦うんだろうな？」

フフ：と微笑し、時を待つ鷹村。一方の黒木は、無言と共に静かに待ち。涼はワクワクで体を奮わし、照は周りの人々の身に付けている物が、何か高級そุดなど印象を覚えた。

と…

『皆様、御待たせしました』

パツパツ!!と天井から光が射し、建物の中心部へと注がれる。其処には一人の眼鏡を掛けた、縦縞模様の服と黒いズボンを着る、細身の男性が右手に何かを握つて、それに向けて声を発すると、せいぶえいぞうかぶしきかいしゃ声は大きな物として響いてくる。

『只今より、なんばじゅうこうせいさくしょ西部映像株式会社と南波重工製作所の拳願仕合を開始致します！』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!
 热狂——これが、二人の少年が初めて拳願仕合の場で覚えた感覺だつた。

他の大人達の血走つた眼。
 手に汗を握り今か今かと興奮する様。

思わず氣圧されそうになる。

『それでは、今宵の仕合で戦う闘技者達の入場です！

先ずは、南波重工製作所・代表闘技者！

『テキサスの喧嘩屋』！パンクウウウウ!!アボットオオオオオ!!!!』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

西側の人混みが左右に割れて、其の中心から一人の男が中央に向かつて歩いてくる。
 男は肌が真つ暗で、下にボクサー・パンツという一張羅しか履いていない。

だが、驚くべきは其処に在らず。

鍛え抜かれ、磨き続けてきた事が容易に伺える、筋骨隆々の体。其の中でも特に、腕

の筋肉たるや凄まじく、岩石等一撃で粉碎出来てしまうかのような印象を、照は覚えた。

「パンクー！」

「男みせたれえ！」

「期待してゐるぞー！」

観衆の声援を受けて、パンクは右腕を振り上げる。まるで其れは、死地に赴く戦士の如く、壮大で氣高い姿であつた。

「なあ照、あのパンクつておっさん…」

「分かつた？：『強いね』、あの人。二虎さん程じや無いけど、かなりやれる人だと思う」「特にあの腕で殴られたら、かなり応えるだろうから間合いに注意したいな」

「ああ」と、自分達が覚えた印象を話し合い、戦う時にどうしたら良いかを考えてゆく。

『続いての入場！西部映像株式会社・代表闘技者！』

『穴熊』

こと、倉穴

熊五郎

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

「え…」

「穴…熊…？」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

二人の疑問も大歎声に搔き消され、東側の群衆の合間に抜け、大男がやつてきた。

此方もボクサーパンツの一張羅だが、先程のパンク・アボットとは体格差がまるで違つた。

デカイ——頭一つ分程抜いた身長。

太い——全身を支えるの筋肉の総量。

強い——纏う強大な闘気。

だが、間違いない事が一つだけある。あの男の顔は、数ヶ月前に出会った、倉穴 熊五郎と同じである事だ。

「ふつふつふ。今日もド派手に決めるぜ」

獰猛な笑みを浮かべ、拳をゴキン！バキン！と鳴らす熊五郎。

「穴熊さーん！頑張つてー！」

「一発がましたれえやあ！」

「穴熊、いてこませー！」

観衆の声も一際大きく、熱氣を帯びる。

建物内中央で両雄は対峙し、火花を散らす。

「穴熊のオツサン、闘技者だつたのか」

「ん？お前ら、穴熊を知つてんのか？」

「はい。変な緑の着ぐるみ被つて走つてた所を、涼と一緒に捕まえました

「おいおい、捕まえたのか…」

鷹村が聞くと、照は彼との出会いと敬意を簡潔に伝え、彼は頭を少しだけ振った。そ

して熊五郎とパンクについて話し出す。

「彼処に居る、倉穴 熊五郎：通称・穴熊は、拳願仕合の上位層に居る実力者。其の成績は50勝4敗、ここ最近で50勝を達成した闘技者はそうはいねえ。んで、もう一方のパンク・アボット：拳願仕合成績は9勝無敗。次いで、今年の新人王に輝いた猛者で、徐々に頭角を現し始めた男もある。

つまり、今回の拳願試合は。ベテランと新人王の一大決戦：つて事だ」

空気が渦を巻き、空間に稻妻が走るような、そんなビリビリとした緊迫感が満ちてゆく。

『よし、二人とも良いな！始めるぞ！』

審判の男の一声で、パンクと熊五郎は互いに背を向け、一步：二歩：三歩と、距離を取る。そして八歩程歩いて止まり、互いに拳を握り絞めて構えた。

『準備は良いか！準備は良いんだなッ！』

審判が掌を天へ、天へと大きく掲げて。

息を吸い込み、目を見開いた。

そして

『始めえええええああああつ
!!!!』

大声量と共に、開戦を告げる手刀が振られ。
二人の闘技者は、真っ向から激突した！

第二十七話 勝者（しょうしゃ）

『始めええええあああああっ!!!!』

一声と共に、両雄が突進！

ほぼ同時に起こる、大歎声。

一大戦が今、始まつた。

「おおお!!」

穴熊の右腕がボコン！と筋肉が隆起し、大槌の如く拳が振り抜かれた。

「Sh.i.t！」

上体を屈ませ、豪腕を躲わし、パンクの右肘が穴熊の左腕に直撃する。

「ちい……やるじやねえの！ボウズ！」

手、手、手。パンクに連続で襲い掛かる——手。照は穴熊の繰り出す連手が、相撲で言うところの『張り手』に似てゐるように見えた。

「H a ! I t s l o w l y !」

張り手の乱打を搔い潜り、パンクの連打が穴熊を打ち抜く。

「…………にい！」

確かに手応えは在った。だが、其れ以上に――

「効かねえぜ！」

穴熊の耐久力は、パンクの予想を上回っていたのである。

「オラア！」

御返しとばかりに、穴熊が繰り出した左フック。パンクも肝臓を防御するため、右腕を射し込んだ。

「――ツ!?」

バチイイイイイ!!!!と一際大きな、肉を打ち付ける音が鳴り、パンクの体が宙を舞い、柱に大きく叩き付けられた。

「出たあああああ！『熊の張り手』^{ベア・ブレイク}だああ！」

「良い音で鳴つた！」

「結構重いパンクを、吹き飛ばしやがつたぞ！」

「穴熊――このまま一気に押し込め――！」

観衆が騒ぎ立ち、穴熊の名を呼び始める。

「…………プツ」

ゆつくりと立ち上がり、負傷した右腕で口元と鼻の下を拭い、唾と共に口の中の血を吐き飛ばす。

パンクは冷静だつた。

相手は拳願仕合で戦い、そして50勝も勝つてきた男。この程度でやられない事は覚悟していたし、自分もダメージを貰うことは想定済み。

寧ろ、ダメージを受けた事でエンジンが掛かつた。眠気覚ましには、あの打撃が丁度良い。

『……どつちも『本気じやない』。互いに相手から貰つた事で、歯車が噛み合い始めた可能性が高い。勝負は此処からだ――――』

初手の突撃から変わり、ジリジリと互いに一定の距離を保ちながら、円を描くように両雄は歩く。真剣を構えし剣士の一騎打ちが如し、気迫に満ちた戦場へ、観客達の期待を孕んだ視線が注がれる。

其の中で、一番先に変化に気付いたのは黒木だつた。

『…………動く！』

其の数瞬、パンクが状況を破り、穴熊へ仕掛けた。

真っ直ぐに突貫し、彼の目の前で急停止。熊五郎が振るう腕を下にすり抜け、鳩尾に一撃を叩き込む。

「おらあ！」

ブンツ！と右腕が振るわれ、其の腕力『だけ』で空気が震えた。しかし、其の剛腕が

パンクを捕らえる事はなかつた。

「シツ！シツ！」

左脇腹、左膝に一撃づつ入る。

「ちいっ！」

右足の中段蹴りを躱して、再び左膝に一撃。ズンツ！と重い衝撃が走り、熊五郎の表情が一瞬歪む。

「！」

弱点発見。パンクの動きと視点が変わる。顔を狙う右の正拳突きを首を傾けつつ回避し。左アッパーで体勢を崩して、右中段二回蹴りで膝と肝臓に打撃を叩き込みつつ、跳躍後回し蹴りで頭蓋を蹴り飛ばした。

「すげえ…何だ今の連続攻撃…！」

「穴熊さんの…多分だけど『関節』と『肝臓』を『確実』に叩けるように。其の為にああゆう攻撃をしたんだと思うよ、涼君」

「其れを一瞬で見抜いてやつたのかよ…!?」

「うん…」と二人の少年達は、両雄の戦いに再び視線を移す。

「Year！」

連打、連打、連打。

殴られ、蹴られ、打たれ、穴熊の体：特に左脇腹と顔面がみるみる赤く腫れ、血に染まつてゆく。

「いけえ！パンクう！」

「ブツ飛ばせ！」

「穴熊あ！何やつてんだ！」

「怯むなあ！攻めろ！」

「大金賭けてんだ、バカ野郎——！」

観客達の各々が、パンクか穴熊に対する怒号が響き渡る。

『なんだこれ：『一方的』じゃねえか』

この状況を見ている、氷室涼が抱いた感想がこれだつた。

攻撃を喰らい、ダメージを受け続け、彼は一切『反撃』しない。否、パンクの打撃に反撃する事が『出来ない』でいるのだろう……そうであるとしか考えられない。

『なんだろう：この気持ち悪い『違和感』』

対する、鬼灯照が抱いた感想がこれだつた。

痣だらけになりながら、血塗れになりながら、表情に『余裕が満ちている』のだ。其れが照からすれば、あまりにも『不気味』で仕方ない。

「F i n i s h m o v e ! L e t , s g o !」

パンクが何か叫んだ、次の瞬間、傷だらけ穴熊の背後に回り込んで、自身の鍛えた剛腕で首を締め上げ始めた。

「パンクが決めにいつたぞ！」

「おおおおお！」

「やれえ！ 締め落とせえー！」

ギチギチと聞き慣れない音がする。硬い肉を縄で締めた時、こんな音がするのだと照と涼は学ぶ。

『頸動脈洞反射による意識喪失迄の時間は『約七秒』と言われている。

この状況——あの男はどう凌ぐ』

腕を組み、黒木は心中でそう呟いた。体勢がパンクに有利であるからだ。

前から組み付く場合、相手も引き剥がさんと抵抗する。力比べになる場合、穴熊との体格差で不利なパンクは負ける可能性がある。

しかし後ろから組み付く場合は、まるで違う。締める腕がダメージを負うだろうが、余程柔軟で無い限りは後ろへの攻撃は出来ない。裏拳を放つにしても、関節には可動域の限度という物が在り、迂闊に動かせば首を一気に締め付けられて、意識を失いかねない。

『この小僧！ 良い締め付けを仕掛けてくるなあ……』

巨体に似合わぬ跳躍で、パンクを抱えたまま宙に飛んだ。

「W h a t s !?」

まだ余力を残していたのか！――パンクは、穴熊の首を減し折るつもりで、腕の力を込めようとした。其の瞬間――――力を入れる僅か一瞬の弛みを狙い、穴熊が体を捻つて首締めから脱出したのだ。

「!？」

「おお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

顔面をパンクの胸に当て、両脇に自身の腕を通して、固め。二人は空中から真っ逆さまに地面に落ちてゆく。

「Waaaaaaa!?!」

「食らえええええええ！」

数瞬の後、ズドオン!!と一際大きな音が廃工場内に響き、空間が震え、砂埃が舞う。其れが晴れた時、彼等の視線の先には窪んだ地面に、頭で逆立ち、真っ直ぐに伸びた状態の両雄の姿が在った。

「ど、どつちが勝つたんだ!?」

観客達がざわめき、様子を見守る中…二人の体がぐらりと揺れ、同時に背中から地面にドスン……と落ちた。

「倒れた！」

「つて事は…どうなるんだ!?」

「どつちなんだ、審判！どつちが勝つた!?」

審判の男が駆け足氣味に一人へと近付く。状況を確認し、戦闘継続が可能かどうかを確かめる。

「ふうあつ！」

「うおつ!?」

『『『『『うわあ!?』』』』

ムクリと唐突に、穴熊が審判の目の前で起き上がり、一部の観客達を除いて、すつと

んきような声が出る。

「ふう…。小僧、中々良いパンチだつたぜ」

彼が見下ろす先には、白眼を向いたまま動かないパンクの姿が在った。

審判は其れを見て、右手を高く掲げつつ、宣言した。

『勝負ありつ!!

勝者、倉穴 熊五郎うツ!!!!』

審判の宣言、同時に響く大歎声。

ある者は大いに喜び、はしゃぎ。

ある者は、担架に運ばれるパンクに対し、声援を送り。

また、ある者は他の者との会話し。

さらに、ある者達は『穴つ熊ツ！穴つ熊ツ！』と連呼して騒いでいた。

「…すげえ——!!」

観客達の中、激戦を見届けた水室 涼の口から、小さな言葉が漏れた。
やられっぱなしの状況から、鮮烈極まる逆転勝利を目の当たりにし、彼はある種の感動に震えた。

こんな戦い方がある。

こんな劇的な瞬間があると。

——其れを知つた時、彼は己の心の奥底から沸き上がる、熱い『何か』の存在に気付く。

「これが…拳願仕合——」

純粹な力と力の激突。

自分の手札と交錯しあう思考。

一瞬の隙が勝敗を別つ危うさ。

其れ等が混じり、其の中で、最強を目指さんとする者達が割拠している事実。

この場所ならば、きっと前世に成し遂げられなかつた夢である、『霸壇流はかりりゅう
こ

そが最強であると、現世に轟かせる』事が出来るかもしけない…そんな想いを照は抱いた。

《拳願仕合…か》

戦いを見終えた黒木もまた、静かな気持ちのなかで燐る、熱い衝動を感じ取る。

己の力が拳願仕合という名の戦場で、何処まで届くのかを試したいと、彼は滾っていた。

後に三人は、拳願会の今後を決めうる『大きな戦い』で、別々の会社の闘技者として戦う事となるが、其れはまた十数年先の話となる。

第二十八話 流転（るてん）

倉穴 熊五郎拳とパンク・アボットの拳願仕合を見届け、数日が過ぎた。鷹村さんは仕合を見た後、暫く黒木さんの屋敷で俺達と生活を共にする事になった。

鷹村さんの話は俺や涼にとつて、勉強になつたり、心が踊る話ばかりで、本当に楽しい時間だつた。

そして数日後、彼は何処かへと旅に出た。黒木さん曰く、特定の居場所を作らず、色々な場所を転々としながら暮らしているのだとか。

いつか自分も、自分の足で色々な所に行き、色々な経験をしたいと思わずにはいられなかつた。

この世にはきっと、俺の知らない強い奴等が沢山居る。そいつらに逢いに行きたい \therefore 。逢つて戦い、強くなりたいと、そう思つた。

* * * * *

ある日の夜。月明かり照らす静かな浜辺で、木の枝を手に持ち、俺は砂に字を書いていた。

砂には『霸壠流』ばかりりゅうと大きな円が書かれ、円内には基本技『釘撃』くぎうちや、跳躍歩行『蝗跳』いなごとび、防御技『反乗』はんじょう、回転踵落とし『斧車』おのぐるま等々：前世で生み出した技と転生してから生まれた技を、自身の記憶の図書館から引き出してゆく。

「こうして自分の技を見ると『十分』に戦える事は分かる。だけど『足りない』んだよな……」

照が懸念している事：其れは霸壠流には『即殺級の威力を持つた技が、一つも無い』事についてだつた。霸壠流の理念である『衝撃を体内へと徹し、内側から破壊して相手を倒す』事は、基本技である釘撃で十二分に達成している。

しかしながら、霸壠流は『軀て』敵を倒す事は出来ても、『直ぐ』には敵を倒せない。今後、自分よりもずっと体躯に恵まれた相手や力を持った者が現れる。

そうなつた時の為に、霸壠流の足りない『即殺級の威力を持つた技』を作る必要があるだろう。

「…………いや、違う。霸壠流の技は、俺の創った流派は。『対処方を知つていようと簡単には防げない』。だつてそのだもの、釘撃は衝撃が生き物みたいに『生きて』、体内に浸透して中芯に到達するんだから。

なら、其の観点から考えるならば：霸壙流には『連鎖的な破壊技』に『即殺級の威力の技』が必要になる。

釘撃で当たつた部位から、多数ヶ所を巻き込んで『破壊し続け』、最後は『五臓六腑と全身の骨全てを絶対に壊し尽くす』…そんな技が

連鎖的な破壊と、即殺級の威力。

狐影流には羅刹掌らせつししょうという捻り込んで体内を破壊する技が、怪腕流かいわんりゅうには即殺さえ可能な貫手たる魔槍まそうがある。

其れ等と比べる等

「照、どうした」

ふと耳に飛び込む、聞き慣れた声。顔を上げると、平良たいいら

げんざん

厳山さん

の姿があつた。

「厳山さん。実は…」

俺は彼に、自身の流派・霸壙流に欠如している『即殺級の威力』と『連鎖的な破壊技』。そして自分が考えた『最強の技の形』を口頭で話ながら、時折筆代わりに木の枝で力の流れを描いていった。

手の内を明かすことになるが、それでもしないと問題は解決出来ないと思考したから

だ。

「照。こう言つて良いのか分からぬが、お前の技である釘撃——俺は『凄まじい』と思つてゐる」

「釘撃が……凄まじい? でも、これは覇堺流の『基本の技』だよ? 其れのどこが……」
師の言葉に疑問を投げ掛けると、「それだ」と、そう巖山さんは言つて、こう言葉を紡ぐ。

『体内で衝撃が炸裂する』：通常なら考えられない技だ。ただの打撃であるのに、心臓の在る部位に当たれば、臓器破裂も目ではない。

『浸透し、中芯に到達する』：其の衝撃の余波を生かせば、骨や筋肉の芯へ衝撃は流れ行き、時間はかかるだろうが必ず到達する。

魔槍のように貫くことも無ければ、羅刹掌のような捻る行程を踏むこともない。ただ殴り付けたり、当てる『だけで良い』。此程に単純で、強力な技が『基本にある』時点で、相手の視点からすれば、一撃食らつた時点で其れは『未知数の驚異』になる。

考えてみろ。武器も薬も使つた訳でもないのに、お前が放つた変哲もない一撃を貫つただけで、戦闘不能に追い込まれる。

照よ。……お前は既に『持つている』んだ。格上さえも倒すも、殺すも可能な『絶対の武器』を、な」

二虎さんも関心を示し、真似たり、初見殺しの技と言つたりはしたのだが、釘撃を此処まで評価されたのは初めてだつた。

『そ、うか…改めて考え直せば、釘撃つて相当恐ろしい技なんだよな』
防御も受ける事も不可能の打撃。其が何時、どのタイミングで襲い掛かるか分からぬ恐怖。相手にとつて、此程厄介な技は無い。

心に燐り、蔓延つていた迷いの霧が、厳山の言葉で晴れたような気分になつた。

「厳山さん！ ありがとうございます！ 僕、もっと頑張ります！」

深々と頭を下げ、照は頬を二度軽く叩き、拳を握つて、身体中に力を込める。霸堺流はまだまだ強くなれる…：そう実感しながら。

* * * * *

* * * * *

鬼灯 照と冰室 涼。

二人の修行は日々を重ねる度に、互いが互いを高め合い、双方共に強くなつてゆく。

「いやあああああああ！」

「はあああああああ！」

ある時は、海中での高速組手を連戦し。

またある時は、関節強化修行でどちらが長く続けられるか競い。

更にある時は山岳や森林を自由に駆け、目的地を目指して走つたり。
師の下で技を磨き、自らも模倣し、糧にする。

風に吹かれる日もあつた。

雨に打たれる日もあつた。

海に巻かれる日もあつた。

沖縄が織り成す自然の中で、少年達は強く、そして逞しく育つていつた。

そして、季節は巡つて行く……。

一年と三ヶ月が過ぎし時、遂に『約束の日』が訪れる。

第二十九話 再会（さいかい）

沖縄、黒木邸付近：波音が響き、熱くとも心地好い風が吹く中を、一人の男が歩いて行く。

「アイツ等、元気にやつてるかねえ」

男の名は十鬼蛇ときな二虎。彼が此の場所を訪れた理由は、ある約束を果たすためだ。屋敷の入口に立ち、深呼吸一拍。そして――

『頼もう！』

一声。暫しの静寂を起き、屋敷の方からドタドタと駆け足で此方に向かってくる。「二虎さん！」

入口の横式扉を思い切り開いて、少年が顔を出した。歳は十か十一程の初々しさを含みながら、身長165cm近い背丈はゆつくりと青年になつていよいよ事を実感させる。だが、それでいて纏う黒の着物と灰色の袴の合間から覗く鍛え、引き締まつた肉体が、確かに男としての成長をしつかりと見せていた。

「……二年振りだな、照てる。」

「はい！」

鬼灯ほおづき 照てる。此の物語の主人公にして、十鬼蛇 二虎の一番弟子にあたる彼は、沖縄の海と自然の中で修行し、二年前に一度別れた時よりも更に力強く成長した。

「二虎!!」

照より数瞬遅れ、もう一人の少年が屋敷から姿を現した。照よりも肌色は少し茶がかり、髪は銀に近い白。青の着物を着付けた彼もまた、照に負けず劣らずの鍛えられた肉体を、二虎の前に修行の成果として提示したのだ。

「涼りょう。お前もな」

「おう！」

水室ひむろ 涼りょう。照と同じく、彼も十鬼蛇 二虎を師とし、修行を重ねた少年である。

照が二虎の一番弟子、涼は二番目だ。

「来たか」

最後に現れたのは、黒い柔道着に身を包む三十台後半の男。闘気を纏い、どつしりとした身体で二虎に視線を送るのは、屋敷の主にして怪腕流かいわんりゅうの使い手、黒木玄齋くろきげんさい。二年前、二虎が個人的な用事で動く際に、弟子二人の身の安全を考え、彼の元に預けていたのである。

そして照と涼にとつて、彼の流派の源流である琉球空手の技を絶妙な距離感を保ちながら教えて、また怪腕流の真髓を見せた恩師である。

「黒木。二年間、二人の事をありがとうございました」

「気にするな。二虎、二人は『強く』なつたぞ」「そうか」と二虎は照と涼を見た。何んまいや姿勢、身体付き、自分が予測していたものよりも、遙かに成長している。

「……帰るか」

「おう！」

在るべき者は在るべき場所に。自分達の居場所にして故郷である『中』へと帰るため、黒木邸を後にしようとした時だつた。

「ちょっと待つてください！」と照が二虎達を静止させたのである。

「どうした、照？」

スッと黒木の方へ向き直り、彼は地面へと正座する。
そして。

「黒木 玄斎さん！」

大きな声で、ハツキリと。

「二年間！私達一人に稽古を付けて頂き、ありがとうございました！」

敬意と、感謝を込めて。

「此の御恩と教授！此の先の生で無駄にせぬよう、精進して参ります！」

額を地面に着け、そう述べきつたのだった。

* * * * *

* * * * *

沖縄港にタクシーで移動し、港で旅客船を待つ間：

「…………」

「いやあ、良いもん見せて貰つたぜ」

「まさか照が、あんな行動取るなんてな」

照は其の時の行動に対する一人からの追求：もとい弄りを受けていた。
「忘れてくださいよ：いや本当に、眞面目に、お願ひします……」

ニヤニヤと温かい目で見る涼と二虎に、照は赤面しつつ自分の行動を悔いた。どうやら前世の時に行つていた事は、此の時代では価値観が大いに違うらしい。
しかし――

「でも…照、あの時はすつぐくかつこ良かつたぜ」

弄つた後に涼は素直な感想を述べ。

「だが、まあ…ああゆう事が出来る奴は、そうは居ねえ。俺が照と同じ行動取つたら、先

ず恥ずかしすぎて死ねるね。

要するに、他人じやせつて一出来ねえ事を恥ずかし気もなく実行した照は、すげえ奴だつてこつた』

二虎もまた称賛し、照の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫で、悪戯に笑つたのだつた。

「むう…貶してゐるのか、褒めてるのか、分からぬですよ…」

少し膨れつ面になり、照が拗ねた。人間には突つつかれると困る事や、拗ねたりすることに繋がる所謂『地雷』の様なものがある。今回の場合、照の誠意の行動を言つたりした事が原因となり、彼は気分を悪くしたのである。

と――

「賑やかそうだな」

照と涼の耳に、聞き覚えがある声が届き、その方へと視線を向けた。着物と袴を着付け、白髪交じりの黒髪の男性が、ゆっくりと此方に向かつて歩いて来ている。

「あ！ 厳山さん！」

彼の名は平良 厳山：裏世界で狐影流を用い、暗殺稼業に身を置く者。また、照が此

の沖縄で学び、会得したもう一つの流派・狐影流の現当主でもある。何故、彼が此処に居るのかというと、三日前の修行中に照自身の口から「三日後に、俺と涼は故郷へ帰えります。我儘になるかも知れないんですが、俺の師匠の二虎さんと

会つてくれませんか？」と伝えていたからだ。

「君が、照の言つていた師匠の十鬼蛇 二虎か……」

「照がタクシーの中で話してた、平良厳山だな」

初対面にも関わらず、空気が張り積める。死闘特有の空氣と匂いがし、照も涼も自然の内に構えていた。

だが――

「ふつ……成程。照が君の事をよく話す理由が分かつたよ。……良い師のようだな」

「弟子想いの奴だつて言つてたが、わざわざ見送りに来るあたり、本物みてえだ」

ハツハツハツハツハ！と高笑いし、一拍。

「：改めて。十鬼蛇 二虎だ」

「平良 厳山という。見知り置きを」

自己紹介と共に、堅い握手が交わされた。

それから二虎と厳山は、船が来るまでの時間が許す限り、弟子として育て、見てきた照の戦い方を語り合つた。本島行きの船が到着し、出航ギリギリまで照は厳山に礼を述べ続け、厳山もまた「達者でな」と言い、更に「これからも、たゆまぬ努力と共に精進せよ！鬼灯 照！」と、激励を送つた。

こうして照と涼にとつて、長いようで短い、沖縄での二年間の生活は幕を閉じた。

舞台は再び中の世界へと戻る。そして其処で二人は、新たに『出会い』と苦しき『別れ』を経験する事となる……。

第三十話 集結篇

第三十話 新天（しんてん）

沖縄から船で横浜と呼ばれる場所に三日掛けて、其処から北へと移動して半日。十鬼蛇二虎、鬼灯照、氷室涼は産まれ故郷の無法地帯、通称『中』の『ある区域』の入口へと辿り着く。

「さて…だ。二年前、お前達に約束していた場所に連れてきたぜ。この無法地帯、中でも、危険度は一・二を争う、飛びつきりヤベー場所。

名前は『十鬼蛇区』：俺の生まれ育つた所だ』

少年二人の目が、其の名前を聞いた瞬間、真剣味を帯び、鬪気を纏う。これから向かう場所は今までのような生半可なレベルの敵は一人として居ない、弱肉強食の支配するような所である。

常に死の危険が憑き纏う：『以前ならば』入る事を躊躇つたかもしれない。

だが、二人の少年は二年。血の滲む努力と鍛練を重ね続け、培われた実力が、自分の背中を押していた。

此の危険な世界でも戦い、生き残れるだけの確かな自信が。

「二虎さん。俺は大丈夫です」

「俺もだぜ」

「……んじや、行こうか」

踏み出された一步。三人の戦士は、暴力と混沌の世界に足を踏み入れたのだつた。

* * * * *

* * * *

* * * *

*

*

十鬼蛇区に入り、暫く歩くと人が行き交う大通りに出る。すれ違う男の顔や身体は生々しい傷が刻まれていたり、眼帯や片耳に指の数本が欠損していたりしていた。

無論五体満足な者、後ろに若者を引き連れ歩いてる者も居たが、やはり衝撃的だつたのは、一糸纏わぬ全裸の女を這いつくばらせ、首輪と鎖で飼い犬の様に扱う恰幅の良い男達の大群で、涼はあまりの絵図等に目を丸くし、口をボカンと空けていた。

二虎さんが言つていた通り、此の十鬼蛇区は危険度合いが狼參ろうざや五熊ごゆうの比では無い。油断出来ない世界だと改めて思い知る。

負けた者に待つのは死か、人以下の扱いのみなのだと。

* * * * *

* * * * *

十鬼蛇区の中心街より離れた、小高い丘の上にポツンと小さな一軒の小屋と中くらいの木が一本生えている。

小屋の前には円柱の筒が数本、三段の棚に色々な小物が乱雑に並べられ、小屋の上に登るための梯子が掛けられていた。

「今日から此処が俺達の拠点になる。生活に必要な物は最低限揃つてあるからな。あ、因みに水はあんまり使いすぎるなよ?」

「すっげえー! なあ、二虎! 小屋の中、見て良いか!」

「おう、良いぞ」

「しゃあ!」と涼は喜んで、小屋の扉を開いて中へと入つて行つた。其の様子を見ていた照は二虎に向け、こう言つた。

「拠点: 何だか小さな御城みたいですね、二虎さん」

「城かあ。ま、砦の方が正しいかな? コレの場合ば

「あ: そうですね」

「: 照は相変わらず、変な考え方してるなあ。ソコんとこが中々可愛げがあるんだ」

「…女じやないんですけど、俺」

「褒めてんだ、そうカツカすんなって」

二虎^彼とこうして、何気無い会話が出来る。

照にとつて其の時間は、彼の人生で、かけがえのない物になつたのだ…。

* * * * *

* * * *

* * *

*

*

「よし、照。涼。今のお前等の実力がどんだけあんのか、組手で証明してもらうか」

小屋をある程度見終えて、缶詰で昼食を取ろうとした時、二虎さんがいきなりそう告げてきた。

「へへっ…俺達、けっこ一強くなつたぜ？」

「うん。…もしかしたら、倒しちゃうかも」

「…ほおーん。自信満々じやねーの、おちびちゃん達。

…良いぜ、二人まとめて相手してやるよ」

ニンマリと、其れは其れは獰猛な笑みを浮かべ、バキン！ゴキン！と拳を鳴らす二虎さん。

そして其の数分後……

「つ、強い……」

「今まで、本気じやなかつた…………のか…………」

「たりめーだ、腕白なガキンチョ相手に手加減しながら戦うの、そーと一ムズいんだよ。ま、今回の組手のおかげで、今後手を抜く必要が無くなつたのは嬉しい誤算だつたがな」

俺と涼君は、本気を出した二虎さん相手にギツタンギツタンのボッコボコ、ボロ雑巾の如く惨敗を決して地面でべつたりと溶けていた。

無論、二人を相手どつた二虎さん自身も無傷とはいからず、あちこちに打撲傷や切傷が出来ている。

「んじや……お前等。明日から此の十鬼蛇区で『実戦訓練』を始めるぜ」

「……訓、練……？」

「……実戦……？」

「おうよ」

そう言い、二虎さんは訓練の説明に入った。

「文字通りの実戦、フィールドは此の十鬼蛇区内に居る武道に精通してゐる奴等『全員』が相手だ。先ずは自分の目でソイツが強いかどうかを『見極めろ』。

狙いを定めたら何らかの方法で突つつけ、大抵の奴等は『確實に乗つてくる』。そしたら後は『戦うだけ』。

因みに二人同時に見るのは、俺でも無理がある。お前等の体力や疲労も考慮して、先ずは一日に付き『一人二戦まで』だ

いよいよ本格的に戦う。勝者は生き残り、敗者は死ぬ。中の……本当の意味での闘争が始まると、そんな期待と不安を抱きながら、一日が明ける事になつた……。

* * * * *

中の大通り……昨日も通つた其の道を歩きながら、照は今日戦う相手を探してゐた。

《強い人……強い人……》

彼の後ろでは涼と二虎が遠目に様子を窺いながら、其の様子を静かに見守つてゐる。

『強い人……強い人……あ』

前方に一人、布を被りながら歩く者を発見。見失わぬ様に、人混みの中を蛇縫の運足を使いつつ追跡・接近する。

背中を捉え、もう少し……。そう思つた矢先、いきなり相手が加速する。例えるなら、天敵を相手に尻尾を切り落とし、一目散に逃げる蜥蜴の様な速さで。

「あっ！待て！」

逃がすわけにはいかない。人混みを裂き、其の背中を追い掛ける。

『ぐつ……速い！』

追えど追えども其の差が中々縮まらず、照は少し焦りを覚える。自慢では無いが、沖縄での二年に渡る修行で体力や速度はかなり鍛えられたと自負している。

其の速さに張り合えるとなると、奴は涼並の足の速さを持ちながら、自分以上の体力を持つ存在だと理解出来る。かなりの強敵……いきなり当たりを引いたか、はたまた大凶を引いたか。

だが突如、何を思ったのか前を走っていた奴が方向を変えるや、建物の間へと入つて行く。

「何……？」

誘い込むつもりなのか？いきなりキナ臭くなつたが、逃がすつもりは毛頭無い。

相手が罠を張つて待ち構えていようが、必ず追い付き戦う。十鬼蛇区での初実戦、やはり強い相手と戦い、此の区域の実力を確りと知りたいのだ。

建物の合間に抜けた先、照は裏路地の開けた場所に辿り着く。其処には彼が追い掛け來た、布を被り、顔を隠した奴が背を向けて立っていた。

『さつきからオレン事、ウロチヨロ嗅ぎ回つてたみてえだな、テメエ』

随分とぶつきらぼうな話し方をする奴だ。それでもコイツから感じる殺氣は、並大抵の人間のそれでは無い。

「ああ、お前と戦う為にな。俺は鬼灯ほおずき^{てる}、照、最強に至るために最強を目指している」

『最強…？』

其のワードに反応した奴が被つていた布を取り、顔を顕にした。黒く針山の様に刺々しい黒短髪に整つた顔立ちは男であり、自分よりも幾つか年上だと分かる。

だが、其の男の『瞳』：本来の人間の光彩は『茶か黒』であり、周りは『白』である筈だ。

其れが『真逆』になつてゐる：常人では考えられない筈の状況に、混乱必至の筈。なのに何故か、照には其の瞳を持つ者の事を『知つている』様な気がした。

『最強…最強…『一族』の奴ん中にも、そんな奴が居たかア…』
『一族…其の言葉を『前世』で見聞きした覚えがある。』

「一族…黒い日……」

まさか——言葉を発しようとした瞬間、いきなり男が殴り掛かつてきた。当たりそ
うな所で後ろに飛んで、素早く体勢を立て直し、冷静に心と頭を切り替える。

「知つてるようだな。オレの…いや。オレ達の事を…」

殺気が先程より何十倍にも膨れ上がり、此方を威圧してくる。全身の毛という毛が逆
立ち、照は無意識の内に左手左足左構えを取つていた。

「ほオ…最強目指してるとか言うだけあつて、一丁前に構えてやがる。

良いぜ…来な

舌を出し、挑発を仕掛けてくる。嘗めている…とは思えないが、嘗められている気が
しなくもない、何とも言えぬ氣味悪さを抱えながら、彼は男と激突した。

第三十一話 必殺（ひつさつ）

あらゆる武道家が、必ずといつても過言ではない、己の武が目指す『最終極致』とは何か？

全てを打ち倒し、破壊する『力』か？

否。

全てを征する、圧倒的な『技』か？

否。

どんな状況にも屈しない強靭な『心』か？

否。

其の答えは『一撃必殺』。

どんな場面にも対応し、圧倒的な体格差の相手であろうとも、其の一撃で敵を打ち倒す事。

後に多くの闘技者達が『一撃必殺に相応しい技は何か？』という問い合わせに対し、幾つか

の答えを出した。

ある者は言う……『人類最強の筋力で放つ、剛力無双の逆手突き』と。

ある者は言う……『鋼鉄に等しき四肢を用いた、一突きで絶命に至らしめる貫手』と。

ある者は言う……『比肩する者は誰一人として居ない、最速の縦拳』と。

ある者は言う……『回避不能にして、直撃＝戦闘不能不可避の寸勁』と。

そして……ある者は言う。

『あらゆる受けが意味を成さず、時間差で対象を倒せる、無類にして無双の打撃』と。

* * * * *

〔何時でも来な

「…参る

足先に力を込め、照は踵で地面を蹴り……跳んだ！

「む…？」

ダダダダダダ！と無数の砂埃の柱が上がり、僅かな日の光が舞い上がる埃の中に影を残していた。照の武術の運足の一つにして、草木を跳ねる飛蝗バッタを元にして作り上げ、其の

名を冠した跳躍歩法、蝗跳^{いなごとび}。沖縄での二年間の修行により、練度・精度・速度の全てが桁違いのレベルに到達した其れは、曾て最初に二虎^{にこ}との組手で見た無数に見える火走と同等に近い程度にまでに至つていたのである。

「中々面白れ一技を使うようだ」

『見極めろ!』

読者の皆様には一見、照が体力を無駄に浪費しているように見えるだろう。だが其の実、彼は跳ねる事により、相手を様々角度から観察しているのだ。

己の視点を変えることで、見えないものを見るようにする：沖縄で彼が得た戦い方の一つ。

『見えたツ!』

観察した結果、男の身体の『重心』が僅かながらに左側へ寄っている事に気付いた。其れ即ち、男の右側に付け入る隙があるという事。キュキュ！と爪先を切り返し、地面を蹴り上げ、右側から男へ一気に接近する。

が

『ツ!?』

このまま攻めれば『死ぬ』。そんな直感が脳裏を過り、照は急停止。直ぐ様、後ろへ三回バク転して距離を取った。

「……良い反応だ♪そのまま突っ込んでたら、お前の首が飛んでたとこだぜ」

ギヨロリ！と男の黒眼が此方を見てくる。白歯を見せ、獰猛な肉食獣すら逃げ出すような、悪魔じみた笑みだ。照の保有する前世の記憶の中に、其の笑みと黒眼を持つ者は存在していた。

「やつぱり油断出来ない：『呉一族』相手じやな……」

呉一族：照が転生する前の戦国時代末期よりも『更に前』、飛鳥時代の頃より存在し、裏の世界に生きる傭兵及び暗殺稼業を行う一門の者達を指す。彼等は『金さえ貰えれば』、ありとあらゆる闘争の場に現れ、圧倒的なまでの武力を以て事を成し得る。裏の世界の住人で、多くの者達は呉の名を見聞きするだけでも、恐れ戦き震え上がる。

と：『これだけならば』、彼等一族の聞こえが良いだろう。しかしながら、この一族が本当の意味で恐ろしいのは『金さえ貰えれば』という所にある。例えば、自分達を雇つた者よりも更に金を積む者が現れたなら、彼等は其の者に付き、其の積まれた金で雇い主を殺せと依頼されたなら、何の躊躇も無く雇い主を殺せる。

そんな残忍さとは裏腹に、依頼された仕事は確実に果たす為、名実共に裏の世界では根深く浸透しているのだ。

「やっぱオレ達を知ってるみてーだな」

其の刹那、男がグンと照との間合いを積め。同時に左足が鳩尾目掛けて飛来する。警

戒していたにも関わらず、相手が仕掛けてくる気配を見切れなかつた。蝗跳を使い、咄嗟に後ろへと動く照。

しかし。

「ツツツツツツツツッ!?」

衝撃が迫る。後ろに跳んだにも関わらず、其れを予測していたかのように、爪先での蹴りが鳩尾に入り、照の身体はくの字に曲がりながら飛んで、壁に衝突する。

「ゞほつ……」

口から吐血。壁に激突した瞬間に、照は二虎流 操流・水天ノ型 導水と空手特有の受けを併用して衝撃を壁に逃がしたが、予想以上に大きなダメージを負つてしまつた。

『ハツ!』

男が再び前蹴り、目に見える『力の矢印』は真っ直ぐに、自分の顔を狙つていた。

「うおあ!?」

其の剛脚が当たる前に、何とか横に転じて回避するも、間髪入れずに右足の中段回し蹴りが飛来。額を掠り、皮膚が横に切れて出血する。

「どうした? 悪じ気付いたか?」

轟ツ!と男の左足の蹴りが照の右太腿に直撃。同時に大腿骨の一部がビキリ……と

鈍い音を立てた。

「痛ツ”ツ”ツ!?”

思わず表情が歪んでしまう。全く本気を出していない状態で、自分が不壊を使つていたにも関わらず、其れを貫く鋭い一撃だ。これを諸に急所に食らえば、自分は確実に戦闘不能に陥る事を否応なしに理解せざるを得ない。

『このままじゃ負ける……』

だが、このまま逃げても状況は変わらない。男の事だ、自分が逃げた場合に行う行動も考へてゐる筈に違ひない。

『なら、ここから『勝つ』事を考へろ！其の為にどうするか考へろ！』

脳裏に甦る様々な出来事：沢山の経験と修行、そして二人の師から教わり得た、多くの技。其れを活かせなければ、何の為の二年だつたのか分からなくなつてしまふ。

『俺の『武』を！得てきた『物』を！』

照の動きが、突如として止まる。そして——彼は目を閉じた。

「ほお……」

好機到来。男の左足が振り抜かれる。

其の技は中段蹴りの要領で振るわれ、人体の急所の一つである肝臓を蹴り潰す。

其の軌道はまるで、夜闇に浮かび上がり、細く鋭い曲線を描く三日月に準^{なぞら}え、このよ

うに命されている。

『三日月蹴り』：空手の大技は、武術に優れた者が振るえば必殺の一撃と成り、呉一族が繰り出せば、其の一閃は死神の鎌と変わる。

一撃が照の肝臓を壊し、この戦いは男の勝利で終わる。

『筈だった』。

パキン!!

「……………は？」

男が初めて困惑の色を示す。自分の三日月蹴りは確かに、照の脇腹を蹴り抜いた筈だつた。

だが、実際は違う。自分の左足の爪が割れ、爪先から出血。更には薬指と小指以外が在らぬ方向に曲がつていたのだ。

「反乗、成功」

霸界流 反乗。男の三日月蹴りを受ける刹那、照が繰り出した返し手の技である。この技は相手の攻撃を予測し、直撃箇所にある自身の筋肉の一部を膨張・硬化させ、其の衝撃を倍以上にして弾き返すという強力な技。

しかし反乗には、膨張させた筋肉以外が弛緩する上にタイミングを間違えれば大ダメージを負いかねない重大な欠点があるので、照は相手の攻撃の軌道を『見ず』、『直感』を用いる事で、威力を發揮する瞬間を逃さずに使えるようにしたのだ。

『いけっ!!』

弾かれた衝撃でぐらついた男。蛇縫へびぬいで一気に動き、照の一撃が炸裂する。

其の打撃は、筋肉の伸縮により発生した運動エネルギーを伝導させる『技』。拳や手、足や体を徹して対象の内側に其のエネルギーを『流し込む』。

皮膚から肉へ、或いは皮膚から肉を通つて骨へ：そうして浸透した『力』が時間差を

以て、対象の『芯』たる部分に到達し、ポップコーンのように『爆ぜる』。

霸界流の『基礎』にして『極意』たる、其の技の名を彼はこう命名している。

釘撃くぎうち…と。

「オラア！」

ゴギン！と鈍い音が鳴る。男の顎に照の渾身の撃が入った。

「ぐつ…！このガ…！」

殴られた男は反撃に転じようとした。だが其の直後、自分の脳が突然大きく、其れも今まで感じたことの無い揺れを味わう。例えるなら：『耳栓を付けず、巨大な鐘楼の音を鼓膜の内側で直接聴かされた』ような、そんな筆舌し難い物であった。

「お、おお…おおお…！」

ガンガンと頭に衝撃が鳴り響き、脳が大きく揺れ続け、目や鼻から血が流れ出た。

釘撃には、幾つかの『型』が存在している。

衝撃伝導が最速の『迅じん』。

最強威力を誇る『剛』。

連續で衝撃を叩き付ける『烈』。

衝撃伝導最大範囲の『圧』。

衝撃が一点に留まり続ける『淀』。

最銳の衝撃を持つ『鋭』。

衝撃が常に響き続ける『鳴』。

そして釘撃の型は、二～三種類『組み合わせる』事により『無限の可能性』を成す。

照が放つた釘撃は最速伝導の『迅』に、留まる『淀』と、そして響く『鳴』の三種を組み合わせた『釘撃・迅淀鳴』：頸に与えられた力は最速で脳に到達し、爆ぜた衝撃が淀の特性で留まり、其所に鳴の力で響き続ける、衝撃の爆音地帯。

其れ即ち、頸への被弾＝脳震盪誘発不可避の一撃だつた。

「か、がが…！」く、そ…や——」

まだ戦うつもりでいる男だが、未知の衝撃に揺さぶれ続けた脳は、其の意識の糸を離し掛けていた。

無理もない：呉一族であつたとして、彼等も『人間』である。どんなに強靭な体を得ても、どんなに卓越した武術を身に付けても、脳震盪を起こされでは耐えきれる訳がないのだ。

「…貴方は強い」

膝を付き、両手を地面に付けた男に対し、照は言う。

「もし最初から本気で自分を殺すつもりだつたならば、俺は手も足も出せず、蹂躪されていたでしよう。」

実際、俺も死ぬかもと思つてしまつた」

そうして彼は、男の前で深く頭を下げる。

「ありがとうございました。貴方のお陰で、俺はもつと強くなれます」

「こ……の、や……ろ……ッオ——」

男の意識は此所で途切れた。同時に男にとつて照との戦いが自身の人生において『初めての敗北』となる。

そして…この出来事が、照達に大きな波乱をもたらす事になる等と、誰も知る由もなかつたのであつた…。

第三十二話 拳闘（けんとう）

「…………ふう、痛つててて…」

呉一族の男との死闘を終えた照は戦いの最中に蹴られ、ヒビが入つたであろう右太腿を擦りながら、男が被つていた布を破き、額と太腿に巻き付けつつ呼吸を調べ、裏路地を後退した。

「反省も多い：修行しなくちゃだな」

十鬼蛇区のレベルの高さは半端なものではなかつた。あの呉の男にせよ、この区域には此の位強い奴等がゴロゴロと、当たり前のように居るだろう。二年間の修行で強くなつたと自覚していたが、其の予想を裏切るように、敵の強さもまた、己の思考の範疇を軽々と越えていた。

最強に至る為に、今よりずっと、更に強くならねばならない。まずは此の場所で、当たり前に勝てる程にならなければならぬ。

「照、大丈夫か?」

裏路地から出た辺りで、涼と二虎さんと合流する。頭に巻いていた布が赤くなつているのを見て心配する涼と、対照的に不敵な笑みを浮かべていた二虎に、先程までの戦い

と其の相手であつた呉一族の事を話す。

「へえ…呉の男を。そんで? ソイツは強かつたか?」

話を聴き終えた二虎さんが、興味を示してきた。二虎さんは修行時代、何度も呉一族と戦つた事があると数年前に聞いていた。其の強さを自身の身を以て知つてゐるからこそ、問い合わせたのだろう。

「強かつたどころじゃないですよ…。あの人、全く本気を出してませんでした。何と言ふか:『遊ばれてた』、そんな感じです。

其のお陰で、突き入る隙を見つけられましたけど」

「…マジかよ」

共に修行を重ね、幾度と組手を行つてきた涼。照の力をよく理解していただけに、彼が遊ばれてたという事実が、にわかに信じ難つた。

「ま、これが此の十鬼蛇区で生き残つてきた奴等の実力つて事だ。二年間の修行で、少し強くなつたつもりでいるんならア?」

——お前等、間違いなく『死ぬぞ』?」

ドスの聞いた声で、二虎さんは改めて言つてきた。

涼に対しては『警告』を。

俺に対しては『精進』を。

各々、肝に命じるように。

「はい。二虎さん」

「分かつた、氣を付ける。」

「よし……んじや、涼。次はお前の番だ。」

お前の眼で、戦う相手を見極めてみな

* * * * *

「おい、クソガキ。テメエは誰に、喧嘩吹っ掛けたか分かつてんのか？オオ？」

十数分後、人気の無い暗がりにおいて、涼は薄い上着と青ジーパンを身に付け、耳にピアスを通した身長197cmはあろう、細身の男と対峙する。

男の左腕には、腕に巻き付くように竜を模した刺青が彫り込まれ、今にも此方を食い殺さんとばかりに大きな口を開けていた。

「へつ。弱いヤツ程、よく吠えるつてさ。来いよノッポ」

男の脅迫に等しい其れを前に、涼も挑発を以て返す。同時にブチッと、男の中で何かが音を立てて吹つ切れる。

『クソガキがあ！ブツ殺す！』

轟ツ!!と風が鳴り、男の巨体が迫り来る。

「やつてみろ…！」

オーソドックスな構えを取りつつ、涼は小刻みに跳躍し、出方を見る。

「オラア！」

男の初手は左のストレート。前傾姿勢で繰り出した其れは、涼の顔面を狙っている。

『…………見える！』

ストレートを右側に少し動いて回避。男が前に傾くのに合わせて、涼は左腕を自らの左手で掴んで、音も無く跳ねた。

身体を捻り、捻りにより産み出されたエネルギーを、伸縮されたバネが弾けるように、右脚に乗せて、回転蹴りとして打ち放——『ドゴツ!!』

「…ゴホツ!!」

「テメエのやりそなこつた、オレにはお見通しなんだよ」

男の右フックが涼の腹部に突き刺さっていた。口から吐血し、地面に崩れ落ちてゆく身体。しかし、其の落下は止められる。右手で髪を掴まれ、宙ぶらりんにさせられたのだ。

「直ぐには殺さねえ。たっぷりとオレの力を味あわせてやる」

『くそッ！…今、この『何で避けられた』…!? 初見で躱わせたヤツはそう居ない蹴りなのに…』

髪をひつ掴まれた涼の顔面に、男の左ストレートが炸裂。不壊を掛けた右腕を差し込むも、ガードごと押し込まれ、其れによつて髪が千切れ、地面を数回バウンド。

右腕は青く腫れ上がり、右頬にも少なからず痣が出来た涼。立ち上がるも、彼の意識は先の攻撃で混濁し、視界がぼやけていた。

もし、先のストレートをまともに受けていたなら、確実に終わっていただろう。だが男は涼を休ませまいと、再びコンパクトかつスピーディーなストレートを連発し始めた。

…此所で読者の皆様の中に、幾人か疑問を抱いた方が居ると思われる。何故『速撃を得意とし、更には初見ではそう防げない涼の跳躍回転蹴りを、男が躱わせたのか?』という疑問を。

其の答えは、男は三年前までミドル級の元プロボクサーであり、半年前まで拳願仕合で馳せていた闘技者であつたからだ。

ボクサーとしての成績は53勝4敗。荒くれなバトルスタイルとは裏腹に、卓越した立ち回りで試合をコントロールし、相手を圧倒する姿は多くの観客を魅了。一時期は

『ミドル級統一王者も狙える逸材』とまで言われていたが、突然の引退宣言を発表。

表世界のボクシングでは満足出来なかつた彼は、自分より強い奴と出会う為に裏世界の拳願仕合に足を踏み入れた。

拳願仕合では、ボクサーとして培つた技量を生かし、相手の攻撃に合わせたカウンターを放ち、相手の顔面をタコ殴りにして倒すという、元々あつた荒々しい戦い方がより目立つ闘技者となつた。

相手を屠り、血が噴き出しそうが殴る事を止めず、其の結果、自らの拳と顔を敵の血で真つ赤に染める姿から、彼は『紅蓮兎スカラーラビット』と呼ばれるようになる。

だが半年前、ある仕合において彼は『牙きば』と呼ばれる最強格の闘技者を相手に完敗を決した。自身よりも圧倒的な速度と馬力に戦いの主導権を掌握され、殆ど何も出来ずに…否。

何もさせて貰えず、敗れ去つたのだ。

自分を見つめ直す為。

牙への復讐リベンジを果たす為。

彼は予てより聞いていた無法地帯・中でも、一際危険度の高い十鬼蛇区へ赴き、一人戦つてきたのである。

『オラオラオラオラ！』

そんな過去を持つ男が繰り出すストレート。プロボクサーの放つ其れは、個々の才能やスタイルによつて差は出るが、平均して時速 40 km/h とも言われている。

だが、男が放つてくるストレートの速度は、それよりも速い時速 60 km/h 。実に $1\cdot5$ 倍のスピードを誇る。更に対峙する者にとって、ボクサーの放つストレートは、涼が得意とする縦拳と同様に、体感以上の速度を相手に認知させるのだ。

『……速えッ——!!』

相手にペースを取られ、涼は敵の速拳を躊躇わずに精一杯になる。自分よりもずっと

速く、ずっと鋭く、格上の拳を持つ男。

『…………『不思議』だ』

焦る気持ちと裏腹に、涼の頭は今まで以上に冴えていた。この感覺を自分は良く知つてゐる。

『照……お前は何時も、強敵と戦う時。こんな感情を抱いてたのか……』

『最強に至る為に、最強を目指す』：鬼灯 照がよく言つてゐる言葉。最強に手を伸ばし続け、其の為なら敗北必至の格上相手にすら挑みにいく。

無謀で、真っ直ぐで、そんな姿が輝いて見えた。

『照。俺も……』

お前と……『同じ』になりたいッ！

『オラア！』

男の左ストレートが飛来する。目を見開き、涼の身体が左に揺れた。
直後、ドスン！と一際大きく重い音が鳴つた。

「…ダ）つ？！」

男の首根に涼の右縦拳が突き刺さっていたのだ。

「こ、ゴイ・ヅ！」

「…照。俺は、お前と同じ・同じ『そんざい求道者』になる！」

右腕に力を込めて、沖縄で学び取った右瓜拳が、刺さった首根から顎部へと炸裂した。

第三十三話 雄叫（おたけび）

一年前、黒木邸にて：――

「そこまで」

大部屋に響く、黒木の声。彼が見つめる視線の先には、照と涼が空手着に袖を通して、先程まで組手を行っていた。

涼の顔や身体には、無数の青黒い痣が多数。

対する照は、腕や額、胴着には無数の切り傷が出来ている。

〔勝者、鬼灯 照。以上〕

〔ありがとうございました〕

本日の組手を制したのは照。互いに頭を下げ、それまでの緊迫した鬪気を解き、深い息を吐く。

〔はあ：また負けたあ：〕

〔いやいや涼君、昨日よりはずつと強くなつてたよ〕

疲労でへたりこむ涼に、照も「スースーハーハ」と特殊なリズムで呼吸を行いつつ、座り対面して言った。

現在、照が行つてゐるこの呼吸。霸界流はかいりゆう 空嵐くうらんと呼ばれる呼吸法で、空氣中の酸素の補給並びに体内へ効率良く循環させる事を念頭にしたものだ。

と…

「なんで俺、照に勝てないんだろう…？」

ほろりと弱音が溢れた。涼にしては珍しい其れに、照はギョッと彼の顔を見る。

「何故勝てないか」

その時、黒木が不意にそう言い放つ。涼が視線を向けると、一步…また一步と、黒木が歩み寄ってきた。

「照と同体格、同体重に近いお前が何故負けているのか。其れは『照に有つて』、『お前には無い』物が、其の差を作つている」

「俺に無くて…照に有るもの…？」

「其の先是、お前自身で考えろ」と言い残し、中断して砂入りの大瓶を指先で持ち上げ固定するという部位鍛練を再開する。

涼にとつて其の一言が、彼を大きく変えることになつた…。

* * * * *

* * * * *

時は戻り、現在

『俺は……同じ『求道者』になる!』

そんざい

頸部に刺さった右拳が曲線を描き、男の頸に右瓜拳が直撃する
が、急所に二撃貰つて尚、男は倒れず。

「どつ……んごの、ガキイ!」

復讐とばかりに身長差を活かす、上段からの左ブローを放つ。

この技は、男がボクサー時代に相手からアッパーを貰い、KO敗けの経験から編み出した技：仰け反りから復帰する際の運動エネルギーを拳速に付与し、上半身の全体重を乗せて、敵に激突させに行く。

しかし。

それまで拳の鋒に居た筈の涼の姿が、直撃の瞬間、まるで『陽炎』のように、フツ：と眼前から消えたのである。

「!? 何処いつ『ズン!』————が……!」

反応とほぼ同時、左脇腹に鋭い痛みが走る。

左腕の下：涼の姿は其処に在つた。彼がカウンターとして放つた右中段突きが、男の肝臓付近に直撃していたのだ。

涼が使用したのは二虎流・火天ノ型にある幽歩と呼ばれる歩法であり、照が沖縄で習得した狐影流・瞬またたきと同様、相手の死角へ一瞬で入る事により、あたかも攻撃が擦り付いたように見せる技である。

だが。

『コイツ、まだ倒れねえ……』

三度。首に一度、頸に一度、そして肝臓に一度。

これだけやつてなお、男を戦闘不能に出来ていない。

「…………らあっ！」

死神の鎌の如く、曲線を描いた右フック。涼は自身の左腕を差し込みつつ、脱力と共に右に飛ぶ。

殴られた衝撃で、少年の身体は二か三度、宙で回つたが、ダメージと衝撃を最小限に留める事に成功。

「オラッ！」

着地、同時に一気に接近し、男の首に左縦拳が入る。此れは二虎流の中でも『最速の攻撃速度』を誇り、金剛ノ型と火天ノ型の複合技である、瞬鉄・碎と呼ばれる技。

本来はカウンターとして使うのがベストでは有るが、火天ノ型に適性が有り、かつ火天ノ型の極きわみたる縮地しづくちを身に付けた涼の瞬鉄は、速く。そして鋭い。

「ぐふつ……糞、野郎……！」

喉から空気が漏れる。瞬鉄・碎の直撃が気道を圧迫。膝が揺らぎ、動きが鈍くなる。

現役闘技者と言えど、急所を突かれれば、少なからず影響が現れる。況してや四度、人體の急所を狙われ、全て直撃した。

此所までよく、顔に出さなかつた事に感心する。

『此所で畳み掛けて終わりにするツ……!!』

涼も決めるべきだと銘打つた。拳速は相手が上、なれば『別の手変化球』でやるしかない。

両腕を脱力し、両拳を軽く。

柔らかい物を包んで握るように構え。

風を切つて、鞭の如く振り抜いた。

バチイイイ！

「?」

左肩に当たり、肉の一部が小さく、確實に凹んだ。

男の驚愕で意識を割かれた直後、二度・三度・四度と振るわれた腕が、彼の脳天と顎を次々に撃ち抜いてゆく。

涼が自ら考え、沖縄の修行の中で生み出した、二虎流の新たな体系。

其れは本来なら、複合する事が出来ないとされる、操流ノ型と金剛ノ型の一体形。ゆうぜう

通常は軟らかく、しなやかに。だが直撃する瞬間のみ硬化し、それにより肉を潰し、骨を碎く技。

変幻自在にして変則的。故に対処は困難を極める。

其の名を——鋼打。はがねうち

「ぐ……が……ぐ……！」

まるで鎖鎌の重しを連続で殴られ続け、男の意識は着実に、確実に失われ初めていた。何とか反撃しようとジャブを繰り出すも、先程と同じように目の前から消えられ、直後に頬をひつ叩かれ、縦拳が入った場所を殴られる。

「ぐ、この……ッ！糞野郎があああああああ！！」

怨嗟の声を上げた。まだ十代程度の、其れも名も知らぬ子供相手に、闘技者たる自分が一方的なまでにやられている事実を認めたくなかったのだ。

「これで終わりだああああ！」

涼の血反吐を吐くような、切迫した叫びと共に放たれるは、左上段回し蹴り。頬と顎を蹴り抜かれ、男の意識はこの瞬間をもって途切れる。

涼は其処から、回転蹴りによつて産み出された運動エネルギーを殺すことなく加速させ、蹴り終えた左足で地面を踏み込み、腰と共に捻つた。

そうして生まれた回転を右足に伝導し、勢いそのまま、倒れゆく男の顔面を、自身の

全体重を乗せて、踏み潰したのである。

この日、決め手となつたのは操流と火天の二つの型を融合した、不知火しらぬいと呼ばれる足技だつた。

「はあ……！はあ……！はあ……！」

うおおお…………！うおおお!!!!」

渾身の不知火フイニツシュム^{ムーム}により、動かなくなつた男を見て、少年は高らかに、誇るように、大きな声で叫ぶ。

強敵との戦いに勝利し、涼は今までに無い達成感や爽快感を得た。彼の勝利を謳う雄叫びは、十鬼蛇区中に響き渡る。

* * * * *

「お疲れ、涼」

激闘を終え、殴られた腹部を擦りながら歩く涼を、照と二虎が出迎える。

「んじや、感想を聞こうか？」

「…修行しないと駄目だつて分かつた。今よりもっと強くならないと、十鬼蛇区で生きていけないことも」

自分より遙かに、そしてずっと強い奴等が居た。己の見解が何れ程小さく、ちっぽけな物かを知つた。照と同じ求道者になると決めた以上、今に満足してはいられない。「…よし。じゃあ次戦、と言いたいトコだが…お前の様子じや大怪我しかねそうだ。

今日は切り上げる事にする。良いな？」

二虎の言葉に「はい」と、ほぼ同時に答え、三人は自分達の居場所へと帰る。

戦いの傷が痛み、少年達の足取りを重くするだろう。

だが、この痛みと経験が彼等の血肉となり、更なる飛躍を促してくれる。今よりも強く、さらなる高みへ。

求道者となつた二人の戦いは、まだ始まつたばかりだ。

* * * * *

高さ50mは優に有ろう、五階建ての廃ビルが建つてゐる。

嘗ては、とある組織が拠点として使用していた物だつたが、十鬼蛇区内で別の組織との闘争に敗れ、夜逃げした結果、人一人として立ち寄らない閑散とした場所へと成り果てた。……ほんの『数カ月前』までは。

ガジュ…ガジュ…。モチヤモチヤ…。

逢魔が時：午後五時から六時の夕闇が濃くなる時間帯。此の廃ビルから、此の時間になると『何者』かの『咀嚼音』が微かに響くという。

ミチリ…ブチン！…モキュモキュ…。

ビルの四階：入口から北東の角で、布地の袋に入れた食物を漁り、噛り付く、一人の少年が居た。

袖無しの薄汚れた白シャツに、横に幾つか小さなポケットが付いた短パンを履き。後ろには留め具を外した、二本のナイフホルダーをぶら下げていた。

何よりも、其の少年の目付は野生の肉食動物の眼と同じ、鋭く獲物を見つめ、向ける

視線^{モノ}と同じであつた。ボサボサでクセのある髪と合わさり、まるで子獅子のようにも見える。

「……………」

林檎を噛り、肉を千切り、水を流し込む。

今日を生きる為、少年は自分の定めたナワバリで、狩りをする。

彼には名前が無い。己を証明するものを持たない。

そんな彼が、照達と出逢い。そして己という存在を確立する事になるのだが……。其れはまだ、少し先の話になる。

第三十四話 共闘（き）ようとう）

拝啓、黒木 玄斎殿。平良 嶽山師匠。

如何御過ごしで御座いましょうか？

中の危険地帯、十鬼蛇区で実戦修行を開始してから早いもので三ヶ月が経過しました。私も涼も、十鬼蛇区に生きる者達の強さに毎回振り回されて、毎日ヘトヘト。

強敵との連戦で、私達はもう何回死に掛けているか分かりません。それでも負けません。一回一回の戦いを大事に、自らを成長させていきます。

……ところで、私は今どうしているかと言いますと。

「～～～♪」

小さな少年に懐かれて、自分を追い掛けるように後ろを付いてきています。
どうしてこうなつたのか？少し時間を戻して話をします。

* * * * *

* * * * *

八時間前、十鬼蛇区・某所……：

『えええツ!? お金が底を着いた!』

焼き魚と雑穀米、そして味噌汁が並ぶ食卓。朝御飯を食す前、二虎から唐突に「今日の飯で金が無くなつちまつた」と告げられたのだ。

「いやーな、本当ならもうちつとばかり持つ筈だつたんだが、思いの外無くなるのが早かつたわ」

「なはは」と、何時ものちやかし気味な口調で笑う二虎。其の右隣で「おかしい：何でこんなに早く金が無くなるんだ……?」と呟きながら、茶碗に山のようにこんもりと盛り込んだ雑穀米をモリモリ食している照。そんな彼に、涼と二虎の冷たい視線が向けられる。

……実はこの三人の中で最も食費を使っているのが、何を隠そう照本人なのだ。

元々燃費は其処まで良いとは言えなかつた彼は、十鬼蛇区での強敵達との戦いの中で、自身の筋力と体力がまだまだ足らない事を痛感、食事を通し増強せんと画策。

結果として彼の作戦は成功し、沖縄での修行後よりも筋肉が育ち、衣服の下からでも

くつきりと見える迄に育つたのである。

が、筋肉が成長した代償として彼は一回の戦闘で失った体力を取り戻したり、普段の生活で使用するエネルギーを補充するために、より多くの食事を取らねばならなくなったり、其れが積み重なった結果、今回の出来事が起きたのである。

「…涼君涼君。今回の一件の犯人が何か言つてゐるな」

「二虎さん二虎さん。俺達の中で一番の大食らいが自分じやないつて顔してますね」
二人がヒソヒソ声で照を愚痴る。漸く彼はこの事態が自分によつて起きたことを理解するに至つた。

「……もしかして、俺が原因?」

『正解だよ、馬鹿野郎』

「何で同時!?」

「はい、そうゆう訳で」と二虎は両手を三度叩きつつ、照と涼に向けてこう言つた。

「俺は暫く働き口を探しに行く。其の間、お前等にちょっとした『宿題』を出すぜ」
「宿題…」

「つて何?」

「宿題ってのは、これを決められた時までにやつておかないといけないつう物、要するに課題だ」

左手で涼を、右手で照を、二虎は指差し告げたのである。

「明日から一ヶ月で、お前等二人には俺が言う十鬼蛇区内の猛者共を倒してこい。手段は問わねえ。不意討ち、武器使用、何だつてありだ。泥臭くても良い、意地汚くても良い。最終的に勝ちや良い。

それじゃ言つてくれ？」

* * * * *

二時間前：十鬼蛇区内・某所、裏路地

「ハアツ……ハアツ……ン、まだまだ…もつと強くならなくちゃな……」

血と汗が混じった液を自分の舌で舐め取り、己の左手を握つては開く。彼の後ろには、コンクリートの壁に大の字でめり込み、時折痙攣を起こす男が一人。顔はダラリと力無く俯き、ポタポタと血を滴り落としている。

この男は二虎が照と涼に、彼等が宿題として倒すべき相手として指定した人物であり、この近辺では指折りの実力者。

照も苦戦こそ強いられたが、あの吳一族の男の程の実力では無かつた為、大怪我を負うことは無く勝利出来た。

『…少しずつだけど『分かつてきた』。『強い奴』と『弱い奴』の区別つて物が』
照には二虎流の奥義を習得した副産物として、あらゆる力の流れを『矢印』として見る事が出来るようになつてゐる。涼や自分より格上の相手が繰り出す、自分の動体視力で追いつかない攻撃以外ならば、大抵の攻撃は見切り、躊躇する事が可能だ。

そうして矢印を見続けるなかで、各々の身体から発せられる矢印が、人によつて大小よりけりである事を知る。

小さな矢印を持つ者は自分が思つていたよりも弱い事が多く、逆に大きな矢印を持つ者は本当に強くて、倒すのに労を要した。

今回の相手からは、大きな矢印を身体から発していたので、挑発を仕掛けて戦つたところ、かなりの強さを持つていた。何度も攻撃を食らい、地面に叩き付けられながら、最後は自身の流派である霸壠流はかりりゅう 槍撃・剛迅ごうじんを男の鳩尾に蹴り入れて勝利。現在の状況となつたのだ。

「ふう…別の場所に移動しながら、次の相手を探そう。…………あ」
腕をグルングルン回しながら、何かを思い出したように倒した男に近寄り、懷を漁り出した。

「うん…何にもないなあ…」

金目の物が見付からず、首を傾げつつも、心の何処で安心している自分がいる。

「…よし、次に行こう」

気持ちを切り替えた照は、裏路地を抜けて、小さな通りへ躍り出る。

其の時、照の周りをフワリと風が通り、何者かの影が走り抜けて行つた。

「お？」

照は見た。自分より頭一つ小さな背丈で、獅子のようなボサボサの髪を揺らし、走つて行く少年の姿を。

そして同時に彼の身体から発せられる矢印が、今まで見てきた者達の中でも、五指に入る大きさであることを。

「……戦いてえ！」

全身の毛が逆立つ。強者との闘争を求める心が、彼を突き動かした。

直後、照の身体は少年を追い、駆け出したのである。

* * * * *

其の日は少年にとつて、大切な日だつた。

自分が予てより定めていた、ナワバリに幾人の人間達が進行、制圧しようとしてきた。自分に断り無く、我が物顔でやつて来た連中を少年は許しはしない。数日間の見回りで敵の本拠地は割り出せた。後は奴等に報復し、追い返すのみ。

後々、大多数で来るなら出向いて潰す手間が省けて済むだけの事だ。

何も問題はない――『筈だった』。

自分の後ろから、何かが。其れも縦横無尽に『飛び跳ねながら』、自分を追跡してきた。絶妙な距離感と絶妙な高さを取り、まるで鳥のように自分を観察している。

正体は気になるが、この機を逃せば次まで相応の時間が掛かる。故に気に掛けず、一気に目的地に向かつた。

目的の廃棄された建物に到着し、壁に耳を当てるに内側から複数人の声が響く。数は五人にも満たない、声調から油断しきつている。

腰のホルスターから二振りの使い馴れたナイフを引き抜き、逆手に持ちつつ構え、内部に突入した。

「ん？」

突入場所に一番近かつた男の顔面へ、鋭利な縦一閃が迸る。（ほどぼし） 血飛沫が上がり、男が悲

鳴と共に悶絶。

「な…」

すかさず近くの敵にナイフを投擲。掌に刺さり、痛みで脚が止まつた所に飛び付き、ナイフを引き抜いて地面に蹴り倒す。

複数同時に相手をすれば、確実にやられる。各個撃破が一番だと自分は知つている。

「敵襲！ 敵襲！」

だが、この日。不運があるとするなら、自分が予想していたよりも、建物に居た敵の数が多かつた事だろう。階段を下り、向こう側から次々に敵がやつてきて、瞬く間に囮まれる。

「餓鬼が、家のもんに手出してタダで済むと思うたか？ アア！」

耳障りな声が響く。状況が不味い。捕まつたら待つているのは確実な死だけだ。

「お前等、コイツも次いで解体し『ミシミシ…ベキ…ベキリ……』…あ？」

『うおわああああああああああああああ!!!!』

天井が割れて、何かが落ちてきた。砂埃が上がり、其の中からムクリと影が立ち上がる。

「あいてて…穴空くなんて聞いてないぞ、たく…………あ！」

キヨロキヨロと見渡したソイツを見て、自分は嘗て無い衝撃を受けた。

鍛えられた身体。

大人に負けない太い腕。
大地を踏む頑強そうな脚。

スツと伸びた背筋によつて、筋肉質の体つきはより強調され。

そして何よりも。纏う闘気がそんじよそこらの奴等の比じやない。

圧倒的：強者の姿。

「見付けた！君、俺と戦おう！」

そんな強者が、自分に視線を合わせて屈んで、突然訳がわからない事を言つてきた。

何言つてんだコイツ。

「おい、お前。コイツらの保護者か兄弟か？」

「ん？アンタ等、誰？」

ブチッと何かが切れる音。同時に、敵の一人が手に持つていた斧を振り上げてくる。

『ブッ殺す！』

轟ツ！と風が吹く。下ろされた鉄の塊が強者の頭を力ちわ『バギヤ!!!!』……『れな

かつた』。

「…………は？」

「斧か。刃物を自分で割つたのは『初めて』……かな」

ヒビが走り、斧の刃先が砕け落ちた。両手の拳は硬く握られ、白い湯気が立っている。

一体何が起きればそうなるのか？

「さてと……『君達』はどうする？」

達？其の疑問を浮かべた時、ソイツは指先で後ろを指した。視線をやると、其処には瘦せ細つた全裸の、自分と同じ年程の『少年』が、今の状況に驚いた表情で此方を見ていた。

「こうして巻き込まれたのも何かの御縁だ。此所から脱出と洒落込むつもりだけど……君達はどうする？」

気に食わないしムカつくが、此所でこのまま死ぬのだけは御免だつた。

「…………名前」

何時以来だろう。久しぶりに自分の口で、自分の言葉で話したのは。

「照。鬼灯 照だ」

「……ホオズキ テル、か」

力チャリとナイフを構え直す。

生きる為に、此所はコイツと共に戦う。

「よし。

じやあ……行こうぜ！」

拳を握り締め、敵の群団に斬り込んでいった。

これが鬼灯 照にとつて、後に『阿修羅』の異名を持ち、凄まじい実力で最高峰の闘技者の人と成った十鬼蛇王馬との初めての共闘であり。

そして同時に、もう一人の少年で照や涼、王馬達に比肩し得る存在として『美獸王』の二つ名を得る桐生 刹那との初めての邂逅でもあつたのだ。

第三十五話 刹那（せつな）

産まれた時から、僕は愛されていなかつた。

物心付いた頃から、お母さんは僕を疫病神だと言い、罵り、毎日毎日ぶつた。最初は痛いと思つていた暴力も、其れが日常茶飯事になつて、僕は其れを当たり前と考えるようなつた。

そうして長く暴力を振るわれ続けた結果、僕は自分自身を罪深い人間だと考える。罪を抱え、此の世に産まれた者は、生きている限り、其の罪から決して逃れる事が出来ない事。

其の罪は己の死を以て、初めて浄化される事。

そして其の死を与える者は己以外の人間でなければならない事。

そうして十一歳になつたある日、見知らぬ大人達が僕とお母さんを誘拐して、中と呼ばれる無法地帯の一つ『四亀区』にある、大人達が使つてゐる廃墟に監禁した。

彼等に、拉致監禁を依頼したのは当時は分からなかつた。

お母さんは昨日、彼等の手で殺された。そうして今日、僕は死ぬ筈だつた。此の世に未練は無かつたし、漸く死ねると思えば、自分の運命を受け入れる事も簡単だつた。

「――――」

「………」

解体が始まる。

これで僕は終わると。

そう思っていた。

「ぐ！」

「――――!？」

悲鳴。怒号。顔を上げれば、大人達が誰かと戦っている。其の光景の中心に居た存在に、僕は衝撃を受けた。

自分と同じくらいの少年が、二振りのナイフを握つて、複数の大人を相手に立ち回つていて。荒々しく、野生を解放した肉食獣の如き、渴きに満ちた視線を見た瞬間、僕は一つの確信を得た。

此の少年が：否、彼こそが。僕を裁き、殺してくれる神であると。

「どうした!!」

「敵だ！ いけ、逃がすなよ！」

神を包囲するように、奴等は陣を組み、密集する。

神は数の多さに手を止めている。

そんな事、有り得てはいけない。

神は、どんな苦境にさえ屈する事はない。

神は、罪人を残酷に殺せる筈だ。

神は……！

『うわああああああああ!?』

突如、天井が割れて何かが落ちてきた。砂煙が上ぼる中、ムクリと地面から立ち上がり

がつた。

「いででで…まさか穴空くなんて聞いてないぞ…たく…あ！」

見付けた！ 君、俺と戦おう！

かれ
神に話し掛ける、もう一人の人。

一目見て、僕は彼を理解した。

かれ
此の人は、神より『強い』事を。

大人達相手に怖じ気付く事なく、振るわれた斧を拳で叩き碎いた。圧倒的な力、だけ

ど：彼から感じたのは『ふんわりとした優しい』物。
か
神が罪人を裁き、殺すのならば。

この人は罪人さえ赦し、救い上げる、優しい神。

「さて……『君達』はどうする？」

此所で出逢つたのも、何かの御縁だ。俺は此所から脱出と洒落込むつもりだけど

……君達はどうする？」

君達……神と僕の事を言つている。

「…………名前、お前の名前」

「……照。鬼灯 照」

「ホオズキ テル……か」

神と神が。此の場所からの脱出の為に手を組み、敵を睨む。
此の光景を、僕は一生忘れる事はない。

「よし……じゃあ、行こうぜ！」

敵の大群に二人が突貫していった。

殴り飛ばし、切り裂き、撃ち沈め、投擲し。

一人、また一人と倒して行く。

これが神の力だと、僕はただただ見つめるしか出来なかつた……。

其れ程に、強く……本当に強かつた。

* * * * *

* * * *

* * *

*

*

「おりやああああ！」

「ガキ三匹、さつさと解体すぞ！」

迫る男達を前に、少年二人は体勢を低くし駆け出す。

『此所だ！』

敵全体の動き、力の流れを見ながら、照は蝗跳いなま飛びで宙に跳んだ。

『蝗跳…今まで回避や運足の為『だけ』に使っていた技。だけど、其れだけじゃ『駄目』だ。狭い場所、大多数の相手…本来の持ち味が活かせない場合だつてある。

それなら、『こうする』！』

飛び跳ね、近く敵に狙いを定めた照は自身の爪先を、其の者の肩に乗せ。踵で押し倒し、再び飛び上がつたのである。

「なッ…………ぶげえ!?」

「あのガキ、跳んでやが：あべし！」

「ぬがあ!?」

踏まれ、踏み付けられた男達は、次々と地面や壁にめり込み、激突してゆく。そして立ち上がるこうとした所に、もう一人の少年がナイフで腕や脚の腱を切り裂き、行動不能に陥れていく。

『…コイツ、俺のナイフが当たりやすい位置に『落として』やがる……!』

照自身、意図してやつたのかは不明ではあるものの、蝗跳の新しい戦い方を身に付け、実行した。

そしてもう一人の少年は照の動きに合わされているかのように、敵を次々と制圧していく。

「くそが！ガキ二人に何モタついてやがる！」

「だ、だけどよお！コイツらつええぞ…！」

子供二人に頭数で勝っていた筈の状況が、一気に傾けられ、彼等は二人に対しても恐怖を抱かずにはいられなかつた。

ただの打撃を受けただけで、ぶつつりと糸を切られた人形のように気絶させられ、野生を剥き出しにした斬撃に裂かれて、赤に染まり地に落ちる。自分達では歯が立たない。状況的不利を否応なしに理解し、逃げ出さんとする者が現れ始めた。

「あ、おい！待て！」

「てめつ、逃げるな！戦え！」

「うるせえ！こんな所で死にたかねえよ！」

先程までの威勢は何処ぞに消し飛び、みつともなく、彼等は子供のように騒ぎ立てる。
そして……。

「おい、アンタら」
「まだ、やるかい？」

二人の戦鬼が。
獰猛な笑みと共に。
彼等を打ち倒していくた。

* * * * *

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

十数分後……

「ふい～……制圧完了だな」

脱出した者を除いて、倒した相手を外に放り出した後、制圧した此の組織が溜めてい

た金目になりそうな物を一ヶ所に集め、山積みにする。

「さてと……だ。君！」

「…………ん？」

倒した敵の衣服で自分の武器たるナイフ拭く少年に対し、照は金山の八割を彼の前に押し出す。

「今回の山分けだけど、俺はこれ位で良い。元々君と戦いたかったが、あの状況下、一番負担が大きかつたのは君であり、此方は共闘で巻き込んでしまつた事もある。

其れを考慮した結果、此所に在つた金目の物の八割を君に渡したい」

照の真っ直ぐな、何の算段も巡らせていない目を見て、少年は何を考えたのか、無言で立ち上がる。そして革製の袋に其れ等金品を詰め込み、『彼等』に背を向け、十鬼蛇区の裏路地に去つていった。

「…………あ、名前聞くの忘れてた。

：あああああああ！？名前！名前教えて！」

追い掛けようとしたが時既に遅く、少年が何処へと向かい、何処へ行つたのか分からなくなつてしまつた。

「あく…………失敗した。ド畜生……取り敢えず帰るか…………」

残された二割の金品等を照は袋に詰めて、肩に掛けるように持ち、自分の居場所……十

鬼蛇区の小高い丘に在る家へ、帰路に付く。
が……

「あれ？此所つて…………」

あの少年を追跡した結果、自分が何処に来たのか分からなくなつてしまつたのである。

「…………どーしよ、この状況。せめて此所が何処なのか場所が分かれば、帰れなくもないのに……」

「四亀区……だよ」

「えつ、そうなのか？いや助かつ……ん？」と後ろに視線を移すと、其処には全裸の少年が照を見上げるように立つてゐる。腕や脚は細く、目も少し濁つており、まともに食事を摑つていなことが、照には分かる。

「君は……さつきの廃墟にいた子だな。此所は四亀区なのか」

ゆっくりと、片膝を付きながら、少年と視線を合わせて話を聞く。

「……うん」

「そうか。ありがとう、教えてくれて」

「よいしょ」と上着を脱ぎ、少年に頭から袖を通しつつ、袋から財布や金品を取り出して、

彼の小さな手に握らせる。流石に全裸では何かと不便である以上、一糸纏い、金を持つだけでも状況は大きく違つてくる。

「氣を付けてな」と笑顔を投げ掛け、十鬼蛇区へ向けて歩き始める。
が……

「……」

後ろに気配を感じて、首を後ろに向けぬように目を向けて見た。

あの少年がトコトコと、自分の背中を追い掛けてくる。

「……どうした？」

立ち止まり、声を掛けると少年はこう言葉を返す。

「居場所……ない、から……」

居場所が無い。中の人間達の中、弱者にあたる其の殆どが抱えている物だ。ある者は身を売り、ある者は強者に例属・寄生する事で生きている。

自分や氷室涼、二虎に、あの少年のような強者になれない者達の抱える物だ。

「……そうか。じゃあ……」

来るかい？俺の……俺達の居場所に。

「…………え——」

風が大きく吹き荒び、彼等の髪を揺らしてゆく。

「俺は其の場所で強くなれた。もし君が……己の意思で強くなりたいと望むなら、俺達が君を強くしてやる。

空腹に苛まれないように、強者に踏み付けられぬように、自分自身を守れるように。自分の中の、芯の通った強さを其の身に付けさせてやる」

御世辞等では無い。自分も嘗て……前世で踏みつけられ、空腹に苦しみ、色々な物を奪われてきた有象無象の弱者の一人だつた。

この少年は自分とよく似ていたのだ。奪われ、失い、道が見えず、彷徨つているこの少年が。

「僕……僕は…………強く…………強く、なり……たい……ッ！」

強くなつて、あんな怖い思い！二度と……二度としたくないッ！」

安堵によつて弛み、照から与えられた優しさで涙腺が壊れた。涙を溢し、鼻水を滴しながら。少年はこの日、自らの意思で、自らの言葉で、枯れた喉から声を振り絞つて叫んだ。

「…………そつか。じやあ行こうか、俺達の居場所に」
 「ぐずつ……ばい！」

照の後ろを追うように、少年・桐生

きりゅう

刹那は歩き出す。

これは後に拳願仕合けんがんし�いにおいて、十鬼蛇

阿修羅

王馬と合わせ、『拳願四王』と謳われる事になつた一人の闘技者の、今はまだ幼

き日の出来事である……。

鬼灯

きらめ

照・氷室

ひやまつ

涼・帝

第三十六話 教授（きょうじゅ）

「照、誰だよソイツ」

いの一番というか、やはりというか、涼の一言が飛んでくる。修行に出て、見ず知らずの少年を拾ってきたのだから、そう言いたくなるのも無理は無い。

「この子は桐生 利那。俺の見立てだが、かなり出来るよ。しつかり鍛えていけば、確実に俺達に比肩するくらいには強くなれる」

後ろに隠れた刹那の事を説明し、涼は彼を見る。師である十鬼蛇ときな二虎より、二虎流の奥義おうぎである鬼麿きのうを得た事で、照の目にはあらゆる力の流れを、矢印で感じ取る事が出来るようになっていた。

涼の体外へ流れる矢印も大きいが、刹那の持つ矢印そりも自分達に匹敵し得る程には大きい。鍛え上げ、戦う事で、きっと自分も涼も強くなる…そんな予想があつたのだ。

「そうは見えねえけどなあ…」

「まあまあ、今はまだ戦闘のせの字すら知らないからさ。ゆくゆくを見据えた事だと思つて。取り敢えずドラム缶風呂に入つて、彼を綺麗にしたい」

「そうだな…汗も搔いたし、ニコさんはまだ帰つて来ないし…飯はどうするよ？」

「…取り敢えず缶詰で宴にしよう」

「だな」

何気ない二人の会話を見て、刹那は少し羨ましく思つた。 同年代の友達が居なかつた彼には、そんな光景すら輝いて見えていたのである……：

* * * * *

翌日……

「じゃあ照、行つてくるぜ！」

涼は二虎さんから託された宿題を進める為、『中』にある地域の一つ『八鷹』へと向け、

覇堺流の歩法である『蝗跳』(いなまことび)を使用して、かつ跳んで行つた。

「…よし、今日から稽古を始めるよ。準備は良いか、刹那？」

「はいっ！」

裸であるのは不味いと考えた照は、刹那の背丈に合わせて、中の戦いに勝利し剥ぎ取つた衣服の裾や袖を、鎧び付いた鉢で切り裂き、着せていた。

動きやすさや通気性も考えつつ、彼の雰囲気に合わせた黒で統一した色合いの服。刹那は気に入つているようだが、もう少し良い物に出来たかと彼は思う。

「先ず、基礎的な打撃の型を教える。基礎在つてこそ、武術は成り立つ」「はいっ！」

腰を落とし、腕を脚を構え、そして打ち出す。霸場流もだが、全ての武術には基本となる『型』が在る。二年間沖縄で……黒木くろき
玄齋げんさいより学んだ事だ。

一つ一つの型は、戦いに於いて一つの『手札』となり、同時に『引出』となる。持てる物は多い方が良いとは言うが、時にたつた一つの手札で全てが崩壊するとも言われている。

技の練度は何よりも大切だが、其れ以上に基礎的な訓練は己を偽らない。自分の打撃である『釘撃』くぎうちが、黒木に通用したのと同じように。

「こう、ですか？」

「そう。あとは膝を少し深く曲げて、脇をしつかり絞めて――――打つ！……良いかい？」

「はいっ！」

刹那はこの日、空手の基本の型である『正拳突き』の構えを学び、照の其れを真似ながら、何度も何度も繰り返したのだつた。

* * * * *

「せいつ、おりや！」

「ふつ——しつ！」

刹那を家族に加えて、三日が経つた。今日は朝から雨が降り、刹那が見守る中で、俺と涼は組手を行つてゐる。

「相変わらず、お前の拳はかつたいな！ 照！ 一発も貰えねえ緊張感、全身がピリピリするぜ！」

「其の言葉、そつくりそのまま返すよ！ 涼！ 対処法は解つても、君は戦う中で其れを常に超えてくるツ！」

「やつぱ、お前は最高の相手だ!!!」

「全く、君は本当に凄いよ！」

互いに自分の持ち味を、得意とする距離での打ち合いを繰り返しつつ、自分の技の練度をぶつけ合う。

照が金剛と水天の緩急と、一撃必殺の霸壠流を受けた攻撃を叩き付け。

涼は操流と火天による足捌きと流体、そして己の十八番たる縦拳を刻み込む。

一進一退の攻防、其の身を血に汚し、数多の傷が付きながら。それでも自らの勝利を掴まんと、武を、技を、限界を越えて繰り出す。

そして――

『ハアツ！』

『シイツ！』

照、涼、此の日最後の一手は軸足による跳躍からの、頭部を狙つた爪先蹴りであった。其の蹴りは互いの爪先に激突。パキヤツ！と爪が割れる音が雨中の音に混じつて響き、軀では双方の着地に搔き消され、静寂が訪れる。

「――……いつつってええ？足の爪割れた！めっちゃくつちやいつでえ！」

襲い掛かった激痛に、涼は片足でびよんびよんと跳ねる。どうやら、今回の組手は照に軍配が上がったようだ。

「ふうつ……涼の運足と縦拳、沖縄の修行の時から更に速くなつたんじやないか？」

「まあな。だけど、お前の不壊を突破するにはまだまだ足らねえ。当面は金剛ノ型の強化が俺の課題だな」

「此方も今回の組手で、火天ノ型の練度を上げる必要が有ると感じたね。後は――

――

戦いを通じて思つた事、感じた事を話し合う。そんな時だつた、二人の戦いを見ていた刹那が此方に近付いてきて、服の裾を引っ張りながら言つたのだ。

「あ、あの……えつと……」

「ん？ なんだ？」

「いえ……えっと…………」

もじもじと身を捩り、指先をくるくる回して、刹那は口籠る。其れを見た照は、刹那の目線に合わせるように屈みながら言う。

「大丈夫。 ゆっくり話してみて」

照の其の行動が正しかつたのかは定かではない。しかし其の行動で、刹那の表情は少しだけ落ち着いた物になつた。

「あ……えつと……照、さんの……足の動かし方。 右に動く時……ほんのちよつと、えつと……『左』にズレてる……みたい。」

あと……涼君、も……。 拳を握る時に、お父さん指を……お母さん指に、乗せると……『もつと早く』……なる、かも…………」

刹那の指摘に少年達は顔を見合せ。其の指摘を下に、各々動きや拳を繰り出してみた。

すると、照は今までよりスマーズに火天の動きが出来、涼の縦拳は其れまでよりも0,3秒速くなつた事を、実感したのだ。

「おおおおおお！ 刹那、お前すげえな！俺の縦拳がめっちゃ速くなつた！」
「凄いな、刹那。 ありがとう」

涼は刹那の両手を掴んでブンブンと上下に振り、照は彼の頭を優しく撫でる。

「……え、へへ……♪」

今まで誰からも必要とされず、産まれた意味と価値を見出だせずに生きてきた少年は、初めて誰かに必要とされ、そして自身の存在を認められた事に歓喜した。此の小さな幸せを、失くさないようにになりたい。

二人の想いに応えられる、そんな存在になりたい。

少年時代の桐生 刹那の心は、少しずつ変わっていく。

其の変革が、軽て大きな流れとなつて、照達の運命を変えていくのである。

第三十七話 少年（しょうねん）

刹那が照達の家族に加わって、およそ一週間の時が流れた。

「照、今日だな」

「ああ。遂に今日が来たんだ」

今日——其は二人の師、十鬼蛇ときた二虎が、彼等に一ヶ月前に出した宿題、つまり二虎の言つた強者を倒したかを確認する為に、一度此方に帰つてくる日である。

「照さん……涼……二虎さんって、優しいの……かな？」

「あ、そうか……刹那は二虎に会つた事が無いんだつけか」

コクリ……と頷いた刹那に、照は「大丈夫」と微笑みながら、頭を撫でて安心させる。「二虎さんはちょっと教え方が下手で、口下手な所も有るし、酒や女人の人にはちょっと甘かつたりするし」

「だけど」と、照は其の後の言葉を紡ぐ。

「そんな二虎さんは、俺達よりもずっと強くて。そして俺が、師匠として尊敬する人なんだ」

と、此所まで語つた照が氣付く。彼の前に居る涼の顔が青ざめており、刹那の顔はボ

カーンとしている事に。

「だーれが、教え方と口下手で酒と女の子に甘いだつて？」

其の瞬間、彼は自身の後ろに立つ存在が捉えきれない程の、戦いで感じる物とは別種の殺気に感付き、錆び付いたカラクリ玩具の様に、ギギギ…と首を後ろに向けた。

「あ……お帰り、なさい……」二虎さん。あの……もしかして、ですけど。全部……聞いて、まし……た？」

「ああ。全部聞いてたぞ、コノヤロウ♪」

青筋を額に満たし、二虎は金剛ノ型・鉄指^{てつし}で固めた怒りのアイアンクローを照の頭に叩き付けたのである。

「いだだだだだだだだ?!？」

「さてだ…涼、其処のチビ助は誰だ？」

二虎が刹那の存在を涼に問い合わせた。元々は照が拾ってきた少年を、どうにかして説明しようにも、口籠ってしまう。

と――――――――――――――――――――――――――――

「二虎さん、その子は桐生 刹那つて言います！」

クロ一を食らいながら、照が声を上げる。

「俺が修行の最中、四亀区を訪れた時に発見しました！今はまだ幼いですが、鍛えていけ

ば俺や涼に匹敵する実力者に成れると踏んで、保護したんです！

あとこのままだと、頭が割れそうでそろそろ離してくれませんん!?」

「へえ、お前がねえ…？」

照をクロ一しながら、二虎は刹那の顔や体格等を見る。

死地を搔い潜り、数多の修羅場を越えてきた男の目には、刹那という存在は『まだ』小兵に過ぎない。

(……まあ、コイツは『良い』な)

が、しかし。二虎の目に映る刹那は、内側に宝石の原石に似た、確かな輝きを宿しているのが見えた。

「よし、刹那だっけな。お前も俺の弟子になれ♪」

「え、良い…の?」

「おう。照はいつちよまえに、人を見る目はあるかんな」

「あの…! 二虎さん、そろそろ頭が割れそうなので離してお願ひします!?!」

「あ、わりいわりい」

おちやらけていた二虎は、拘束していた照をパツと離した。解放され、軋む頭を押さえて擦る照に、刹那が駆け寄る。

「照さん…あの、よろしく…です」

「……ああ。よろしく、剎那」

差し出された拳に、今はまだ小さな拳が重なった。こうして桐生 剎那は無事、十鬼蛇 二虎の弟子の一人となつたのである。

「あ、そういうやニコさん、仕事探すとか言つてたけど見つかつたの？」

「見つかつたぜ。名前が確か『恥不知組』とかいう、ちよいと有名なヤクザの所の用心棒にな。何でも十鬼蛇区で『探したいヤツ』がいるんだとさ」

ヤクザかあ：と涼は思い、照は誰を探しているんだろうと考えた。しかし照と剎那是、其の人物と既に一度『逢つてている』のだが：此の時の彼等はまだ知る由も無かつたのである。

* * * * *

二虎が戻ってきて約3日が過ぎた。どうやら今日、二虎さんを雇つた恥不知組は、探し人を見付けに行くらしい。

其の為に朝から二虎は外出していく、三人は修行をするようにと言われていた。

「なあ、照」

「んく、どうした涼」

「何か企んでるだろ」

照が刹那に、黒木から教わった正拳突きの型稽古を教える最中、涼がそう言つたのだ。

「何でそう思つたの？」

「照さん、顔が嬉しそう」

「お前が上機嫌な時つて、大抵何か面白い事考えてるんだよな」

長い時間一緒に過ごした涼なら未だしも、顔色で変化を見抜いた刹那に少し驚きつつも、照は「ばれたか…」と言つて一人に話す。

「恥不知組が探してる奴が、ちょっと気になつて。どんな人なのかなつて：二虎さんを雇うつて事は相当強いのは間違ひ無い」

「…もしかしてソイツと戦う——なんて言うんだろ」

「うん」と即答した照に、涼はハア…と大きな溜め息を溢す。強さに対し、底無しとも言える貪欲さ。自分よりも、強い奴との戦いを求める求道者。其れが鬼灯 照なのだ。

「だけど、俺も興味有るんだよな。二虎さんを必要とするくらい、ソイツは強いのかなつて」

「わかる?」

「ああ、何となく…だけど」

そうして二人は僅かな沈黙の後に、ほぼ同時に『探すか』という結論に至つた。

「あ、でもよ。刹那はどうするよ？」

「俺がおんぶする。涼は十鬼蛇区に話が通じる人は居る？」

「数人だけど、俺自身が信用出来るヤツは居る」

「よし……じゃあやろう」

「おう」

ニタニタと黒い笑みで笑う青年達に、何となく察した刹那は身を少し震わせたのであつた……

* * * * *

約2時間後、十鬼蛇区内・某所

「わあわあわあわあ～～～!?」

「刹那、これが蝗跳いなことび！ 何れ君も身に付ける事になる技だよ！」

廃墟の街並みをかつ飛び、縦横無尽に駆け回る照と涼、そして照に縄で巻き付けられ、赤子の如く固定された刹那が駆けている。

現在三人は涼の信用出来る者達の元へと走り、恥不知組が何処に向かつたかの情報を、此迄の戦いで獲得した金品との交換で買い。そして彼等は先程、組の連中が『どあ

る廃ビル』に向かつていると知り、其処へ全力で跳ね飛んでいる。

「照、見えた！彼処だ！」

涼が指差す先、見えてきたのはおよそ10階はありそうな高いビル。外観からして何かの複合施設であつたような形に見える。

「あれか…ん？涼、あっちを見て」

照が何かに気付き、一旦止まつて指を指す。其の先には数十から百人程度の柄の悪い男達が、少し恰幅の良い男性を護衛するように、廃ビルの方向へとやつて来ている。

「…恥不知組か」

「多分…だとすると、あの人数でビルを包囲するかも知れない」

「早い内に突入したほうが良いか」

決断した後、照は背中におんぶした刹那を見る。彼は少しグロッキーな表情をしていたが、二人の顔を見てニコッと何とか微笑を作つた。

「…めん、刹那。少し速度を落として移動するよう、心掛けるから」

緩みそうな繩を改めて、刹那が苦しくない程度に絞め直す。そうして照と涼は、自分達が恥不知組にビル中へ、入つた事を気付かれないように迂回し。

裏口と思われる場所から建物内部に侵入したのだつた……。

廃ビルの中へと侵入した三人の前には、鉄屑や空瓶に空の缶詰、破かれた布や透明な袋に詰め込まれたモノ等が、彼方此方に散会していた。

「此の中の何処かに、恥不知組が探してゐる奴が居るのか」

「みたいだね。しかし……10階くらいありそうだ」

照が見上げる視線の先、吹き抜けの穴と螺旋状に巻いた階段があり、真上には空が見えている。

「……あれ？ 何か聞こえる？」

そんな時だ、刹那が何かを感じ取つたのは。

「刹那、どうした？」

「照さん、涼さん。何か聞こえませんか？」

彼の言葉に、二人は耳を凝らして廃ビルの中の音を聞く。すると微かにではあるが、何かを『咀嚼する』微細な音が聞こえてきたのである。

「あ……本当だ」

「何か……『食べてゐる』、のか？」

「多分9階……に、居る……」

恥不知組の到着も迫る中、三人は段跳ばしを行い、急ぎ螺旋階段を全速で登つていく。
そして――

「……あ、照。彼処に『誰か』居るぞ」

9階から10階に向かう階段の、丁度中間に当たるエリ亞に辿り着いた時、先んじて前を行く涼が『何か』を発見。階段を盾に、恐る恐る顔を覗かせた時、照と刹那に衝撃が襲い掛かる。

其処には一人、小さな『少年』が居た。背丈や体格、見た目からするに、刹那と『同い年』か『年下』。

しかし其の目は鋭く、まるで肉食獣に等しき、獲物を見定め狩り取る眼である。

ふさふさの黒髪は、沖縄の海の中で見たことがある、ワカメという海藻によく似ており、髪の長さも相まって其の姿は正に『子獅子』。

袖無しの上着と、必要最低限の長さのズボンにベルトを巻き、後ろにはナイフ入れとおぼしきホルスターが二つ、其の手にはフォークを逆手に焼いた肉と赤々と実った林檎を囁く、原始的な食事の様。

嘗て、中の組織を相手に一時はいえ共闘戦線を張り、刹那を副次的に救うこととなつた『あの時の少年』が、恥不知組が探していた人物だつたのだ。

第三十八話 王馬（おうま）

「照さん、彼…」

「ああ。間違いない…」

恥不知組が探している者の正体を知るべく、涼の知り合いからの情報を元に廃墟ビルへとやつて来た、鬼灯 照・冰室 涼・桐生 刹那の三人。

其のビルの9階のフロアにて、独りで原始的な食事を摂っていた少年は、以前に刹那が捕らわれていた組織を襲撃し、照の介入も相まつた結果、一時的に共闘戦線を張り、敵を打ち倒して危機を脱したのである。

「照、アイツ知ってるのか？」

「うん。刹那を助けた時にちよいと共闘したんだ」

「二人のおかげで、僕は助かったんです」

マジか…と呟いた時である。不意に涼へと飛来した物体を、照が二虎流・操流ノ方流刃を使つて、進行方向を変えたのだ。

「…いきなりだな、怖い怖い」

照が隠れていた階段から姿を見せ、流刃で弾いた物を横目で確認する。コンクリート

の壁には、沖縄で見たフォーカと呼ばれる銀色の三叉の器具が突き刺さっていた。

「お前……ホオズキ テルか」

「名前、覚えていてくれたんだ」

相手が自分の名を片言のように呟いたのを聞き、照は少々驚きながら、刹那を背に何んぶして普段の歩みで彼に近付き、其の後を涼が追う。

しかし此方を警戒してか、少年は空いた左手を後ろに回して、ホルスターから何時でもナイフを取り出せるようにしているのを、照は少年の体から流れる『力の矢印』を見て察したのだ。

「まあ、待つてくれ。俺達はあくまで、君に情報を届けに来たんだ」

「え？ お前さつき戦」

警戒を和らげようと恥不知組の事を伝えようとしたが、涼が指摘してきたので、照は直ぐに二虎流・金剛ノ型 鉄碎・蹴を彼の脛に叩き入れる。不意討ちに加え、照が最も得意とする二虎流の型の一撃により、涼は余りの痛みから口隠り、悶絶するに至った。

「君を探している恥不知組の連中が此所に来てる。既に出入口は封鎖されて、俺達は袋の鼠状態だ」

事実を淡々と話す照に、少年はある種の気味悪さを覚える。照の行動は、わざわざ自分の身を危険に晒す事に等しく、自身に対する見返りは皆無だ。

「お前、俺を仲間だとでも思つてんのか」

「うん。一度、君と一緒に戦つた時から」

過去の事をまるで昨日の出来事の様に話す様に、少年の『苛立ち』が更に募る。

「…………仲間なんざ」

不意に溢した言葉。照と涼、そして刹那が見つめる中で、彼は言つた。

「仲間なんざ、居ねえ。俺は端から一人だ」

少年には『名前』が無い。

12年前、無法地帯・中でも取分危険な十鬼蛇区に捨てられた彼は、過酷で苛烈な環境を今日まで生き抜いてきた。

生きるため、彼はあらゆる手段を用いた。強盗、恐喝、実力行使。

少年にとつての『暴力』とは、自身が生きるための『手段』であり、少年にとつての『闘争』とは、己の『生存』を確立するための物だった。

「……………そ…うか」

「照、コイツは『誰も信じねえ』感じだ。何となくだけど…分かる。自分の力だけで生きてきた…そんな感じ」

照も、そして涼も、昔の自分に少年が重なつた。照は自身の前世の記憶を思い出さなければ、涼は照との出逢いが無ければ、きっと今の彼と同じようになつていた筈だ。

「俺に関わるなら、お前もブツ殺す」

恐喝を掛けて、照達を追つ払おうとした。

しかし――

「断る」

照は其れを一言で一刀両断。そして続け様に少年へ言った。

「君が俺を信じようが、信じまいが、俺にはどうだつて良い。だけど俺は、君と一緒に戦つた時から、君の事を気に入つたんだ。だから助けに来た、理由は其れだけで十分」「……は？」

気に入つた？ 理由は其れだけ？

少年には鬼灯 照という男が、分からぬ存在になつた。

其の時である。

「邪魔するでえ」とドスの効いた低い声と共に、先程まで三人の居た場所からぞろぞろと人が雪崩れ込んできた。

着ている服装は高級とまではいかないが、其れなりに値が張る物を纏つており、顔や手に生々しい傷や何針も縫つた痕が在る。

そして、そんな男達の中でも声を発した顔に横一文字の切り傷と幾重の縫い痕を背負い、両手の親指以外に複数の指輪を付け、白いスーツを着ている男は、取分危険な臭い

と強さを含む、黒木 玄斎や平良 嶽山と同じ『裏稼業』に身を置く人間であることが、照と涼には分かつた。

「恥不知組の『安藤』あんどう つちゅうモンや。話じや『一人』と聞いてたが、まさか『お仲間』が居たとはなあ……。十鬼蛇区の連中は仲間意識つてもんが皆無やと思つとつたが、どうやら例外があつたらしいの」

クツクツクツク……と不気味に嗤う安藤という男に対し、涼は笑い方が気に入らないと渋い顔になり、少年は殺氣と威嚇の表情のまま。刹那は安藤や大人達を前にし、照の背中に顔を埋うずめて様子を見、照は此の大人達の中で安藤という男が『一番強い奴』であることを見抜いた。

「まあ何人居ようが、どの道お前等の命は取られる運命や。おとなしく諦めなよ」

まるで勝ち誇ったかのような言い方に、涼は更に顔をしかめて、安藤に流星を叩き込んでやろうとするが、照が彼の前に左手を出しつつ、繩をほどいて刹那を降ろしながら言つた。

「えつと、安藤さん……でしたつけ？ 御忠告どうも。ただ、間違っている部分が『二つ』程有ります」

「あん？」と首を傾げた安藤に対し、照は一步前に出るや右手を掲げて指を曲げていく。「一つ。此の人数を相手に『俺一人』だったなら、勝つのは難しいという事。そしてもう

一つは――『貴方以外』ならば、俺一人でも『十分』だという事です』

照にとつての指摘は、ハツタリや去勢では無い。強者との出逢い、幾多の死線を越え、十鬼蛇区を中の環境を生きて得られた力が、彼の言葉に強さを与えたのである。

「……お前、面白い奴ちゃなあ」

照の発言を落ち着き、余裕を以て返す安藤は冷静だった。下手な反論は自身の格を落とし、怒りは拳先を鈍らせる事を知つてゐる。故に：

「だが、死ね♪」といふ一言で、男が二人、照に向けて突進を開始した。

「小手調べか？」刹那、そして少年。強くなるには先ずは『見る』事からだ

今はまだ学びの浅い刹那と、強くとも暴力でしかない青年に、背中を見せて言葉を伝える照は、両手を握りて拳を作り、男共が迫り来る中で、自身の爪先に力を込める。

瞬間、其の身は火花のように一瞬で振り抜かれた拳が、男達の鳩尾を打ち抜き、己以上の体格差があるにも関わらず、ピンボール玉をバーが弾くように、殴り飛ばしたのだ。

「くべ……！」

「ゞふつ……！」

用いた技は二虎流　金剛・火天ノ型　瞬鉄・碎と、自身の流派　霸堺流　釘撃・迅。どちらも威力、破壊力は申し分無く、体格と体重が勝つていた男達は自身の突進力に、力ウンターとして合わせた事により、倒しに来た二人は逆に倒される結果となる。

「！」

「す、すごい…」

「こんなふうに、どんなに大きな相手でも、どんなに強い相手でも。技や工夫をすれば、如何様にも戦う事が出来るんだ」

「オイオイ、俺も暴れたいんだが」

ステップを踏みつつ、安藤の次なる一手に備える照に、涼も忘れるなど主張しながら、見慣れた縦拳の構えを取つて横に来る。

「さて、少年。このままじや安藤さんつて人に此処で御陀仏にされるが、どうする？尤も、俺達は此処で死ぬつもりは無いけれど」

背中越しに照は少年へと問う。静寂の中、彼は立ち上がりホルスターに居っていたナイフを逆手に握り、ゆっくりと歩み寄る。

「死んだら俺は其の程度、其だけの話だ」

「俺は君を気に入つたし、此処で死なせるつもりもない」

「……ホオズキ テル。お前、ソイツ等に変わつてるとか言われるだろ」

「嗚呼、言われるな」

「照はお節介な所あるからなあ、まあ其のが良かつたり悪かつたりするんだけど やれやれ顔で言う涼に、ハハハ…と苦笑いを浮かべる照。少年にとつて、同い年程の

子供と話す事は無かつたが、不思議と悪い氣はしなかつたのである。

「俺は刹那を守りながら、安藤さんの付き添いの連中を減らす」「じゃあ俺はあるの安藤つて野郎を叩く、笑い方が気に入らねえ」

「俺がアイツをぶっ殺す、お前は周り」

『あ?』と意見の食い違いから、一触即発の気配が涼と少年の間に流れ、照は「まあまあ」と間に割り行つて止めに掛かる。

其の隙を安藤は見逃さない。彼等の意識が僅かに逸れた瞬間、残りの手勢を一挙にぶつけて来たのだ。

「照さん！涼君！」

状況が動いた事に真っ先に気付いた刹那が、大人達に対する恐れに抗い、何とか声を張り上げる。

直後、少年が逆手持ちのナイフと共に大人達を切り付け、涼は体勢が崩れた所を十八番の縦拳や腕や脚を利用した回し蹴りで倒し、照が彼等の意識を彼方へと飛ばすように釘撃で頸や頭へ打撃を放つ。

「取り敢えず、言い争いしてた場合じやねえ」

「少年、一先ず手を組むかい？」

「……好きにしろ」

事の状況を鑑みた結果、三人は共に戦う道を選ぶ。ある者は生きる為、ある者は守る為。少年達は、未来を勝ち取るべく挑んだのだ――

「さあ、暴れるぜ……！」

* * * * *

廃ビル9階フロア……戦場と化した其処で今、数十人の大人 vs 僅か三人の少年達といふ、誰の目からも分かる戦力差の戦いが行われていた。

普通ならば、子供が大人に真正面から勝てる道理は皆無であり、ただただ等しく蹂躪されて死ぬか、運良く逃げられたとしても一生追われ続けるという運命以外、道は何処にも在りはしない。

しかし、何時如何なる時も例外は存在する。

「霸アツ！」

「シイツ！」

（こりや一体どういう事だ…!?)

安藤にとつての誤算：其れは鬼灯 照と氷室 涼の二人が少年と手を組んだ事と、其の二人が標的とした少年以上に強かつた事。

大の大人が子供を相手に、殴る蹴るという単純な攻撃で昏睡状態に追い込まれ、プロ顔負けの拳速と跳躍回し蹴りに倒され、刃物に対する一切の躊躇が無い一閃に切り裂かれる。

ありえない光景が、これまで様々な人間を壊し、始末してきた安藤の額に、嫌な脂汗を浮かばせる。

(標的の坊は俺一人でもやれるが、問題はあの褐色の涼つてのと、照つちゆう黒茶髪の坊主だ。裏家業^{コツチ}の世界に入つて随分経つが、あん二人は今まで始末した若者の中でも断トツの強さ…。

そして何よりも照の動き。まるで『百年近い修練積んだ達人』みたいな動きをしよる
… 一体何者だ、ありやあ…！）

刹那を守りながら、攻めるべき時は攻めつつ、守るべき時には守りに徹する少年のキレある姿が、格闘経験を積んだ安藤の目には異質な存在として映る。

（この坊、もし此処で取り逃がしたなら確実に『化ける』：！其れも俺が足元にも及ばないレベルに！）

そうして安藤は静かに、心を研ぎ澄まして拳を握る。身体から湧く闘志を消し、気配を消して、唯一撃に込める。

破壊屋の通り名を持つ彼の十八番——ブロツク屏を破壊する、殺人空手の正拳突

き。事実、安藤は此の技で数多の敵を屠り、殺してきた。

狙うのは照。彼が刹那を守りながら戦い、ほんの一瞬…蜘蛛の糸の様に僅かに視線と意識が逸れた時を、まるで歴戦の狙撃兵士が狙い撃ちするが如く。

安藤の正拳突きが、照の左頬を音速で撃ち抜いた。

「あつ、照！」

「！」

「照さあああん！」

（手応え有り！）

今まで味わつてきた肉を潰す感覚に、安藤の口角は吊り上げた。そのまま此の子供を潰し、他の子供も順に血祭りに上げれば依頼は完了する……

「俺を真っ先に潰しに来てくれて、ありがとうございます」

直後。

安藤の頭をトラックが正面衝突したに等しい衝撃が襲い。

自分の右頬と右顎骨、頭蓋骨がミギヤリと碎ける音が鼓膜に聞こえ。

彼の数倍の重量は在る自分の身体が宙に浮き、飛ぶ感覚が襲つて。

埃を被り、所々ヒビが走る窓ガラスに突つ込み、外に放り出されたのだつた。

* * * * *

同時刻、廃ビル周辺……

「安徳達が突入して7分…そろそろ片が付いてるだろう。お前等、出入口はしつかり塞いでおけ！万が一にもガキを逃がすなよ！」

「「「押忍ッ！！」」

金と宝石の装飾に彩られた腕時計に目をやりつつ、部下の男達に指示を出す四十代く

らいの、程々に恰幅の良い男性が声を張り上げた。

男の名は土師沙羅士、彼こそが少年を始末するために十鬼蛇区へ赴くため、安藤と二虎を雇つた恥不知組の組長である。

（…にしては『遅いんだよなア』…）

そんな組長と部下の面々の会話を横耳に、年代物のキセルで煙を吹かし、廃ビルが聳え立つ空に息を放つ、顔と頭、肩を布で隠した男が一人居た。

彼は十鬼蛇二虎。鬼灯照、氷室涼、桐生刹那の三人の師であり、主に鬼灯照によつて潰された生活費を稼ぐべく、現在は恥不知組の用心棒になつてゐる。（たつた一人の子供を排除するんなら、先に送り込んだ連中で十分なんだが……どうも『キナ臭え』感じだ。）

二虎は知る由もない。恥不知組が排除しようとしている少年に、自分達の弟子が加勢して安藤率いる軍団と現在進行形で戦つてゐる等と。

そんな恥不知組の面々の頭上で硝子の破碎音が轟き、廃ビルから『何か』が降つてくる。建物沿いの看板に当たつて跳ね返り、合間を紡ぐ電線を断絶しながら、其れはビル横に在つたゴミ集積場に落ちて、煙と埃を巻き上げた。

「飛び降りいか!?」

何が起きたと沙羅士を筆頭に恐る恐る近付いた面々は、其処に在つた物に言葉を失つた。ゴミ山の上に落ちてきたのは、数分前までピンピンしていた安藤であり、其の彼が頭から血を流し、顔面右側が形の解らぬ状態になり、頸骨は完全に碎けた状態になつていたのだから。

「あ、安藤……」

用心棒として雇つた男が、見るに堪えない姿に変わつたのを沙羅士を含め、組の面々は警戒を厳重な物とし、各々が武器を手に取り、臨戦態勢に入る。

（ああ：『そうゆうことか』、成程なあ：）

そして唯一人、安藤の状態から彼を倒した『人間』を察した二虎は頭を抱え、持つていたキセルをバキリッと指先の力だけで減し折つた。

数分後……

「いやあ、本当に皆には助けられた」

「無茶そんなよ照、さつきのヤベエ打撃は効いただろ」

「君は……どうするの、これから……？」

「……知らねえ」

廃ビルの内側から数人の声が聞こえ、出入口より四人の少年達が現れた。おんぶされた氣弱そうな少年を除いて、少なからず身体に傷を負いながらも、五体満足で生還を果

たしたのである。

即ち其れは先に入つた軍団が、彼らにより全滅したことを意味していたのだ。

『動くなあ、餓鬼共オ！』

そんな彼等へ拳銃を握る沙羅士の怒号が廃墟に響き、組の面々は拳銃やドス等を構え、待ち構えていた。

「あれ誰だ？」

「見た感じ、彼奴等の頭目……と考えて良い」

「沢山……いますね、大人の人」

「……潰す」

戦闘は避けては通れないと、照と涼は拳を握り締め、少年は二振りのナイフを構える。と、そんな一触即発の空気の中、顔を隠した二虎は沙羅士の前に躍り出て言つた。
「組長、悪いがアンタに殺らせる訳にはいかねえ」

「は？ 二虎、何言つ」

直後、沙羅士の顔面に二虎の鉄砕が炸裂。鼻と眉間に拳がめり込み、前歯が碎けながら沙羅士は遠くへと吹つ飛んだ。

「ワリいな、アイツ等は俺の弟子なんだ」

そう言つた二虎は、沙羅士をやられた怒りに震える組の連中を相手に、一騎無双の大

立ち回りを行い始めた。無論、自分の職を照に潰された怒りを込めながら。

「な、何が起きてるんだ…」

「仲間割れ…でしようか」

「………アイツ、何者だ…！」

「凄いな、二虎さん…」

其の姿を四人は、思い想いの言葉を吐露し、見守つて。そして十分も経たぬ内に、応援を含めた恥不知組の連中全員は、二虎の手により戦闘不能に追い込まれたのであつた

…。

* * * * *

十鬼蛇区と七王馬区の境界線…………空はすっかり夕焼けに染まり、ちらほらと星の輝きが見え始めていた。

「オイ照、俺職失つたんだが？ マジでどう説明してくれるんだコレ？」

「その節は本当に申し訳御座いませんでした」

額に青筋を浮かべる二虎に、少し頬が腫れた照は土下座を行い謝罪している。

「はあ…これまでまた仕事探しだ、かなり苦労したんだがなあ？」

「本当に申し開きもありません……」

深く、大きな溜息を吐き、これから先の事を考える二虎。そんな折、涼と刹那の近くに居る少年が、彼の視界に映る。

「ん？ 其処に居る少年は？」

「照が以前から目を付けてた奴だよ、二虎さん。中でも其れなりに有名みたい」

「照さんと同じ、僕の命の恩人……なんです」

二人の発言を聞き、興味を持つてずいっと近付いた二虎に、少年は警戒しつつも、いざとなれば腰のホルスターに納めたナイフで切り裂けるようにしていった。

「…………確かに、照が目を掛けた理由が分かつた。こりやあ才能がある」

「良いね、少年」とサムズアップする二虎に、少年は戸惑つた。今まで見てきた人間と、何かが違う。ホオズキ テルや、此の男は。

「よし決めた。お前さん、俺の弟子になりな」

「は……？」

「それと名前はあるか？ 少年つて呼ぶの、何か違う気がするんだが」

「話し聞けよ！」

突如、自分を弟子に取り、あまつさえ名を聞く二虎に、照が「二虎さん、彼には名前が無いんです」と告げるや、「お、そうなのか？」と辺りを見渡して、閃いた。

「此所は確か：『十鬼蛇区』と『七王馬区』の境界線、だつたな。よし……」

今日からお前は『王馬』おうま、『十鬼蛇 王馬』とうまと おうまだ

ポカーンと、してしまう。名前が無い自分に、名前が与えられた事に。

「王馬……良い名前ですね、二虎さん」

「おうよ、我ながら良いセンスしてるだろう？」

「王：かつこいい」

「良いなあ、俺もちよつと名前変えようかなあ」

「いやいや涼君、今の名前の方がしつくりくるから、俺は変えないで欲しいんだが？」

ワイワイと騒いでいる中で少年……否、王馬は不思議な感覚を味わっていた。名前等、不需要だと思っていた。生きるためには、些細だと感じていた其れは、自分という存在を此程までにハツキリとさせる力が有る。

其れが何故か分からぬ、だが：身体の中から力が湧いてくる。

「あ…王馬が笑つてる！」

「…………は？ 何言つて…」

「お？名前を貰つて嬉しいのか？」

「な…!? ちげえし！ ブツ殺すぞ！」

赤面で名付け親の二虎囁み付こうとした王馬だが、其処はあっさりと躱わされ、加減したヘッドロックで組付される。

「まあまあ、これからよろしくな？ 王馬ちゃん♪」

「ブツ殺すぞ、テメエ！」

「これはまた、楽しくなりそうだ」

新しい家族が加わり、照は強くなれそだと微笑んでいた。

今、そして此の瞬間。

『霸王』
はおう
『氷帝』
ひょうてい
『鬼灯』
ほおずき
『水室』
ひむろ
『照』
てる
『美獸王』
びじゅうおう
『阿修羅』
あしゅら
『桐生』
きりゆう
『十鬼蛇』
とぎた
『刹那』
せつな
『王馬』
おうま

後の『拳願四王』と呼ばれる、四人の闘技者が揃つたのだ。

第三十九話 一族（いちぞく）

無法地帯、中。其の中でも取分、危険なエリアとされる十鬼蛇区と呼ばれる場所。犯罪が常に横行し、組織や個人による戦いが昼夜問わず、絶え間無く続きた者には人以下の結末が待つのみの、地獄のような世界だ。

『ある一部を除いて』

「おーい！お前ら、起きろー！」

ガンガンガンと鉄を叩く激音が鳴り渡り、朝焼けが暗闇の帳を切り裂く中。『彼等』の時間は、始まりを告げる。

「……もう、もう朝ですか」

「おうよ、もう朝だぞチビ助達。朝飯の時間だ」

フライパンをお玉で叩きながら、白シャツとジーンズを着付けたガタイの良い男が言う。名を十鬼蛇 二虎、今は『四人』の師として、此所に居る。

「むにやむにや…」

「二虎さん、おはようございます」

「ふああ…ああ、よく寝た」

十鬼蛇 王馬、氷室 涼、桐生 剎那、鬼灯 照。

其れが彼等の、十鬼蛇 二虎の弟子達の名前である。

四人は中で出逢い、二虎を師とし、其の日其の日を生きていた。

* * * * *

「んでよお、昨日の組手だけど照が繰り出した足技何なんだありやあ？」

「其れ、僕も気になつてました。地面が一瞬ですけど、すぐ震えて……僅かに二虎さんの体勢がぐらつきました」

五人の朝の食卓は、決まつて昨日に行つた師と弟子の組手に焦点が当てられている。
 「其れは霸塙流 蝙跳・地畝（はかりりゅう いなごとび ちうねい）という技でね。釘撃の衝撃伝導を地面に与えて、砂を巻き上げて目潰しに使つたり、昨日の組手の時のような至近距離化での戦いで使つたり出来るんだ」

「あく……要するにソイツは、中国武術にある震脚と同じ原理か。まあ、威力と範囲は霸塙流だけあつてデケエわな」

炊きたての玄米ご飯と缶詰の魚、水と林檎丸ごと一個という、有り合わせの食材を用いて作る料理……と言えるか微妙な朝食。

しかし、無法地帯に生きる五人にとっての食事は、今日という日を生き抜く為、無くてはならない大切な時間だ。

「うつし、お前等。メシ食い終わつたら、さつそく修行するぞ」

「はい！」

「しゃあ！」

「わかりました」

「……ん」

四人四色の返事、食事を終えた五人は修行へと身を投じるのである。

* * * * *

二虎は修行を行う際、基本的には二つの部類に人間を分け、各々に修行を与えた。
「ていつ、やあ！」

「シツ！シツ！」

其の四人の弟子の内、鬼灯 照と氷室 涼の二人は戦闘の基礎が出来ており、独自の戦術を持つ為、教えてきた事や沖縄で学んで来た事をやるようにと、彼等に伝えた。現に照は、自身の流派たる霸壇流・怪腕流の部位鍛練・狐影流の羅刹掌完成・二虎流

火天ノ型の精密化を同時並行で行い。

涼は自身の十八番とする縦拳の精度と練度、歩法の改善、二虎流の金剛ノ型のキレ向上に努めている。

「はっ！はっ！」

「……ツ！」

「二人共、まだ腰が引けてるぜ。そんなんじや何時まで経つても、ブツ飛ばす打撃は出せねえなあ？」

一方で、此迄戦闘の経験が有つても、力の使い方がなつていない十鬼蛇 王馬や、そもそも戦闘の経験さえ皆無な桐生 利那の二人は、二虎の指導の元で戦いに置ける、基本の型作りから始まる。

「はっ！はっ！はっ！」

「ふつ……！ふつ……！」

「コツはこうだ……スツと立つて、グツと溜めて、バツ！と出せ」

「これなら解るだろと具合で、ニヤリと笑みを浮かべている二虎。

「……ヘタクソ」

が、刹那と王馬には理解に困る言い方だったようで、素直な感想が直球で帰つて來た。

「これでも解りやすい方なんだが？」

「いえ、照さんの方がずっと解りやすいです」

「解りずれえ」

弟子の駄目押しにガツクシと肩を落とす二虎。師の面目が丸潰れにされていく状況を、横目にしていた照が動く。

「刹那、王馬。二虎さんの言い方は確かに解りづらいのは分かるが、打撃戦を含めた基礎となる型として、重要な事を教えてくれたんだよ」

見ててと照は二人の前に立ち、足を広げ、腰を落とす。

「二虎さんが言つた、スッと立つのは背筋を伸ばして、足を地に着け。グッと溜めるのは拳を確り握り締め、打ち出す腕へ力を集める」

そして！と、一連の動作を踏まえて拳を迷い無く、一撃に乗せて放つ。

「パツと出すは、素早く。そして己の溜めた力を、一気に対象に向けて打つ。……です
よね？二虎さん」

「…ああ、そうゆうこつた。やっぱ俺がへんな風に教えるよりや、照や涼が説明して補助付けた方が、分かりやすくなるわな」

大人であり、師でもある二虎。彼の『戦闘面』に置ける実力は、現状四人が束になつて『奇襲を仕掛けて』戦つたとしても、まるで戯れる様に、片手間で倒す程に強い。

しかし、教える側の。武術の教育者としての彼の実力は、霸壠流を其の小さな身体に納め、弟子入りから僅か半年で二虎流の奥義繼承に至った鬼灯 照や、金剛と操流の混合という独自の二虎流を編み出し、照と肩を並べる強さを持つ冰室 涼には劣る。

「成る程……こうしてこうやつて……こう……出来ました！ ありがとうございます、照さん、涼君、二虎さん！」

「そういう感じか……少し分かつた」

素直に教えた者達に礼を言つた刹那と、自分の両掌を開いては閉じて、感覚を頭と身体に刻む王馬。

「……まあ取り敢えず、刹那と王馬は其の感覚をきつちり身体に刻んでおけ。照と涼、お前達は俺といつちよ組手やるぞ。戦闘不能かギブアップで終わりだ、良いな？」

パキポキと骨を鳴らして、先程迄の醜態を払拭するべく、二虎が戦闘態勢に入る。

同時に其れは照と涼、二人も同じく臨戦態勢へと入る合図となつた。

「相手になります！」

「しゃあ！ やつてやろうぜ、照！」

やる気満々で応え、拳を握り、照と涼は二虎へと挑む。

そして数分後、本氣を出した二虎によつて二人は、殆ど何もさせて貰えず、最終的にギブアップさせられたのは言うまでも無い結果だった。

* * * * *

日が一番高く昇り、少し西に傾く頃、五人は十鬼蛇区の中でも一際人の往来が激しい地域に足を運ぶ。此処に来た理由は幾つか有る。其の日の食糧調達、知り合いからの情報入手が主で、排他的な中の事情も相まって欠かす事は出来ない、ある種の日課の様な物だ。

そして本来の目的。其のが、照と涼の野良試合を行う相手を、二人に見定めさせながら、観察眼を養わせる為。

誰と戦えば良いか。自分の力が通じる相手か。体格や力の差は何れ程有るか。思考し、見極め、戦う事で、実戦経験を伸ばし、技を磨き、身体を鍛えるのだ。

「ハアツ……ハアツ……」

現在は涼が十鬼蛇区の実力者を見定め、相手取り、戦闘の真っ只中。相手は涼の身長より頭一つ程差がある大男で、左腕には龍の刺青(タトゥー)を彫り、腹に十数針を縫つたであろう、大きな傷を持っている。

対する涼は二虎との傷とは別に、打撃による痣や裂傷の出血で薄汚れ、呼吸も上がっていた。しかし、其の瞳は闘志を失わず、思考は明瞭に相手の男を倒すため、策を巡ら

せ、講じて いる。

「ちい… やるじやねえか、小僧…！」

大男の方も唇が切れて出血し、戦いの中で涼の連打を受け続けた右腕は、内出血で青く腫れ上がっている。腹部や脚部にも打撃の痣が刻まれているが、魯威的な体力の持ち主で、倒れる気配が無い。

（やっぱ俺は、一撃に対する『威力』が足りねえ）

幾千にも渡る組手、そして数十の命を懸けた死闘の末、涼は自分自身の欠点を理解した。二虎の様な力強い打撃も、照の様な規格外の破壊力も、今の自分には繰り出せない。歳を重ね、肉体が成長すれば今よりは強い力を出せるだろうが、其れでも二人には遠く及ばないと、共に過ごしていく内に次第に分かるようになつた。

「だが… お前のパンチじゃあ、俺は倒せねえ！」

腕の筋肉に力を集め、腹部を捻つて力を溜め始めた男は、歯を食い縛り、此の一撃で涼を仕留めんと右の拳を振りかぶる。

（分かつてんだよ、そんな事は…！）

打撃の威力が足らない。相手の体力は底知れず。このまま続ければ、まず間違いなく自分が先に力尽きる未来だけ。

（だけどよ… 俺は！ 照と同じ求道者になるつて決めたんだ！）

アイツ

存 在

眼前に迫る拳、肌をつんざく気迫。自分が見定めた相手が、強敵と改めて認識する涼。あと数センチで顔面が殴られ、吹き飛ばされるであろう状況。其の中で少年が取つた行動は。

「うおおおおおお!!」

「な!?」

拳の直撃を紙一重で躱わし、直後に自分の身体を捻り、腕を交錯させながら、男の腕を両手で取つて、脚を交差し捻つて、力を高め。

自ら跳躍し、全ての捻りを、一気に元のあるべき状態へと戻したならば、男の巨体が地を離れて宙へ浮く。

「ぐおおおおおおおお!!!」

視界は高速で回り、次の瞬間に後頭部を凄まじい衝撃が襲い、彼の意識を繋いだ糸がブツリと音を立てて切れ、両足と左腕が地面に力無く崩れ落ちたのだった。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ…………今のは……何だ……?」

無意識に繰り出された『技』に、涼は自分の掌を見る。小刻みに震えた手と疲労が襲う脚は、確かに其の感覚を『覚えている』。

「涼君！」

少年の元へ真っ先に駆け寄つたのは、盟友にして好敵手の照であり、其の後に刹那、二

めいゆう

ライバル

虎と王馬が続く。

「今凄い技だつた！どうやつて繰り出したんだ!?」

「えつ、いやさつきのは…わかんねえ。こうした方が良いつて、そんな気がしてやつたら…こうなつた」

仰向けに倒れ伏した男を指差しながら、状況を説明する涼。

「わからない技、かあ：良いね。組手がまた楽しみになつたよ、涼君」

好敵手から差し出された手を取り、立ち上がる涼。其の表情は何処か嬉しさが籠つていた。

「…やっぱ、変わつてるな照は。自分が倒されるかも知れない技が出来たのにさ」

「むしろ望む所さ、最強に至るには壁や目標は高い方が叶え甲斐がある」

照と涼が互いを認め合い、そして『腕相撲だ！』と握る手でおっぱじめたのに驚いた刹那と、何やつてんだコイツ等…といった顔で王馬は見ていた。
 （涼、お前もどうやら『照と同じ領域』に足を踏み入れ始めたみたいだな。いずれは…『継承』も視野に入れるべき、か）

弟子の止まることのない成長を肌で感じながら、二虎は涼に『二虎流の奥義』を授けるかの選択を、思考の片隅に置いた。
 進化を止める者には明日は来ない。無法地帯『中』は弱肉強食の過酷な世界。しかし、

そんな世界でも五人は日々を生き抜き、技術を磨き、鍛練を重ねる。己が野望、夢、生を勝ち取る為に。

* * * * *

日本某所には、『呉の里』と呼ばれる場所が在る。千年以上前、中国大陸よりやつて来た呉の者達は此の地を根城に、日本で起きる鬪争の影で暗躍し、其の名を裏の世界に轟かせてきた。

日が落ち、夜闇の幕が空を覆う頃、一人の男が此の地に足を踏み入れる。

「久しく『帰つて來た』な。此処に」

黒いスーツに袖を通し、頭に包帯を巻き、掛けていたサングラスを額に上げた其の男は、黒い瞳と白い瞳孔を持つていた。呉の遺伝子を宿す者達の身体に現れる其れは、己の存在を知らしめ、名を知る者を恐怖に戰慄させるシンボル。

男の名は『呉英治』。呉の里で産まれ、無法地帯・中において偵察と情報収集という、偵察任務の中でも一際危険な任務に身を置く人間であり。

そして其の中で、鬼灯 照と戦い、敗れた男だつた。

「チツ…未だに痛みやがる」

里の繁華街を歩き、呉一族の現当主が住む屋敷に向かいながら、時折響く頭の痛みに顔をしかめては、其の時の事を思い出す。

子供だと侮り、慢心した結果、たつた一撃で打ち倒された苦い記憶。此迄の人生で一度たりとも経験したことのない屈辱を、英治は頭と魂に刻まれた。

「次は負けねえ」

喻え子供であつても、中で生き抜いた人間ならば、相応の強さがある。ならば、次に遇い見える時が来たのなら、同じ過ちは繰り返さない。

屋敷の正門とおぼしき扉に顔を近付けた英治は、小さく人為的に繰り抜かれた穴に自分の瞳を寄せ、小声で何かを呟く。すると彼の立つ扉の真横が、一部ドアの様に開かれた。

ドアを通り、庭園内をジグザグに歩いて、屋敷の玄関に入つた英治。すると――
「英治じやあないか、久しいな」

英治に声を掛けたのは、柔道着に袖を通した丸刈りの、恰幅の良い三十代の男。フツと微笑み掛けるが、其の身体から出ている闘氣は並の呉一族のモノではない。

「堀雄のおじ――じやなくて『先生』。：お久し振りです」

彼の名は呉くれ堀雄ほりお。英治の遠縁であると同時に、英治に戦う術を教え、育てた謂わば『師匠』のなのだ。

「先生はよせ、英治。俺からお前に、教えられることは全部教えた……。しつかし、まあ：やんちやばかりだつたチビ助が、今じや立派に偵察任務を行つてゐるのだから、何が起ころか解らんもんだ」

「……ほんと、小さい頃は迷惑掛けました。……『雷庵』と『風水』は元気にしてますか？」
「あの二人なら、今年から修行に入つたぞ。……ただ雷庵の方は、最強だからとやりたがらなくてな。まるで何処の誰に似たのか」

「……あまり言わないでくれ……」

何気ない会話をしながらも、床板に気を配り、二人は屋敷の中で一番広い部屋の前の襖に向き合う。

「爺様、英治が戻つてきました」

堀雄がそう伝えると、内側から『入りなさい』と声が聞こえた。英治は気を引き締め直し、堀雄が開けた後に続いて中に入る。

入つた部屋には、だだつ広い高級な畳が床一面に敷かれた大広間に、無数の襖が左右に建ち並ぶ如何にも高級な和室。
部屋奥は中段となつており、部屋を横断する長さの立て掛け板と四つの鎧兜と納刀された刀が飾られ、其の中央に一人の。齡七十はある老人が、正座をして書物を膝に置いていた。

「……久しく見たぞ、英治よ」

英治を見て声を掛けた。其れだけで英治の、全身の毛という毛が逆立ち、彼は固唾を呑み込み、身体が型に嵌められたような圧迫感に襲われる。

（…相変わらず、格がちげえ）

此の老人こそ、現在の日本に住まう吳一族達の当主、吳 恵利央。くれ えりおう 当主の座に就いて

半世紀に近付いて尚、未だ一族の『最強』を譲らぬ強さと圧は健在の様だ。

此の調子なら、後数十年は余裕で生きられるだろうと、堀雄と英治は心の中に留めつつ、静かに正座に付く。

「さて、单刀直入に聞くが……英治。普段ならば手紙で情報を此方に渡してくる御主が、わざわざ此処に戻ってきたのは、如何な理由かの？」

「…………リベンジしたい奴が出来ただけさ。だが、ソイツが問題でな」
「…頭目」と一拍。

ばかりゅう
霸堺流が生きていたぞ

英治の一聲により、恵利央の、部屋の空気が一瞬の間に変わり、堀雄は驚きと共に目

を丸くした。

「…………英治、其奴と戦つたのは何処じや」

居場所を問う恵利央の纏う氣：其れは嘗て、彼がまだ若かりし日に幾戦の戦いを経、長の座を、最強の『鬪技者』に登り詰めた時の其れと同じだつた。

「無法地帯、中。其れも十鬼蛇区でだ。実際に戦つて、俺は負けた。慢心した俺自身が悪かった上、言い訳にするつもりも無い」

「…………合い分かつた。堀雄、英治。本家及び日本中に散らばつと分家の強者達に、大至急召集を掛けとくれ」

「爺様！」

「オイオイ：本家は兎も角、分家の連中まで呼び寄せる。これはいよいよ、タダ事じやないな？」

「四の五の言つては居れん。穩便に済めば其れで好し、そなならなければ仕方無し：じやよ」

日本の裏社会に潜み、生きてきた暗殺集団。
呉一族が動き出そうとしていた……

第四十話 女傑（じょけつ）

水室 涼が野良仕合の最中、新たな技を産み出した日から、三日が過ぎた夕暮れ刻。無法地帯・中、十鬼蛇区の一角にある小屋の前で、師匠である十鬼蛇 二虎が審判を勤める状態で、鬼灯 照との一本先取の組手に挑んでいた。

「——せいつ！」

十鬼蛇 王馬、桐生 刹那が見守る中、涼があの日の仕合で編み出した技を使い、一本を取るべく仕掛けに行つた。

（ツ！『速い』——！）

突進してくる彼の姿勢を見た照と二虎は、心中でほぼ同時に声を上げた。涼が使用したのは、二虎流 火天ノ型の技が一つにして、最速の移動技である『烈火』。

二虎本人から適性と見込まれて以降、彼は時間の隙間を縫つては人知れず、火天ノ型の修練を続けてきた。

重ねた努力が実るように、一瞬で枯草を焼き払う火炎が如く、僅か一秒の内に二人の間に在つた十数メートルは、たつたの3メートルにまで縮小する。

（涼君……火天ノ型を此処まで昇華させたか！）

(こりや、俺の全盛期の火天を超えるか?)

涼の成長を肌身で犇々と感じつつも、今此の瞬間も戦いは続いている。

「霸アツ！」

『怪腕流』^{かいわんりゅう}。其の源流とも言える『琉球空手』から得た、左手による正拳突きを照は繰り出す。

沖縄の地にて圧倒的な実力を見せ付けた黒木玄齋の元で、涼と共に見て、学んだ『怪腕流』^{かいわんりゅう}。其の源流とも言える『琉球空手』から得た、左手による正拳突きを照は繰り出す。

しかし、涼が其処で仕掛けた！

「うおおおおお！・りつつ……！」

涼の身体が一気に『沈み』、照の左正拳突きが空を切る。火天・水天の混合によつて形成される其の技は、直進の特性を持つた火天ノ型の弱点である、『至近距離でのカウンター』から身を守り。

同時に、水天ノ型^{すいてんのかた}が最も得意とする『絞め・極め・捻り』に繋げる下半身：取り分け『腰』の捕縛を行う『炎水』^{えんすい}と呼ばれる複合技。

しかし彼が狙つたのは、照の攻撃を回避しカウンターとして用いる事で、最大の威力を叩き出す金剛・火天ノ型 瞬鉄・爆や瞬鉄・碎ではなく。

己が産み出した新たな技。

「やああああ！」

左正拳突きで放ち、空を切った左手首を右手で取り、自身の手首を、腕を、胴を、ゴムの様に捻り。

利き脚の右で摺り足を行いつつ、左足を組み入れて捻りを増幅。

そして——空いた左腕を照の身体に差し込んで、技を解き放つ。
身体の捻りにより産み出される力を、『操流』で満遍なく操り。

『火天』のポジショニングによつて、其の威力が最大まで伸ばせる、理想的な位置取りを行ひ。

筋肉全体から動こうとする流れを、『金剛』の筋肉硬化で固定し。

『水天』の脱力で、高まりに高められた奔流を、唯『一投』に乗せて、決める。
操・火・金・水。

其の技の名は、二虎流——「つあ?!ぶべつ!」

が、最後の『投げ』の段階で事件は起きる。

捻りを用い増幅された力の流れが、投げる瞬間の涼の軸足から多重に漏れ出し、身体のバランスが崩れてしまつたのだ。

一瞬、投げに全神経を注いだ時に生まれた『緩み』により、慎重に積み上げたジエンガの塔が崩落するのと同じように、涼の足が縛れで地面に顔面から落ちる。

「せいっ！」

「みつ!?」

そして、其の隙を見逃す照ではなく。後頭部を軽く拳を当てて、一撃を加えた。

「照の一本、組手は其処まで」

「一二虎の声が聞こえ、戦いは終わりを告げる。

「だああああああああああ！くつそ、もう少しだつたのに……」

地面に伏したまま、じたばたと悔しさを顕にする涼。

「涼君。さつきの技——決められたら、俺は『確実』に負けてた」

そんな彼に照は、組手の中で決め損ねた技の事を涼へと告げる。事実、照は涼の技に對して、投げ技の返し手たる霸壇流・振り子投げで、カウンターを狙おうとしていた。しかし、もしも。其の振り子投げを使って、彼の技を返していただならば。

『自分の顔面が地面に叩き付けられ、鼻骨の骨折と額から大量出血し、敗北する』——
そんな気がしたのである。

「……だけど『決められなかつた』。其れだけだ……やっぱ、修行が足りねえや」

「でも、さつきの技の流れは殆ど出来てたよ。大丈夫、涼君なら絶対に其の技を完成させ

る事が出来る』

「……褒め言葉として受け取つとく」

両腕で地面を叩いて跳ね、同時に伸びた脚を胸に寄せて、立ち上がつた。此の数年で、涼のフットワークや力の使い方は、格段にレベルアップしている。

「涼君は、凄いね。照さんと互角に組手が出来るなんて」

「……負けねえ」

「ん、王馬なんか言つたか？」

「……別に」

（今の技……もしかしたら涼君が『振り子投げ』を覚えれば、完成するか？二虎流の『鬼麿』^{きおう}に似て非なる技だけど……）

（ああ……こりやあ本格的に、涼には二虎流の技を教えていく必要があるな。アレは……『奥義』に成り得るかも知れん）

先程まで組手をした照と、戦いを見届けた二虎は各々、涼の繰り出した技について考える。二虎流の新たな進化へ至る可能性が、着実に拓かれつつあつた……。

* * * * *

同時刻、呉の里・当主屋敷内大広間。

「皆の衆。遠路遙々集つた事、ハ苦勞だつたな」

惠利央が静かな口調で、目の前に揃つた一族の面々に礼を述べる。

彼の前には日本全土に散らばり、現代社会に溶け込みつつも、暗殺者一族としての使命を果たしながら、今日に至るまで己の武を磨き続けた、呉の猛者達が正座していた。

「惠利央殿、此度は我々分家の面々にも声を掛けさせていたいたのは有難い限りですが…。其が『あの』霸堺流ともなれば、如何なる理由が有るのでしようか?」

付ける男。名を『呉方正』まさむね ほうせいと言い、北陸地方を中心に活動しており、また戦国武将・伊達だての生粹のファンとして、一族の中では名が通つた男である。

「おいでん達も其処が疑問だつた。霸堺流と言えば『戦国時代末期』に途絶えたとされる、伝説の流派。まさが人知れず、技術ば紡がれどつたんか」

鹿児島弁独特の訛りが混じつた声で、力士の如く巨大な体格で捻り鉢巻を額に巻いた、Tシャツとジーンズを身に付ける男児が言う。

男の名は『呉壇定』くれだんじょう。鹿児島出身の呉一族であり、普段は地元の牧場で働きながら生活を経てている。

「商売敵の『因幡流』いなばりりゅうに、千年の対立続く『雷神流』らいじんりゅう。そして私達『呉一族』と、一時期

肩を並べたとも言われる……とか。實に興味深いわ……」

手の甲を使い、独特な方法で眼鏡をクイッと上げる女が、不気味かつ不敵な笑みを溢す。彼女の名は『呉　凜奈』。くれりんな宗家の家系に産まれた彼女は、物心付いた頃より人一倍物覚えが良く、同期から『天才』と称される程の神童であつた。

しかし彼女は其れに傲りはせず、其の類い稀なる才能を磨き続け、一族の中でも頭脳明晰として知られるようになつた。そして、其の抜きん出た知略と策謀によつて、此迄数多くの困難な暗殺依頼を成功へと導く程の知将となつたのである。

集つた呉の強者達が、少しずつざわめき始めた所で「少し――昔の嘶をしようかの」と、恵利央が口を開く。

「遡る事およそ400と20年以上前になる……。当時の呉の当主が病に倒れ、新たな当主を決めんとした一族じやつたが、当時は派閥による利権の対立が酷く、戦争が起きかけた事が在つたと聞く」

彼の口から語られ始めるは、呉の歴史の昔の嘶。宗家に語り継がれていた、彼等の使う『ある武術』の根幹に関わる秘話。

「一触即発の気配が漂つたが、当主が一族同士の争いを血生臭い物にすまいと、『殺し合い』ではなく『戦闘』による戦いの場を設けた事があつての。其の戦いで頂点に立つた者を、次期呉の当主とすると号令を出し、一族の強者達が我こそはと名乗りを上げ、当

主の座を懸けた戦いに挑んだという』

呉一族は基本、同族同士の殺し合いを忌み嫌う。其事が不利益であることを知つてゐるからだ。しかし、呉一族の中にも『過激な集団』も居れば、比較的『穏やかな集団』も存在する。

意見の食い違い、対立が深まれば、一族が一族同士で無益な争いを行い、無意味な血を流す事になる。其れを時の当主は防ぎたかつたのだろう。

「宗家も分家も含め、性別は元より派閥さえも越えた、強者達による其の戦いの中、ある『呉』が並み居る猛者を倒して頂点に立ち、次期当主の座を勝ち取つた。

：察しの良い者なら、既に誰か解るじやろう」

呉の技を身に付けた者、一族として産まれた者、彼等彼女等は『必ず』一度は耳にする。そして其の名を、呉の強者達の中で知らぬ者は居ない。

「其の者の名は『呉くれれいじゅ』鈴成』。

呉の1300年近い歴史上、今尚一族最強とは誰か？——と問われれば、真つ先に名が上がる『女当主』。そして儂等一族が秘技とする『外し』を、初めて『完全解放^{100%}』に至らせた、伝説の女傑じや

其の名に、名を知る者達以外がざわめいた。呉の女傑と呼ばれ、当時の裏社会に関わった人間に知らぬ者無しと言わしめた、最強の女当主。

「当主の座を賭けた戦いに備え、鈴戍は日本各地を巡り渡つては、行く先々で出逢つた武芸者から技術を学び、自らに取り込み、力としていつた。

そして——彼女は『ある者』と出逢い、技を学んだ。其の技と技術を十全に使いこなし、彼女は頂点を取つたのじや。

鈴戍が学び、其の者が使つていた技こそ『霸堺流』^{はかりりゅう}であり。彼女は一族の長の地位に就いた後、其の技術を元にして『格闘戦の技術体系』を確立した。

皆も使つている『呉家伝』^{くれかでん}——其の根幹には『霸堺流』が宿つておるのじやよ

呉一族と霸堺流の関係を語り終え、恵利央はふう⋮と一息付いた。聞いた者達は啞然とした表情で、幼い頃から御伽噺と聞かされた者は、改めて其の噺に息を飲む。

「今回の目的は、其の技術を持つ使い手を我等呉一族の陣営に『引き込む』為だ。

出来得る限り、血を流さずに生かして連れ帰れば理想じやが、万が一抵抗したならば半殺しにしてでも里に連行する。

じやが、気を付けよ皆の衆。霸堺流の使い手は『子供』だが、其の実力は其処に居る英治を倒した程だ。細心かつ十二分に注意せよ。良いな?」

噺を聞いて動搖が残るにも関わらず、しかし一瞬の合間に心と思考を入れ換えるや、ハツ!と一糸乱れぬ声と共に、直ぐ様行動を開始した呉の面々。宗家も分家も派閥も越えた一族全体の兵達による、前代未聞の捕縛作戦が幕を開けた。

照達の運命が今、大きく動こうとしている。

第四十一話 感触（かんしょく）

強いね、アンタ。名前は何て言うんだい？

久しぶりに夢を見た。むかしむかし昔々の、懐かしい夢だ。
話をしているのは……『女』。女特有の円みを帯びた肉質に、鍛えられた筋肉が衣服の
間より覗いていて。

そして一番目を惹かれたのは：彼女の『黒い瞳』。

俺は＊＊＊。さつき見せた技は＊＊＊だ。

俺は彼女と話をした、色々な事を。

＊＊＊：破壊？

違う。破壊じやなくて、＊＊。意味は…そう。

世界を征する

ガンガンガン!!と金属音が耳元で鳴り響き、夢は其処で断裂し、俺は目を覚ました。

「おう、チビ助共。早く起きて朝飯食いな。今日も修行だぜ?」

二虎さんがフライパンと呼ばれる金属で出来た、焼きにも鍋にも使える道具を叩いて、俺達四人を眠りから呼び起こす。

「ふあ…はあい……」

「…おはよう、です」

「…………ん」

「…ああ…ねんみい」

四者四葉の寝起き言葉を溢し、寝床を立つて分けられた朝食の前に座る。そして「いただきます」と手を合わせてから食べる照と刹那、片手を添えてから食べ始めた二虎、我先に食べ終わらせんとガツガツと食べる王馬と涼。

「んぐんぐ…そいや照、前々から気になつたんだけどさ」

「ん?何だ、涼君?」

「……何となく、照と王馬の顔立ちが『ちよつと似てる』って思つた。多分、俺の気のせ

いだと思う」

そう言つて涼は朝食を一足先に食い終わり、個人の修行を行うべく外に出て行く。照は王馬の顔を見るが、数秒しない内に、王馬が食事を終えて席を立つてしまい、観察するには至らなかつた。

此の時の涼の言葉が、後に照や王馬に深く関わる出来事に繋がるが……其れはまだ先の話である。

* * * * *

「お前ら、修行をする前に俺から一つ言うことがある」

朝食を終え、今日もまた修行が始まる其の前に、四人の弟子達を前にして二虎は真剣な眼差しで言つた。

「始めに……涼。今日からお前には、俺の持つ二虎流の技を本格的に教えていく。照との組手で見せた『あの技』。使いこなすには、二虎流の全系統を極めていく必要があると判断した」

二虎さんの言葉を聞いて、涼は驚きと共に目を丸くする。其れも其の筈、二虎流の全系統を学ぶ事は即ち、二虎の奥義を会得する為の下準備と言つても過言では無い。

更に言うなれば、涼が照に繰り出し、結果としては失敗に終わった『あの技』。『アレ』は形に成れば確実に、二虎流の『新しい奥義』として機能すると確信した為だ。

「んでだ、照。お前には王馬と刹那に、戦いの基礎を徹底的に叩き込め。やり方は一先ず、お前の思うようにやつてみて、壁にぶち当たつたら俺を頼れ」

「じゃ、始めるぞ」と言い、二虎は涼を連れて修行に入り、俺は王馬と刹那に視線を移す。「よし…王馬、刹那。二虎さんから頼まれたから、よろしくな」

「はいっ！」と元気な声で返事をした刹那と、返事は返さずとも小さく「……ん」と呟いた王馬。特に刹那は初めて出会った時の暗い雰囲気や、人に対する恐怖の顔色が薄らぎ、笑顔が見えるようになってきた。

「先ず始めに正拳突きを、其の後に足周りの鍛練を行う。休息を挟んで、構えの型作りをやるよ二人共。

俺の身体の型を見ながら、自分の身体を俺の形に合わせてみてくれ」

少年二人に見せるように脚を開き、腰を落として、肩と腕と重心地点の位置を調節し、照は己の身体を以て打撃の型を形成していく。

心と精神を研ぎ澄まし。眼前にイメージするは、鋼鐵の硬度を誇る厳。足首と腰の回転を、背骨と背筋に、肩と腕に在る筋肉へポンプの様に伝導して。

『霸アツ！』と言霊を込め、一撃を放つた。放された拳先から、まるで風が走るように。

彼の周りに漂う空気が、拳の前に押し出された様な氣を、二人は感じた。
 「……と、こんな感じ。声を出すのは二人の自由で構わない。俺もやるから、足腰の位置
 を常に確認して、正拳突きの型を作つていこう」

「は、はい！」

「ん」

そうして刹那と王馬は拳を握り、足腰の重心を意識しつつ、打撃の基礎中の基礎を身
 に付け始める。

千里の道も一步より、蒼茫なる大海も一滴の水より始まるように、二人の少年の道は
 此処からだ。

* * * * *

十鬼蛇区内某所……

「シツ！シツ！シャア！」

草木を刈り切る様な鋭く、鋭利な涼の拳が空に迸る。

「うん……うん……。よし涼君、鉄碎はもう少し肩の力をフツと抜いて拳をグツ！と握つて、
 相手をドガン！つて殴るつもりでやつてみると良いぞ」

「やっぱ二虎さん、口で教えるの苦手でしょ」

「二虎の擬音ばかりの教えに、至極最もなツツコミを入れる涼。彼は現在、二虎流・金剛ノ型の鉄碎を教わっているところだ。

「んう……だけど、照の鉄碎は滅茶苦茶カテエんだよなう……。マジでの拳、釘撃と同じで、まともに受けたら意識飛ばされそうになる」

「お、よく言うじゃねえか。涼君」

照との千を超えて、三千に迫る組手で涼が思考に置いたのは、今まさに自分が鍛錬している鉄碎。筋肉を引き締め、硬化した拳を対象に叩き付ける其の技は、高い練度に至つた者が放つたならば文字通り鉄をも碎く威力と成る。

「鉄碎もそうだが、金剛ノ型は基本的には受ける時や、攻撃する時に其の部位だけを硬めて、相手にぶつける事が大切だ。同じ金剛ノ型や肉体硬化同士でぶつかり合えば、当然より硬い方が勝つ」

「だがまあ」と二虎は、攻略法に迷う涼へ一つ教えを授ける。

「相手の金剛が勝つてたり、そもそも硬すぎて打撃が通らねえなら、別の方法で切り崩しや良いだけの話だ」

「つまり…？」と聞く涼に、二虎は一言『持ち味』だよ」と述べた後、少年の額の中心に指を当てて言った。

「涼、お前の持ち味は『速さ』だ。拳速や蹴りのスピードは四人の中でダントツ：見方を変えりやソイツは、金剛ノ型で筋肉の硬化されない部位、例えば頭や額、脛に足首、後は股間なんかを誰より『素早く』ブツ叩ける。

筋肉や関節は鍛えられても、人体の急所ばかりはどうやつたつて鍛えられねえ。其所を相手の意識より速く叩かれる：相手からしたら、そんだけでも驚異だ。

機動力を潰され、急所を痛め付けられる。其れだけでも戦いじや、十分命取りの要因になる」

自身の強さと武器、そういう考え方も在るのかと、涼はハツとさせられた。黒木の元、照と共に学んだ二年間、鍛える度に唯でさえ格上であつた彼との、絶対的な実力差を感じた日々。

僅かながら、光明が射したような気がした。

「ま、つまり持ち味つて奴は、自分の経験や修練の中で産まれる『武器』だ。武器を沢山持つてゐるのは、確かに強い。だが、そんな武器を沢山持つてゐる奴でも、唯一つ抜きん出た武器に勝てない事だつて在る。

ソイツは既に『氷室^{オホシ}涼』が証明してゐるしな」

さ、金剛ノ型の修行の続きだ。そう言い、二虎は自身の右拳を硬め、近くのコンクリートに鉄砕を放つて破壊する。

其れを辿るように、涼もまた不壊で固めた拳を手頃な岩へぶつけ、拳を伝う痛みや碎岩の感覚を脳に刻み、鉄碎を覚えていくのであつた。

* * * * *

其の日の夜……

「……」

涼と刹那、二虎が眠る中で、一人静かに目を覚ました王馬は、寝床から出て、住居と

している小屋から外に出る。

無法地帯・中における苛酷な環境下で生き残る為、身辺の異常を察知する能力が、誰よりも飛躍的に向上していた王馬。

其の彼が、夜中に浅い眠りから醒めたのも、単に自身の身に付けた感覚が衰えていかないか、確かめただけではない。

『今日は何かが起きる』——そんな予感がしていたのだ。

「む、王馬。眠れないのか?」と、入口付近で胡座座りで声を掛けてきたのは、二虎の弟子の一人である鬼灯 照。戦う時の激情に似た獰猛な表情と真逆の、落ち着き保った表

情は、何を考えているのか王馬には検討が付かない。

「ホオヅキ テル……目が覚めただけだ」

名前を呼んでドカツと座る王馬に対し、照は『そうか』とだけ言つて、其れ以上の事は聞かなかつた。

ふと王馬が横目で照を見ると、彼は左手に小石を取つて、掌の上で転がしている。かと思えば、其の小石を地面に置いては指先で突いたり、輪郭をなぞつてみたりと、不可思議な行動を取つていた。

「ん？・氣になる？」

そんな視線を感付いたか、照が王馬の方へと向く。

「石ころ遊びか」

「…………まあ、そうかもね。王馬の言うとおり『半分』当たつてる」

照の答えに、王馬が抱いた疑問は『半分』という言葉。今、近くに座つてゐる青年は確かに『石を使って遊んでいる』ように見える。

しかし王馬は此處で、照から言われた事を思い出す。『強くなるには先ずは見る事からだ』……其の一言を念頭に入れ、彼の手や指の動きを見始めた。

王馬の視線に照は微笑むと、彼に向けて言葉を紡ぐ。

「俺が使つてゐる霸壙流。其の根幹には、あらゆる物体の『感触』を知ることから始まる

んだ

「…感触？」

「そう、感触」

王馬が僅かながら興味を示したのを、照は見逃さない。彼は少年へ、己が作り上げた霸^覇_堺流の基礎^基_礎の根幹^根_幹を、言葉と行動を用いて教授する。

「地面には地面の、石には石の、木材には木材の。様々な物体が持つていて『感触』を、指や掌、拳に爪先、額や頬、他にも目や耳とか諸々含めた、自分の『全て』で感じ取る。感触から、其の物体へ『最も徹る衝撃を叩き付け、表面から内側へ流し込める』ようになった時。霸^覇_堺流の基礎は完成する」

「そして」と述べ、小石に指先を当て、自分の力を流し込む。其の数秒後、石の内側からビキリと異音が響き、表面には蟬が走つて、バラバラに碎け割れたのだ。

「霸^覇_堺流の基礎を突き詰めた先にある物が、俺や一虎さんが使つてている『釘撃』。^{くぎうち}……流派と呼ばれている武術の殆どは、其の『基礎』が元になつていてる場合が多い。

『基礎の先に奥義が在り、奥義の根幹に基礎が在る』……俺の格言だ】

フツと笑いながら、近くに在つた小石を拾つて王馬の傍へと転がす。彼は辺りを気にしながら其れを拾い、始めは人差し指で突付いて、次に親指と人差し指、中指で摘まみ上げて、掌で転がした。

だが、其れも数秒。二人は直ぐ様立ち上がるや、王馬は腰に納めていたナイフを引き抜き、逆手持ちで構え。照もまた、左腕左足の左構えで臨戦態勢に切り替えた。

「……居るな、大勢」

「ああ…多分なんだけど——」

小屋の周り、もう包囲されてる。

日本の裏側に生きる者達、吳一族。鼠一匹たりとて逃がさぬ意志が、固い決意の包囲陣を作り上げた。

照達の運命はゆつくりと、確実に定められた道に進もうとしている。